

ウマ娘オグリン伝説

まとらよ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

トレセン学園の生活を具体的にドラマCDなどを参考にしながら、ゲームをプレイしたことがない人にもわかりやすく面白くなるように噛み砕きながらトレナーとオグリキャップの成長を描く小説ですが、何が役に立つのかわからない育成や思い出したかのようなシリアスが現れます。アプリの育成シナリオに沿いながら進んでいきます。

目次

芦毛の迷子	1
芦毛の模擬レース	6
芦毛の森	13
皇帝と女帝の精神疲労	21
芦毛の選抜レース	33
芦毛の食いしん坊	47
高知のアイドルと地獄の一日	55
芦毛の皐月賞	70
芦毛のビート板	81
芦毛の決意	93
芦毛と時計	109
芦毛のダービー	129

芦毛と勝負師	146
芦毛と皇帝と帝王とトレーナーのレース	152
芦毛とマツドな合宿	171
芦毛と未確認生物	179
皇帝と地獄の鬼ごっこ	189
不沈艦と焼きそば屋台	208
芦毛の神社	216
芦毛とビデオ	223
同期と畑	231
芦毛と母性の合宿	239
芦毛とお出かけ	246
芦毛と夏祭り	254

無人島と鍋

皇帝と決闘（デュエル）と野球

芦毛と狂気のローテーション

芦毛と雪と記憶

278

301

327

335

芦毛の迷子

私はトレセン学園でトレーナーをしている者だ、

トレーナーの仕事は学校の部活動の顧問のようなものであるのだが、私はまだ自分のサークルやチームを持っておらず、今は担当ウマ娘もいない給料泥棒という訳だ。

このままでは秋川理事長に「解雇！君に用はない！」と言われてしまう。

という事で選抜レースを観に行こうと行きたいんだがそれだけでは駄目だ、強いウマ娘のトレーナーになるには事前にもウマ娘と仲良くなる必要がある、

この仕事は信頼が無ければ何もできない、長々と話しているが信頼は本当に大切だ具体的にトレーニングの時とか

今日はひとまず俺の過去の栄光でもある最強のウマ娘シンボリルドルフがあるとあるウマ娘と模擬レースをすると教えてくれた、

ルドルフがわざわざ教えてくれるようなウマ娘だとても強い賢くてユーモアが溢れるウマ娘だろう、

まあユーモアは要らないし賢くなくても自分の強みを知っていて私の言うことを聞

いてくれればそれなりに強いウマ娘にはできるはずだ。

そう考えながらターフに向かうと大量のトレーナーが見えてしまった、

ライバルの多さに期待も高まるがこの中から私をトレーナーに選んでくれるだろうかというのが頭によぎる、ひとまず見やすい場所でルドルフと白い髪の毛の転入生の模擬レースを見守った。

ルドルフが何故か爆笑しながら転入生から離れていった。

私は衝撃を受けた、このウマ娘、オグリキャップならばシンボリルドルフを超えるような強いウマ娘になるだろうそう確信できた、

何とかして彼女の担当トレーナーになり栄光を掴みたい彼女の夢を見たいそう思えた。

ルドルフと離れたあとオグリキャップがどこかへ向かって歩きだした。

私は他のトレーナーと同じようにオグリキャップをこっそり観察していた。するとオグリキャップが同じ場所を何度も歩いていった、

先輩たちが「少し変わった子なのかしら」や「わからない、僕には何もわからない」と言い帰っていく中、わかってないな〜とおもいながら私は更にもう一つの確信を得ていた、

強いウマ娘には変な癖がありそれが強力な武器になっている、サイレンススズカは四六時中左回りし続ける癖で左回りのコースで素早いコーナリングを發揮した、

シンボリルドルフはダジャレで他のウマ娘の調子を落とさせて勝利を得ていた。

オグリキャップ彼女のあの同じ場所を何度も歩き続けるのも理由があるはずだと思わずと彼女を見守り続けた、

途中ストーカーに間違えられそうだったが夕方までオグリキャップを見つめていた。

何かがおかしい

オグリキャップはもう2時間以上歩き続けている、いくら何でもこれはヤバいもう埒が明かないのでオグリキャップに話しかけた。

「やあオグリキャップさんここで何をしているんだい」

「ここは不思議な場所だな、全く同じ見た目の場所が幾つもあるんだな」

「いや違うからな！もしかしてと思っていたが迷子になっていたのか？」

「迷子？…ふむ、そうかもしれない。」

「…ところで君は誰だ、そういえば、知らない顔だ」

「トレセン学園のトレーナーだ」

「トレーナー…では道がわかるのか？」

「寮に戻りたいんだ、道を教えてもらえないだろうか」

オグリキャップに道を教えると理解したようだ。

オグリキャップは帰路についたようだ。

オグリキャップが3分後戻ってきた。

「……！さつきと全く同じ顔の人間が……！まさかドツペルゲンガーか！」

「違うわ！君が全く同じ場所に戻っただけだ」

「カサマツの時は覚えやすかったから、道を覚えていたが都会は建物の距離が近いし、よくわからない」

「ハア…その様子じゃ一人で帰れそうにないな、寮の前までは案内してやるからついて

「はい」

私とオグリキャップはこうして出会った。

ちなみに寮に男性トレーナーは入ることができないんだが、この日オグリキャップがご飯の香りがするまで寮内を彷徨ったのはまたの機会に話そう

芦毛の模擬レース

オグリキャップの案内をした数日後、オグリキャップとまた合うことができた、また迷っているようなので案内した、今度はトレーニングコースにいきたいようだ。

オグリキャップをコースまで案内した

オグリ「待たせたな、タマ。」

タマモクロス「おつ、来たなオグリ！よろしよし偉いで、コースまでの道順やーっと覚えることができたんやな」

「迷子にならんか心配やったんやけどな。ウチかていつでも案内でけへんやろうし、心を鬼にした甲斐があるっちゅう——」

「私が案内しました」

「つて結局連れてきてもろたんかーい!!」

「……ま、まあええわ、ほな、早速模擬レース始めよか！」

「そうしよう、準備してくる」

「ノリが悪くてすまない」

「つて、いきなりツツコミ入れて、待ったウチも悪いわ、でも次は反応してくてくれや」

「任せてくれ」

「ウチも準備せんとアカンから、また後でな」

さて、シンボリドルフに続き今度の模擬レースの相手も既にデビューを叶えた強豪ウマ娘、タマモクロスだった。

となるとオグリキャップの実力を見たいウマ娘たちが見に来る訳だ、しかもタマモクロスはオグリキャップと同じ芦毛のウマ娘、話題にもなりやすい、それをオグリキャップはわかっているのだろうか？

「やけに騒がしいな、もしかしてこれからここでお祭りなのか？」

「違うぞ!?二人の模擬レースを観に集まってるんだぞ」

コイツメンタルまで大物だったのか!?

「えっ……そう、なのか。他のウマ娘たちが、こんなに……」

「むむ……」

「もしかして、オグリキャップ緊張してるのか？」

「いや、その、……故郷だと笠松だと、こんなにたくさん、同い年くらいの子たちに囲まれることがなかったものだから……。」

「慣れないせいか……むずむずするんだ。」

「食事のときもそうだ……お皿に山盛りにご飯を盛っているとどうしても注目されて

……。」

「それが苦手で、最近は部屋で食事を——」

「君は食事を多めに取るんだろう？ならば食堂で食べたほうがおかわりもしやすいからいいぞ、君が珍しいから注目するんだ、それに何日も続ければみんな慣れて目立たなくなる」

君が多めに食事を取るといふのはルドルフから聞いている、だがそれも個性だ、それにいつぱい食べるのは良いことだ。

「……そうか、何日も続ければ目立たなくなるのか、ありがたい、君は頼りになるな」「おーおー。待たしたな、オグリ！バツチリ準備できたで——……。」

「つて、おお!?すごいギャラリーやな！」

「あ、タマ」

「なんやオグリ、緊張しとんのんか？そんなんやったらG1なんか出られへんどく？」
「ま、緊張するようやったら、あの子らの顔せくんぶ「たこ焼き」やと思つとき！」

タマモクロス有能過ぎないか偉そうに言っていた自分がすごく馬鹿に感じる、即効性もあるし後々応用も聞くし賢いウマ娘として記憶しておこう。

「……そうか、わかった。やってみる。」

「……………お腹が空いてきてしまった」

「な、難儀なやつぢやな……。」

そうして二人のレースは始まった

「ふっ……!!」

「浪花のど根性、みせたるでえーっ!!」

距離は800m。2人の健脚が地面をえぐる、両者互いに全く譲らない

「むうっ……!!」

「オグリ……!!まだまだこっからや!!」

二人は抜きつ抜かれつを繰り返した。

まさかの同着同タイムという結果になった

しかし驚いた、いくらオグリキャップでもタマモクロス相手では模擬レースとはいえ
厳しいだろうと考えていたがこれ程までの力を見せるとは800mというのを加味し

ても素晴らしい結果と言える

「はあつ、はー……！やるやんけ、オグリ！」

「タマ……君も速いんだな。予想以上だ」

「君たちすごい青春してるな」

「へっ、せやろ？けど次は、もっともつと予想を超えたるで。」

「——よっしゃ、気合入ったわ！でも走って来よかな、ほなまた後でな、オグリ——」

えっ!?俺の話はガン無視するのタマモクロスさん!?

「お疲れ様。いいレースだったぞ」

「あつ、君見ていてくれたのか。」

俺の存在は忘れられていたのか結構喋ってたし、解説までしてたんだけど

「ま、まあいいや」

「……？なんだか不思議な気分なんだ。私は心臓が強い方らしくて、レースの後でも、すぐ鼓動が落ち着いていたんだが……。」

「今は……ずっと、鼓動が速い。さっきのレースを思い出すと、どうしてもドキドキするんだ。」

「すごく不思議で……心地いい感覚だ、これは……興奮、だろうか……？」

「恋だな」

「……そうか！これが恋なのか、中央に来て初めて感じたこの感覚これが恋なのか!!」

オグリキャップは余韻を惜しむかのように、いつまでもその場に立っていた。

じゃない!! やばいオグリキャップギヤグ通じるけどたまにへんな勘違いするタイプだ。

「オグリキャップさっきのは違うからな、よく考え直すんだ。」

「冷静に考えてレースから始まる恋があるわけ無いだろう。」

「いいか? 今のはライバルができたから、思えた感動と言うものなんだ。」

「いやー、二人はいいライバルになれると思うなあ」

「……恋というのを経験したことがないから、グラスワンダーに相談しよう。」

「だから恋じゃないって!! それに何故にグラスワンダーなんであのレズウマ娘に聞くんだ!」

あかんガチで恋が始まる。

こういったやり取りがオグリキャップがお腹を空いて恋のことを忘れたあと、二人はライバルだと教えるまで続いた。

芦毛の森

タマモクロスとの模擬レースから数日後、——とても熱心にトレーニングしているオグリキャップを見かけた。

気迫のあるトレーニング風景に見入りながらも話しかけた。

「やあ、元気かい、オグリキャップ」

「今日もオグリキャップとの交友を深めていこうか」

「む？……キミは……。」

「……少し呼びづらそうだな、…次からは、オグリと呼んでくれないか」

「これは……仲良くなれた証拠だよな?？」

「かなり不思議な娘だからそこいらへんはよくわからないな」

「ありがたい申しでだ、是非そう呼ばせてもらおうよ。」

「話を変えるが、随分張り切ってるな」

「ああ。……実は次の模擬レースに出られることになったんだ。」

「参加応募は私が転入してきた、時点で締め切られていたんだが——」

「この間のタマとのレースを学園の人が観て、特例で許可を出してくれたらしい。」

「それに、選抜レースに出れば中央でのデビューが近づく……鍛えておかねば。」

まあそれに関しては俺もルドルフにも頼んだし、特例を作るのはあまり良くないとエアグルーブに止められているのに認めてくれ、後押ししてくれたと言うことは、ルドルフもオグリの中央での活躍を早く観てみたいだろう。

「よかつたな、模擬レースでの活躍期待してるぞ」

「あつ、そうだ……何度もすまないが、また一つ案内を頼んでもいいか？」
「任せてくれ、それでどこに行きたいんだ？」

学園裏の森

「学園の近くにこんな森があったのか……大発見だ」

「やはり森の空気はいいな、澄んだ気持ちになれるし、落ち着く。」

「昔は、こういう場所ばかり駆け回っていた。そしたら故郷のみんなが『ウマ娘レースに出てはどうか』と勧めてくれたんだ。」

「それがレースに出るきっかけか」

「ああ。……みんなが、私を応援してくれた」

「地方のレースに初めて出ることになった日は私のために立派な横断幕を作ってくれた。……畑仕事で、みんな忙しい筈なのにな。」

「レースに出た日の夜は、いつもみんなが集まってごちそうを食べた。勝っても、負けて

もだ。」

「『楽しかった』『元気が出た』『これからも楽しく走ってくれ』……私はいつもそんな言葉に囲まれていた。」

「……だから私は、走るのが好きだ。」

「レースに出て、みんなが盛り上がってくれるのが大好きなんだ。」

私がこのウマ娘、オグリキャップに惹かれた理由は彼女の走る理由のお陰なんだろう。

彼女は本当に天性のスターウマ娘なんだ。

「……故郷の人たちのことが本当に大切なんだな」

「もちろんだ」

「故郷のみんなは、『私がレースで楽しそうに走っているのを見られるのが何より、嬉しい』と言ってくれた。」

「この前のタマとのレースは……楽しかった。今でも思い出すと、鼓動が速くなる。」

「デビューして、タマのように強く、速いライバルたちと楽しいレースができるのなら——」

「私はすぐにもデビューしたい。」

オグリキャップの目の中には強い決意が滲んでいた。

「立ち話が過ぎたな。トレーニングに戻らねば。」

「案内、助かった、ここなら初心を思い出しながら走れそうだ。」

「では、失礼する。」

そう言つて、オグリキャップは軽快に走り去つていったが――

「あ……」

オグリキャップが突然その場でうずくまつた!!

「大丈夫か!? 痛い場所はないか!？」

「ん……? どうしたんだそんなに血相を変えて。」

「いや、急に故障でも起こしてしまつたんじゃないかつて……」

「ああ、いや違うシューズの紐が切れただけだ。」

言われてみるとオグリキャップのシューズは、だいぶボロボロになっていた。

「昔からこうなんだ。私は、すぐシューズを壊してしまう。」

「また買い替えにいかないか……」

紐を結び直してオグリキャップはふたたび走り出した。

にしてもあのシューズの様子は異様だ。恐らく、彼女の地面をえぐるほどの脚力に、シューズが耐えられないのだろう。

あのままではオグリキャップは最大限の実力を発揮出来ない。

ならば私のすることは一つだ！

「うーん、相変わらずどれもええ値段しよるわ……。」

ラッキーだな、シューズシヨップにちょうど賢くて頼りになるスーパーウマ娘のタマモクロスさんがいるじゃないか。

「つて、ん？アンタ、最近よおオグリと一緒にいる、新人トレーナーか？」

「一応、前の理事長の時からいるんだけどな」

まだ23歳だから、大学卒業して、試験に合格したての新人と同じくらいの年齢だから間違えられるんだよな。

「……なんや、けつたいな顔しとるなどないしたんや？」

「年下の女の子にため口使われて、舐められまくってる自分にガツカリしてるんだ」

「……すまんや、まさかそんなに気にするとは思わへんかったんや」

「冗談だ」

「つて！冗談かい！深刻な雰囲気でゆうから驚いたわ！」

「半分本音なんだが、それを置いておいてだな。」

「どうやら、オグリキャップの脚力が強すぎて今履いているシューズがボロボロだから新しいシューズを買ってやろうと思ってきたんだが、サイズ分らないしどれを買おうか悩んでいたんだ、ちなみに必要なのはとびきり頑丈なやつだ。」

「それならウチがオグリの靴のサイズ知つとるし、あいつは、ぼーつとしとる奴やし、選抜レースは全力をトレーナーに見せる場所やからこのままやとフェアやないから協力したるわ。」

「とびつきり丈夫なシューズ、ウチも一緒に選んだるで！」

「ありがとう、流石はスーパーウマ娘のタマモクロスだ。」

「ん、なんやスーパーウマ娘って？」

心の声そのまま出ていたようだ。気をつけよう、一応真面目でやってるのにバレたら面倒だ。

「まあ、気にするな、しかし本当に君はオグリに優しいな。」

「しつかり全力見して、とつととデビューしてもらわんと、もっかい走りたいっちゅー、ウチの願望もあるからな！」

「ほな、選んでこか！で、予算はなんぼや？そこ、一番大事やろ！」

「実は給料の3ヶ月分持つてきたんだ。」

「つて！結婚指輪ちやうんやぞ?!お前からまだ会つてから一月も経つてないやろ!」

「オイオイ、タマモクロスさん知らないのかい？トレーナーはウマ娘に最初に買つてあげる靴は給料の3ヶ月分買つてあげてやる気を上げるといふ風習を」

「は、そんな風習があるんやなー。」

「もちろん嘘だ、こんな嘘に騙されるなんてさては子供だな。」

「うるさいわ!!誰が子供や!!」

「ハハ！もしかして身長気にしてんのか？可愛い奴め、なぐに高等部に入ってからも大きくなる子もいるから問題ないぞ。」

ブチ切れたタマモクロスをなだめて、オグリキャップの走りに耐えうるシューズを選んで購入した、ちなみに領収書を取つておいてルドルフに全力で頼むと予算としておろしてくるぜ、さすがは会長、こういう時理事長より権限が強いかもしれない、昔はわからなかつたけど最近理事長に若干避けられてる気がするし、ルドルフに頼もう。

まあたまに他のトレーナー以上に生徒会の手伝いをしているから融通が少しだけ効くんだろう、デビュー前のウマ娘に関してはそのままでサポートされる訳ではないんだが

大丈夫だろう。

ちなみにシユーズの値段はゲーム機1台買える値段と言っておけば大体伝わるだろう。

??? 「彼は元気になっているのだろうか？ また彼と共にレースに出てみたいな、オグリキャップとも仲良くなれただろうか。」

??? 「また彼が必要な依頼が来ないだろうか、………そういえば、彼の部屋は確かウマ娘のトレーナーをしているあいだはホコリとか溜まって汚れるんだ。」

??? 「よし、エアグルーヴを連れて彼の部屋の掃除に行こう。エアグルーヴの息抜きにもなるし私も彼と話せると嬉しいからな」

皇帝と女帝の精神疲労

朝9時頃

さて、オグリキヤップに靴を渡しておいた。恐らくオグリキヤップから私への好感度は更に上がり模擬レース後、「私のトレーナーになってくれないか♡」って言われること間違いなしだ。いやー困っちゃうなくG1とか荒らしまくっちゃうなく。

そうなると私の給料もうなぎのぼり、担当ウマ娘のグッズが売れば俺にもお金が入る最高だよ、この仕事、まずはテツパンのオグリ人形だ、で次にオグリキヤップのCDだ。オリコンとか間違いなく載るだろうし大成功間違いなしだ。ルドルフの時は思いつかなかったことがドンドン浮かぶなあー、いやーこれも成長だな、

よーし今日は明日の模擬レースに向けてライバルのウマ娘たちについて調べてオグリキヤップに伝える作戦を更に完璧にしておこう。

コンコンコン、

おっと小気味よい音のノックが鳴り響いたな、オグリキャップがもう「私のトレーナーになって♡」と言いに来たのかなー、ガハハハ

さて、ハイテンションは一旦終了だ。この様子を他のウマ娘に見られたらドン引きされるからな、仕事もこなすし、クレバーな所が魅力の私のイメージが損なわれるからな。

という事でドアを開けると、私の元担当ウマ娘のシンボリルドルフとその右腕エアグルーヴがいた。

「久しぶりだな、ルドルフ、エアグルーヴも元気にしていたか？」

ルドルフ「トレーナー君こそ、最近は元気そうで何よりだよ。」

「少し前までは、特にすることもなかったからな」

エアグルーヴ「お前はすぐ腑抜けるからな、私がたまにお前の監視をしてもいいんだぞ」

「エアグルーヴお前は本当に俺に厳しいな」

「当然だ、会長の元トレーナーとして貴様が腑抜けているのが我慢ならんのだ。」

「つで、二人は今日は何をしに来たんだ、飯なら奢ってやってもいいが？」

「今日は、君の部屋の掃除に来た、ほら昨日連絡しておいた筈だが。」

「どれどれ、思いきりメールにあったわ、昨日はうわの空で気づけなかつたなあ。」

「フフ、君が楽しそうで何よりだ。」

「会長、そんなにこの男を甘やかしてはいけません、甘やかしすぎるとすぐまただめになるでしょう。」

「彼は、普段は覇気が感じられないがレースの準備期間に入るととても頼りになる。だから普段は気が抜けている位が丁度いいんだ。」

「早速だが、エアグルーヴ掃除するか？」

「当たり前だ、ここまで来たんだ、しっかりスッキリさせてやる。」

エアグルーヴの掃除中の様子

床の隅にこれだけの埃が：フフフ、すべて私が相手にしてやる

フフ、テレビの裏にこんなにも埃が積もっているじゃないか、こんな時はクイック○ワイパーで一掃してくれるわ。

オイオイ、この本棚の上にも埃があるじゃないか、これははたきでホコリを落として掃除機でまとめてキレイにしてやる。

アルミサッシの端には青カビが少しあるな、貴様にはたつぷりと重曹とクエン酸を味

合わせてやろう。

シンボリルドルフとトレナー

「エアグルーヴ、やっぱりいつも掃除中はテンションがおかしいな」

「彼女もそれだけ夢中になっているということだ。」

「ルドルフ、エアグルーヴが掃除を終わった時の為に少し何か買いに行こう」

「確かにあの様子だとエアグルーヴも後々こつちも掃除しそうだし、一旦買い出しに行つたほうが良さそうだな。」

「賢明な判断流石だな。」

「やっぱり、ルドルフ君は俺に優しいな。」

「それは君のことが好きだからだよ。」

「ハハ、冗談はやめてくれよ」

「君がそう言うならそういうことにしておくよ」

「さて、それじゃあ車回してくるわ、ルドルフ君が好きなデートだぞ」

「ああ、とても楽しみだよ」

ルドルフが久しぶりにとびきりの笑顔を見せてくれた、おつと勘違いをしているわけではない、ルドルフはどうやら私に懐いてくれているようだからな、大切にしていやらな

いとな。

シヨッピングセンターについて。エアグルーヴは一度掃除を始めると半日は続けるからな、ルドルフも生徒会大変だろうし今日は労つてやろう。

「ルドルフ、お菓子や料理の材料を買う前に少し遊んでいくぞ。」

「ああ、今日は何処で遊ぶんだい？」

「まずは映画館だ、今日は君の好きそうな映画が公開される日だからな」

「映画館に来るのは久しぶりだし、楽しみだよ。」

俺はまずチケットを並んで買った後、ポップコーンとソーラのコーラを買った、映画館ではこの黄金セットは欠かせない、ルドルフにももちろん奢った、そして私達が見た映画は、復刻公開映画幻のウマ娘だ、無敗で十勝クラシック2冠を制したが、怪我により敗北する前に引退してしまった。ウマ娘をモデルにした、感動できる映画だ。

「火事のトラウマを克服出来たのに、走れなくなってしまうとは、悲しいものだな」

「最後に次の時代のウマ娘に自身の経験からウマ娘をサポートする立場に変わりウマ娘達を支え続ける、私もこの映画から学べるがあった。」

「まさしく、老成自重、経験こそ生涯の宝と言える。」

「あの映画のモデルになったウマ娘がトレセン学園にいるらしいがどうなんだろうな。」

「それは、あまり詮索するのは悪いかもしれない、もしかしたら、根も葉もない噂かもしれない。」

「ああ、もちろんだ、あの話は映画だから素晴らしいんだ、現実に自分の担当ウマ娘がそうならないよう気をつけるさ。」

「ヨシ、次はお菓子と昼ごはんを食べにいこうぞ。」

「あまり遅くなりすぎるとエアグルーヴに悪いから食事を買ってすぐにも帰ろうと思っただが、……その様子だと何か用意してあるようだね。」

「実は、昼頃に家に代金を払った出前のラーメンを頼んでおいた、大丈夫だろう。」

「それで何処に向かうつもりなんだい。」

「マ○ドナルドだ、最近ジンジャーココクが出たから飲んでおきたい、あとルドルフも他のウマ娘と来ることがあるだろうから慣れておこう。」

「ファストフードはあまり食べないが他の生徒たちもよく立ち寄るらしいから、一度詳しく見ておこうと思っただ。」

「じゃあ行くぞ。」

このとき、ルドルフは手を握ってきた、あまり来ないらしいから迷わないための配慮

だろう、今日は土曜日の昼過ぎ、客も増えてきた、さてフードコートよりは少ないだろうし、さっさと済ませよう。

マク○ナルド

俺が頼んだのは、エグ○のセットにサイドはポテトのドリンクはジンジャーコークだ、まずはハンバーガーをひとくちほうばる、マクド○ルドに来ると毎回食べるものだ、何度食べても飽きないちようどいい味で素晴らしい、次に期間限定メニューのジンジャーコークだ、少し飲むとわかる、これはハンバーガーと一緒に食べることで最高のものになるのだと、この甘さの中にも辛味がありこの味はポテトにも手が進む、そしてポテトを食べるとジンジャーコークに手が出る、素晴らしい永久機関の完成だ。次のノーベル賞はマクドナルドのものだろう。

しまった、映画で飲んだコーラとジンジャーコークがかぶってしまった、俺今日だけでコーラ1、51ぐらい飲んでるんじゃないか、まあ美味しいからOKだ。

俺は並んで食べるのが嫌いというわけではない、ただ人を待たせた状態で食う飯がそんなに好きじゃないだけなんだ。だからファストフードは好きだ、基本行列が出来ないからな。

ルドルフも思ったより美味しそうに食べているじゃないか可愛いから奢ってあげよう。

食事をすませたあと

「ヨシ、今度は買い物に行くぞ、晩ごはんも食べていくだろう？」

「ありがたく、頂戴するよ。」

「さて、今日は卵がセールの日だし、野菜も安いし色々買っておこう。」

買い物後

「ところでオグリキャップとは、仲良くしているようだね」

「ああ、俺はルドルフ以来の天才が現れたと思ったし、何とか専属トレーナーになれたらなって思ってるよ。」

「私のトレーナーに復帰してくれてもいいんだよ。」

「あまりそういう冗談はしない方がいい今のトレーナーにも悪いからな。」

「私は君と共に歩んでいた時の方が私の目標に近づけ心強かったと思うんだ。」

「レースの結果は今のトレーナーの方が安定しているぞ。」

「私がクラシック三冠を達成できたのは君がいたからなんだ。」

「俺の力なんて微々たるものだ、生徒会の仲間たちの方がお前の役に立ったはずだ。」

「それでも君と共に歩みたいんだ。」

「俺がお前のそばに居てもお互いの為にならない。」

「もう……わたしとともに歩んでくれないのか……」

「俺はお前の夢を信じている、すべてのウマ娘が笑顔に過ごす世界を、応援もするよ、だが今はオグリキャップがどうなるか、それを見届けたい。」

「君は本当に前に進んだんだな、私はまだ進めていないのかも知れない、だが諦めないよ、いつかまた私ともう一度歩みたいそう思わせてみせる。」

「ああ、楽しみにしてるよ。それに俺にも夢があるからな。」

そう言つて俺たちは少し気ますぐりながらも家路についた。

「エアグルーヴ、掃除は終わったか？」

「ちようどいい時間に帰ってきたな、今風呂の掃除が終わる所だ。」

「お前風呂の掃除もしてんのか!？」

「当然だ、徹底的にすると決めていたからな。」

「マジか、スゴイ気まずいわ。」

「それじゃあ、エアグルーヴの掃除が終わるまで食事の用意をしよう。」

今夜はカレーだ、なぜならカレーが嫌いな人間はいないからだ。正直言つてスパイスとかよくわからないがカレールの元があれば美味しいものは出来る、あと多めに作るからオグリキャップに餌付けしておこう。

「次の選抜レースだが、どうやらオグリキャップ以外にも期待の新人がいるんだ。」

「ああ、スーパークリークだろ、とても速くて母性の溢れる子だと聞いたが、オグリキャップのライバルになるウマ娘だと思い、すでに調査してある。」

「スーパークリークはスタミナを貯めて、勝負所を見極めてスパートをかけるタイプだ。」

「対する、オグリキャップはその高いパワーとスピードで前方から更にスパートを掛けて他のウマ娘を抜き去るスタイルだ。」

「一見似ているが、かなりタイプが違う、スーパークリークは前方の逃げ切りより、オグリキャップは前方の差し切りより、うどんとそばのように互いの強みがある。」

「正直言つてどちらが勝つかはまだわからない。」

「だが、勝たせるつもりだろうか？」

「もちろんだ、オグリキャップには夢があるからなすぐに叶えさせてやるさ。」

「カレーができたようだ、ところで生卵は入れるか？」

「生卵？」

「関西の方では生卵を入れるらしい、ちょうど中辛だし卵の甘みが合うだろうしな。」

「なるほど、よし、私も一つ入れてみよう。」

「私の分も卵頼むぞ」

卵入りカレー実に素晴らしい、今回のジ○ワカレーは中辛だ、バー○ントカレーの辛口より辛いから、これくらいの辛さに卵がよく合う。にんじんが何故か三日月型だがルドルフがしたんだらう目にもよい素晴らしいカレーだ。カレーにはやはり牛肉だ豚肉も美味いかなんか肉って感じが感じられないんだ。あとペットボトルでコーラ1.5l買ったけど俺3食コーラ飲んでんじやん、なんだろう、虫歯に近づいた気がするなあ、あと肉じゃがは何故か豚肉の方が美味しく感じるんだ、不思議だな、とにかくカレーはいつ食べても美味しいそれに尽きる。

「さて、門限も近づいてるし、送り届けるよ」

「ありがとう、これで門限破りはしなくて良さそうだ。」

「俺が最初から送るってわかってたろ。」

「ところで掃除中の私はどうだった。」

「安心しろ、いつもどおりだったよ。」

「そうか、ならいいんだ。」

二人を送り届けたあと

やっべ、模擬レース明日やんけ、俺今日コーラ飲んで、奢っただけじゃん、俺スーパー
クリークが母性溢れるウマ娘ってことぐらいしか知らないわ、偉そうに言っただけどル
ドルフからも話を聞くべきだった。

まあ大丈夫か、靴も新しくしてフルパワーになった、オグリキャップに勝てるウマ娘
はそうそういないだろう。

そうと決まれば明日オグリキャップに餌付けするカレーを多めに注ぎ足しておこう。

明日は祝勝会をするぞー

芦毛の選抜レース

選抜レースの5日前……

オグリキャップの脚力に耐えるシューズを渡した。

「シューズを、私に？」

「……なぜだ？ 私は、まだ君の担当ウマ娘でもないのに。」

まだ、だど!?、オイオイオグリキャップさんついに私に落とされてくれたようだな。
ククク……安心しろ君を日本一のウマ娘にしてやろう。

「選抜レースはウマ娘の全力をトレーナーに見せる場所だ、タマモクロスもそう言っている、そのままの靴では君は全力を出せない。そして公平なる勝負は最も大切なことだ。」

「なるほど、タマが……。そうか、そういうものなのか。」

「……わかった。気遣いありがとう。今日から履き慣らして、本番に備えるよ。」

それから、新しい靴を履いて走るオグリキャップを、しばらく見守った……。

やっぱりあまり信用されていないんじゃないか、いやだって、【なるほど、タマが……】
だぞ、俺の部分全く聞いてないんだから、タマモクロスに全幅の信頼を寄せているのが
わかったけど、俺実はまだ、信頼されていないんじゃないか？

「はっ、はっ、はっ——ふ……ははっ、ははははっ!!」

「すごい!!脚が、軽いぞ……!!」

「はあっ、はあ……。」

「改めて、お礼を言わせてくれ。」

「ありがとう。これは……最高のシューズだ。大切に……!」

耳がピンつと立っていて上機嫌なのがわかるな、顔ではよくわからない子だと思って
いたが、身体(耳)は正直じゃないか

「楽しそうで何よりだよ。」

「……………っ。」

「あ……あれ？なんだ……？」

「どうした？」

「いや……その。すごく、なんというか……。」

「懐かしい感じがして？」

恋だな初恋を思い出したんだ、ってふざけて言おうと思ったが、前回それでかなりま
ずいことになったからなここは自重しよう。とぼけるか

「懐かしい？」

「あ……いや、すまない、忘れてくれ。」

「とにかく、シューズありがとう。選抜レース、必ず全力で走ってみせる。」

選抜レース4日前

あの幻のウマ娘が復刻上映だと絶対観に行かなくては、いやでも、一人映画はボツチ
感があってやだな。

選抜レース3日前

そうだ、トレーナー仲間を誘えばいいんだ。よし、早速桐生院を誘おう。

選抜レース2日前

断られた、しかも女の子誘って断られたから男としてかなり惨めな気がする。仕方ない、もう一人の年下後輩を誘うか。

選抜レース1日前

断られた、選抜レース観に行く準備があるから無理ですって言われた。ごもつとも過ぎてぐうの音も出ない。てか新人誘って何してんだ俺は、そう思ってたらルドルフとエアグルーヴがきた。エアグルーヴが週末にしようと思ってた掃除をしてくれるし、ルドルフを連れて映画を観に行こう。

選抜レース当日

……何も調べてねー!!馬鹿だよ俺はホントバカ、ルドルフに今日の選抜レースについて聞いておけば万事解決なのに聞いてないのホントバカ、5日間遊ぶことしか考えてないのもホントバカ、俺がした役立ちそうなことってカレー作ったくらいだぞ。オグリキャップ多分俺が何か凄いことしてると思ってるかもしれないのに、俺がしてたのは

遊ぶことだけ、ホントバカ！

いやでも最低限の情報は持っている、オグリキャップは昼からの選抜レースに出走する、そしてもう一人の期待のウマ娘スパークリークも出走する是非観に行かなければ、

！
G1レース並みの盛り上がり会場を包んでいた……！すごい熱気が伝わってくる

「これが本当に選抜レースか……末恐ろしいな」

「わあ、すごい数のお客さんですね〜。」

「ああ、そうだな。選抜レースというのは、いつもこんなに盛り上がるのか……。」

「いいえ、いつもはここまでじゃないんですが……。誰か有名人でもいるのかしら〜
……？」

「有名人か……なるほど。」

選抜レース係員A「スパークリークさん！そろそろご準備の方、お願いします！」

「はあ〜い、では、失礼いたしますね〜。」

「ああ。」

「……………いまの、誰だったんだ？」

教えてやるべきだった、まさかそこまで何も知らないとは

注目されてるのに、ふたりともかなりマイペースだった……

——だが、レースが始まると二人共圧倒的な走りで大観衆に魅せつけた！

俺はそれを後ろの方で腕を組みながら見守った。

実況「オグリキャップ追いかける！出だしの遅れを感じさせない走りだ！」

「オグリが追う！オグリが追う！クリーク逃げる！逃げ切れるか！オグリか！クリークか——」

……………結果、オグリキャップの成績は、スーパークリークに次いで僅差の2着だった。

「2着、か。」

「新しいシューズで、全力で走って……………それでも、2着……………」

気まずい、勝つと思ってたから祝勝会の準備もしてるのがかなりまずい

「……………すごいな。デビューすれば、タマヤクリークのようなライバルたちと、これからもたくさん走れるのか……………」

「うん、すごいことだ……。楽しみだ、とても……!」

中堅トレーナー「オグリキャップ!お疲れ様、素晴らしい走りだったぞ……!」

ベテラントレーナー「ええ、とても力強かったわ!ぜひあなたをスカウトさせてほしいのだけど——」

「あ……そうか、デビューのためには、まずスカウトか、そうだった……。」

「いや、だが……すまない。ちよつと、通してくれ。」

人波を不器用にかき分け、オグリキャップが後方彼氏面の俺の傍らまで歩いてきてくれた。

「……レース、見ていてくれたか?」

「見てたぞ!素晴らしかった、俺を熱くさせてくれてありがとう!!」

「つ……ありがとう。」

「うん、やっぱり……そうだ。」

「——一つ、頼みがある。私のトレーナーになってくれないか？」

「君の言葉からは、すごく温かい気持ち伝わってきた。」

「懐かしい……故郷の人たちが向けてくれた、真っ直ぐな応援の気持ちだ。」

少し違う気がするが気にはいけない、概ねそのとおりだ。

「私は、故郷から遠く離れたこの地でも、キミが見ていてくれるなら……安心して、力いっぱい走れる。そう思ったんだ。」

「……どうだろうか。お願い、できるか？」

「俺が君のお願いを断ったことがあったか？一緒に故郷の人たちを喜ばせるぞ！故郷に錦を飾るぞ!!」

「……ああ！よろしく頼むぞ、トレーナー!!」

「よし、それじゃあ——」

（ぐううう……）

「……まずは、腹ごしらえだな。」

淳朴な腹ペコウマ娘、オグリキャップとの日々はまだまだ始まったばかりだ……！

終わると思っていたのか？

「オグリ、今日は宴会をするぞ。」

「……！そうか、ありがとう!!」

「勝つても負けてもお祭り騒ぎだからな」

「とりあえず俺の家まで車で行くぞ、何人か迎えに行かないと行けないからな。」

「……本当に君は。故郷の人みたいだ。」

トレーナーの家

「あら〜さつき私とレースで走った方ですね〜」

「君は、スーパークリークだな。」

「ウチも忘れたらアカンで！」

「先輩！今日はよろしくお願ひします！」

「こちらは、担当のハッピーミックです。ミック、ご挨拶してもらえますか？」

「……ハッピーミックです。……こんばんは。」

「先輩俺も今日は、クリークともどもよろしくお願ひします。」

「さて人数が、集まったところで自己紹介をするぞ。」

「まずは葵ちゃん！」

「ハイ！トレセン学園の新人トレーナーの桐生院葵です。今日はよろしくおねがひします！」

「次、ミックちゃん！」

「………はい………トレーナーの担当ウマ娘のハッピーミックです。………今日はよろしく

おねがひします。」

「次、スーパークリーク！」

「はーい、こちらのトレーナーさんの担当ウマ娘のスーパークリークです。今日は楽しい時間を作りましょうね。」

「次、トレーナー！」

「今年から入った新人トレーナーの鏡祥太郎です。今日はよろしくおねがひします。」

「次、タマモクロス！」

「ウチはデビュー済のウマ娘のタマモクロスや！みんなよろしくな〜」

「次、オグリキャップ」

「……ここにいる、先輩と呼ばれている。トレーナーが担当のウマ娘だ。」

「なあ、もしかして誰も俺の名前しらないのか？」

「怒らないから、全員正直に手を挙げて。」

全員が手を挙げた。

「えっ!?!みんなそんなに俺の名前そんな知らない!?!」

タマ「オグリのそばにようおるトレーナーとしか、見てなかったわ。」

オグリ「名前、あつたんだな。」

卑しい後輩「あの、失礼ですが、凄腕のトレーナーだって聞いてましたけど、名前は知りませんでした。」

無難な後輩「面倒見のいい人だと聞いていました。」

卑しい後輩のダシにされる卑しくないウマ娘「……誰って思っていました。」

「そんなフルボッコにする!?!」

「まあいいや、とりあえず、名乗るぞ！」

「俺の名前は木原正樹だ、トレセン学園で勤務して5年目のトレーナーだ。」

「昔担当した、代表的なウマ娘はシンボリルドルフで無敗の三冠を達成させた。」

「その他のウマ娘のこともまた、今度話すから今日は用意してあるカレーやピザを食べながら盛り上がるぞ！」

さて俺が食べるのはピザだ。俺の家にはわざわざ作ったピザ窯があるから、それを使ってピザを焼いた、チーズはモッツアレラ、サラミはこだわりのトスカーナ、さらにピザソースはトマト缶を使って手作りだ。ククク、美味そうに食べるじゃないか。

実際かなりうまいからな、まあ正直言ってサラミとチーズをここまでこだわらなくても良かったと思うがうまいから問題なし。オグリキャップはカレーに誘導しといてよかった、カレーがすごい勢いで減ってるしな。ピザを念の為に6枚焼いたけど多分足りないだろう。仕方ない冷蔵庫の中のものदनにか作ってやろう。

「先輩、なにか作るのなら、手伝います」

「大丈夫だ、オグリがかなり食べるからなにか適当に作るだけだしな。」

「他の奴らと楽しく話しておいてくれ。」

「ありがとうございます。先輩」

俺は冷凍庫の中にあつた、冷凍の100個分の焼き餃子を焼くことにした。冷凍だが餃子が結構パリパリになる素晴らしいものだ。

餃子を焼いていると会話が聞こえてくる。

「オグリ相変わらず、ごつつい量食べるなあ〜」

「タマも、たくさん食べないと大きくなれないぞ。」

「そうですよ〜、たくさん食べないと大きくなれないんですよ〜」

「ウチはこれで充分や！それにウチは二人より先輩や！」

「鏡トレーナーカラオケに興味はございませんか？」

「ごいいます。」

「……本当ですか！……よろしければ今週の土曜日一緒に行きませんか？」

「ありがとうございます！是非一緒に行きましょう！」

なんで俺の家でカップルができあがろうとしてるんだろう

スーパークリークはなんとも思わないのか？

仕方ないハッピーミークには水族館のチケットでも送って桐生院と遊びに行かして妨害しよう。

ハッピーミークは水族館のチラシを興味深そうに覗いているしな。

あとは理事長が新しくするレースのURAFファイナルズを盛り上げるためのイベントをしたって言ってたから二人を生贄に捧げよう。

あのかなり、すごい記事を書くパッション系記者さんが取材するらしいから、楽しいイベントになるだろう。

そんなこんなで餃子が焼けた。もう一つの冷凍食品の唐揚げもオグリに食べさせよう。

そんなこんなで門限が近くなるまで続いた。

オグリには、せめてルドルフを超えてもらわないと困るからな

芦毛の食いしん坊

さて、改めて自己紹介をしよう。オグリキャップのトレーナーの勤続5年目の凄腕中堅トレーナーの木原正樹だ。私の現状について説明したいというかする。

ルドルフを無敗の三冠ウマ娘にしてから2年がたった訳だが、実は私は故郷の高校を卒業したあと、すぐさまトレーナー試験を受けて合格した。かなり珍しいパターンだ。しかし、教員免許というのは高校卒業だけでは中学生までの教育しか出来ないのだ。

それにより、ルドルフと別れた訳だが、その後理事長からある物を貰った、それは特別免許状と呼ばれるものだ。これにより私は高等部の教育ができるようになった。

本来の物は10年更新だが私のものは、5年更新であり、長いスパンのウマ娘教育において、失敗はかなりまずい、結果を残せなければ、私は高等部ウマ娘の教育資格を失ってしまう。

そうなるというところまで、育成したウマ娘を他のトレーナーに搔つ攫われることになっってしまう。

そしてそれを受け取ったのがルドルフと別れた直後の2年前だ。つまり3年以内に結果を残さなければ私の特別免許状は取り消されるわけだ。

そして今は2月後半、私としては制度が変わったお陰で出走できるようになった、皐月賞に出て欲しいがそのためには、G3かG2を勝たないといけない、そのためにオグリと相談したいんだが、オグリに負担を与えないようにスケジュールを組まないといけない。相談したいんだが……

午後から授業で模擬レースがあるという、オグリキャップと、昼食を一緒にとることになった。

もう驚かないが、傍らに置かれたバッグには、とんでもない量のパンやおにぎりか詰め込まれている。

オグリ「購買部で買ってきたんだ。これでエネルギー補給はバッチリだろう。」

「すごい量だな、何食分だ？」

「一食分だ。」

「相変わらず凄まじい量だな、慣れてしまった。自分に驚いた。」

「腹八分と行つたところか。食べ過ぎたら、動けなくなつてしまうからな。」

「腹八分!？」

「カフェテリアだと制限なく食べてしまうから、たまにこうして購買部で買って済ませるんだ。」

買い込んだ食料を広げ、オグリキャップは「いただきます」と丁寧に手を合わせ食事を始めた。

青が広がる空の下、まるでブラックホールに飲み込まれるように食料がオグリキャップの中へ吸い込まれていく

……。

「ごちそうさまでした。」

「よく噛んで食べたか…?」

「もちろんだ。」

「『いただきます』『ごちそうさま』そしてよく噛み味わうことが食べ物を作ってくれた人に対する感謝だとトメさんに教わつた。」

「……大事なことの多くは、故郷の人たちに教わつたんだ。恩返しのためにも、私はこの学園でまた成長しなくては。」

「……ああ。トメさんと言えば、よく差し入れにくれたおにぎりは美味しかったな。私の大好物だったんだ。」

「まん丸で砲丸のように大きくて、しっとりしたのりに巻かれていてな。」

「具も盛りだくさんで、焼いたタラコや高菜の漬物、昆布の佃煮が入っているんだぞ。」

「どこから頬張つてもすぐに具材にいきついて、とても幸せな気持ちになれるんだ。」

（ぐううう……）

「む……思いでしたら、またお腹が……。腹八分目には少しばかり足りなかったか。」

「ううむ……買い足すにしても、今から購買に行つて間に合うだろうか……。」

「私のおにぎりをあげよう。」

「……！もらつていいのか？」

「ふふつ、ならば遠慮なくいただこう。」

ボケたつもりだがボケが微妙すぎた。全く気づかれない言い方がなんか微妙に下ネタっぽいだけだしな。

そんなことを考えていたら、オグリキャップは目を輝かせながらおにぎりを取ると、すごい勢いで食べた。

そして、あつという間に用意しておいた3つのおにぎりをすべて平らげてしまった。

「ごちそうさまでした。時にトレーナー、これは君の手作りなのか？」

「トメさんのおにぎりと同じだ……とても優しく、心がほかほかしてくるような、そんなおにぎりだった。」

「何か特別な握り方でもしているのか？」

「握り方は普通だ、ただ特別な海苔を使っている。」

「どんなのりなんだ？」

「俺の故郷の名産品の味付け海苔だ。俺の故郷は他にもんじんの出荷量が3番目に多いとか踊りの祭りが県の最も大きな祭りだったり、そんな場所だ。」

「塩とか醤油とかの味がよく効いててうまいだろう。」

「のりも美味しかったが他になにかあると思うんだ。」

「本当に適当に握っただけだぞ。」

「……技法では無いとなると、他になにか秘密が？良ければ、今度キミが握ってるところを見せてくれないか？」

「こつちに出てきてから、このおにぎりの味が恋しくてな。自分で握れるようになりたんだ……お願いできるだろうか。」

「構わん、むしろ毎日おにぎりを作ってやるぞ。」

「……！ありがとう！君にトレーナーをお願いして本当によかったと思っているぞ。」

「久しぶりに食べた優しい味で、お腹も気持ちも満たされた。トレーナー、午後の模擬

レースは期待していてくれ！」

その言葉通り、オグリキャップは模擬レースで圧倒的な勝利を収めてみせた。

私のおにぎりがオグリキャップの力の源になれたのは嬉しかったが……。

(ぐううううう……)

できれば1つぐらい残しておいてくれたら良かった、と少しだけ思うのだった。

オグリキャップとレース後話した結果、弥生賞に出ることになった。ファン数が不安だったけどどうやら笠松時代の記録も加味して出走できるらしい。

中央初のレースだ、しっかり支えてやらないとな。

数日後

俺は1つ恐ろしいことに気が着いた。

あれから毎日おにぎりを作っているが、オグリキャップがお腹一杯になるには最低でも30個は必要だと言うことに、またオグリキャップの食欲には限りはなく、食事のあとに食べ物の話をするときらにお腹が空いてしまう。トメさんは何者なんだ本当に

これの分を加味すると1日50個あると確実だ。

少しでも不満を残さないために50個毎日作っている。おにぎりを作り続けること

がこんなにも苦しかったのか、私は後悔している。

「トレーナー！今週の週末念入りに練習したいから3食おにぎりを作ってくれないか？」

私は自分の頭がおかしくなったのかと考えた。

とりあえず言葉を思い出そう。

【3食おにぎりを作ってくれないか？】

ふまんののこさないようにしないといけないんだった。

「アア！モチロンダ。イクラデモツクツテヤルゾ！」

「キミノ、エガオガ、イチバンノハウシユウダカラナ！」

「……トレーナー！私のためにありがとう。君の作ってくれたおにぎりで必ずレースで優勝してみせる！」

私はおにぎりを作り続ける機械になった。

弥生賞のレース後

実況「強い！強すぎる！8馬身以上の着差で勝利したのはオグリキャップ！」

というわけで見事皐月賞への切符を手にした。オグリキャップだった。

弥生賞まで毎日おにぎりを作り続けた私は母の日に感謝の気持ち伝える大切さを本当の意味で理解できた気がした。

高知のアイドルと地獄の一日

私は何をしているのだろうか……

遡ること3時間前

私はトレセン学園にある木にもたれながら体育座りをしていた。

ただ何も考えず、空を見たり苦しみながら、地面を見ていただけだ。そうしていると女の子が私に話しかけてきた。

元気なウマ娘「お兄さん！こんなところで何してるの〜？」

「ああ、実は自分の担当ウマ娘に毎日50個のおにぎりを作っているんだが、苦しくなっちゃったんだ。でも担当の子は表情が分かりづらい子だから、嬉しいのかどうかもわからないんだ。」

「えー！毎日おにぎりを50個も作るなんてスゴイね！」

「それにきつと担当の子も、すごく喜んでるよー！」

「そうかなー、実はもう飽きてたりしてないかなー……」

「飽きないよ！だって自分のトレーナーが毎日おにぎりつくってくれてるなんて、わたしだったら自慢してるもん！」

「ありがとう、君は本当にいい子だね、よければ名前を教えてくださいかい？」

「わたしはハルウララだよ！」

「お兄さんの名前は木原正樹って言うんだ、よろしくね」

「ねえねえ、木原さんこれからショッピングセンターでビコーペガサスさんのヒーローショーがあるから観に行かない！」

「もちろん観に行くよ、オグリも今日はタマモクロスと遊びに行くらしいから俺も行くよ。」

近くのショッピングセンター

ハルウララと話しながら歩いているとオグリが現れた。

オグリ「トレーナー！」

「どうしたんだ、オグリそんなに慌てて」

「タマが迷子になってしまったんだ。」

「とりあえず、どこに行く予定なのか教えてくれないか。」

「タマと物産展を観に行く約束をしてたんだ。」

「なら、賢いタマモクロスなら、物産展にいるだろう。」

「俺が会場まで案内するからついてこい。」

「そういうわけだから、ウララちゃんは先に行っておいてね。」

「バツチりいい席取っておくから楽しみにしておいてね！」

「任せたよ」

「トレーナー、仲良しだな。」

「実は今日合ったばかりなんだ。たぶん学園で一番いい子だぞ。」

「オグリも仲良くなれると思うぞ、いい子だからな。」

「トレーナー……捕まらないように気をつけるんだぞ。」

「お前……そんなこと言う奴だったのか……」

「まあ……案内してやるからついてこい。」

物産展会場

「オグリ！心配したで〜〜一体何やつとたんや。」

「タマこそ心配したぞ、急にはぐれたから攫われたんじゃないか心配したぞ。」

「よく見なかったら、小学生位に間違われてさらわれる可能性もあるからな。」

「ウチ、なんで、迷子とそのトレーナーにこんな言われんとアカンはや！」

「まあ、気にするな俺は屋上でヒーローショー見てるから楽しんでな。」

「なんや、子供でも付き添いできとんか？」

「ハルウララだ。学園内で一番強靱なメンタルを持ったウマ娘だ」

「トレーナーと、今日合ったばかりらしい。」

「なんやチームでも作るんか？」

「まさか、ひとさまのウマ娘を取り上げてまでチームは作らないさ。」

「ハルウララのトレーナーは出張で二週間程いないらしいから私が付き添いで来たというわけだ。あと良い子の誘いは断れない。」

「あんたがそこまで、優しい人だと思っただけだええとこあるんやな。」

オグリに靴買ったし、皆を呼んで自腹でパーティーしたし、結構いいことしかしてないつもりだったんだけど、そんなふうにしてたのか。

「失敬な、俺はバファリンと一緒に半分は優しさで出来てるんだぞ。」

「……トレーナー、そうだったのか？」

「オグリ、これはこの人なりのギャグや。」

タマモクロスなんて俺に対して厳しいんだ。敬語使わなくても許してるぞ。

「じゃあ、おれはヒーローショー見てくるから楽しんでくれよ。」

タマモクロスの思考

こいつ担当ウマ娘放って何ほかのトレーナーのウマ娘の尻追いかけてんねん。オグリはボー―としとるやつやからお前がしつかりせんとあかんのやぞ。臯月賞も近いし作戦とか大丈夫なんやろな、こいつ何考えとんやホンマ底が知れんやつや。

シヨッピングセンター屋上

屋上の屋台これは素晴らしいものだ、ハルウララにはクレープを買っておいた。はちみつを食べると足が速くなるらしいからな、あの子は一生懸命走るんだが、足が遅いらしいからはちみつをたくさん取って素晴らしいウマ娘になつてもらいたい。

そして私のぶんは屋台にあつたケバブとジンジャーコークだ。久しぶりにケバブを食べるが目の前で切ってくれたから楽しめそうだ。普通はストックして置いた。他の肉を使つて作るからな、回してるアレは見せるようだが、切ってくれる店だったから、久しぶりにテンションあがった。店主の人もトルコ人らしいから雰囲気も抜群で買う選択肢しかなかった。そしてジンジャーコーク、マク○ナルドで飲んでから他の店で飲める日が来るとは思つてなかった。早速飲んでみよう。味は普通にうまい、シヨウガがしつかり効いてて、かなりうまい。そしてケバブもよく食べられるドネルケバブだが、普通にうまい、ソースが結構薄めだが楽しめる味だ。ジンジャーコークの味を中和する

のに良くて永久機関が完成する、次のノーベル賞はケバブ屋のものだろう。

コイツはどうやら臯月賞前に食べ物のことを一番良く考えるようだ

しかし気づく、私はなぜか最近よく心のなかで食レポをしてる気がする。カレー作つたときも映画を見に行ったときも食べ物を食べると毎回食レポをしている。もう考えて食べるのは辞めよう。なんか人として気持ち悪い気がする。偉そうで、ノーベル賞受賞者多すぎだろ

「オーイ、ウララちゃん！」

「あー！木原さんだ、バツチリいい席取れたよー」

確かにまんなかののまんなかで丁度いい距離でキレイに観えるいい場所だ。座高がやばいやつもいないからしつかり見えそうだ

「ほら、お土産のはちみつチョコクレープだ。これを食べて足を速くするんだぞー」
「わあ！ありがとう木原さん一緒に食べながら見よう。」

他の観客も食べ物持つてるから食べながら見ても問題ないところだしそうするか。

会長「トレーナー、ヒーローショーを見に来るとはよいショーじんだな」

「ルドルフいきなりジョークとは流石だが、俺のジンジャーコークともかかつてるし素

晴らしいんだが無理矢理過ぎるぞ。」

「ルドルフも今日はヒーローシヨーを見に来たのか？」

「フフ、実は私は登場するんだ。グリーンルドルフとしてね。」

「すごいな、しかし会長がなぜそんなことを？」

「地域のひととの約束でね、色々トレセン学園に融通してもらおう代わりにこういつた催しを地域で行うんだ。この前は商店街でヒーローシヨーをしてそのハルウララもピンクウララとして舞台に立つたんだ。」

「ウララちゃんもヒーローやったのか！俺も見なかったな〜」

「私もまた出たいからその時は木原さんも観に来てね！」

舞台スタッフ「大変です、怪人役の方が脱水症で倒れてしまいました！」

「いきなりだな！しかしかなりの大ピンチじゃないか！ウマ娘ヒーローシヨーつてアクションが出来るかなりのクオリティのシヨーだろ、大変じゃないか！」

「かなりの大ピンチだね、代役が必要だ、いなければ中止しないといけない、しかし楽しみにしてる子供が大勢いるのに無力だ、こんな所に体力がそこそこあつてウマ娘と信頼関係が厚い人物なんてそうそういないよな〜」

「チラツ　チラチラ」

なぜ俺を見る、しかしプロだろ何年もやってんのに熱中症で倒れるなよ。お前そんなやつだったのか、今日は色んな人の意外な一面を見せられる日なのか。

「わかったよ、できる限りのことはするよ。」

「おお、流石はトレーナーだ、君のそういうカッコいいところは大好きだよ。」

「だから、こういうときにかからうな。つで今日の怪人はどんなやつなんだ。」

「怪人ハダアーレだ。」

「怪人ってゆうより乙女の天敵って感じだな。あと調子を一气におとしそうだ、ウマ娘も乙女だから乙女の天敵はウマ娘の天敵か。」

「そのとおりだトレーナー、早速着替えてきてくれないか、私も着替えたあとそのままシヨーに入りたい。」

「台本ぐらい読む時間はあるよな、それとシヨーの流れもわかるよな。」

「時間がないから急いでくれ。」

「今日は人使いが荒いな。まあ急いで着替えてくるよ。」

「ウララちゃん俺の活躍をしっかりと見てくれよ!」

「うん! バツチリ見てるよ!」

ルドルフの考え

彼に厳しく当たってるように感じられるのだけは避けたいんだがどうなんだろうか、

大丈夫だろうか、怪人役の人のチャックと声をだす部分を一時的に壊しておいたが狙い通り脱水症で倒れてくれて助かった、これで彼とともにヒーローショーができる。

ハルウララにもヒーローショーがあると教えておいて正解だった。

それに彼の心を癒やすのにも彼女が適任だと思ったがやはり正解だった。だがかなり仲良くしているようだが、私のお願いを優先したやはりオグリやウララより私を大切に行っている、すなわち私が彼の相棒にふさわしいと言うわけだ。優越感で空が飛べそうだ。

なにかズレているようだ。

男性用の楽屋に入った、きぐるみみたいのがちようどある、

ジャ○ラだ、確かに水がないところ出身だから肌荒れどころかそんなレベルじゃない気がするが着てみよう。

きぐるみだからよくわからないが動けるから問題なしだな

台本を軽く読んでいくか

10分後

アイネスフウジン「みんな今日が集まってくれてありがとう！」

「これからウマソルジャーVがやってくるから楽しんでね」

プシュー

ウー ウー ウー ウー ウー ウー

怪人ハダアール「グエツヘツへ、それはどうかな」

「あー！貴方は怪人ハダアール乙女の天敵のとっても悪い怪人よー」

「クツクツクツ、解説ご苦労アイネスフウジン君、さあ戦闘員共あそこにいる子供を捕まえるんだ！」

ウー ウー ウー ウー

「キヤー！助けてダイヤちゃん！」

「キタちゃんをさらうなら私を代わりにさらって！」

「クツクツクツ、そんなに大切ならば二人一緒に怪人にしてやろう。」

「キタちゃんにダイヤちゃん二人は優秀な怪人になってくれるだろう。」

「みんなー！このままだと二人が怪人にされちゃう！せーのでみんなでヒーローを読んでね」

「せーの！」

子どもたちの声「ウマソルジャーV!!」

プシュー

シュタツ

「蒼き帝王ブルーテイオー!!」

シュタツ

「漆黒の名優ブラックマックイーン!!」

〈「僕たち、私達が相手だ、ですわ!!」〉

「テイオーさん!!」

「マックイーンさん!!」

「僕達が来たからにはもう安心だよ」

「私たちにお任せください」

「クツクツク、二人だけとは随分舐めたマネをしてくれたな、」

「戦闘員共二人を始末しろ!!」

ウー ウー ウー ウー ウー

「オリヤー」

「それ!」

ウー ウー ウー ウー

「なかなかやるじゃないか、私自らが相手になってやろう」

「ウオリヤー」

「ハアアアア！」

「フハハ、全く聞かぬわ！」

「フン！」

「クツ コノママジャヤラレチャウヨ」

「所詮はただのウマ娘我々怪人の敵ではない」

いいんじゃないか！初めてヒーローショーしたけどどこかで確か残りの三人が登場して怪人をやつつけるとかそんな感じだったはずだからそろそろくるはずだ。

プシュー

さつと音の方に振り向く、そこには二人のウマ娘が

??? 「ペガサスキーツク!!」

怪人ハダアアレ 「ウボアアアアアア!?!」

「助けに来たよ、二人共！」

ばつ馬鹿な、背後からいきなりドロップキックだとイカれてやがる。

「今のは少し効いたぞ【やせ我慢】だが正義のヒーローが背後から奇襲とはいかがなものかな？」

「手段を選ばないのも正義！」

だめだコイツの正義はやばすぎる。

「それじゃあ、みんなでやるよ！」

「燃える正義の赤い炎レッドペガサス！」ドカーン!!

「蒼き不屈の帝王ブルーテイオー！」ドカーン!!

「緑の絶対なる皇帝グリーンルドルフ！」ドカーン!!

「漆黒の永遠の名優ブラックマックイーン！」ドカーン!!

「爆ぜる正義の桜吹雪ピンクバクシンオー！」ドカーン!!

5人「ウマソルジャーファイブ!!」

「クツクツクツ、ついに揃ったかウマソルジャーファイブ、やはり全員を相手にしてこそ怪人！」

「みんなあれをやるぞ！」

四人が返事をする

「みんなの人参を一つに！」

ウマソルジャーファイブ「ウマソルジャーバズーカ！」

「えっ、ちよ、はやすぎな……」

グリーンとピンクの見せ場は!?

「エネルギーゲートイン！ファイアー!!」

突如私の足元がカラフルに爆発した、凄まじい勢いでふっ飛ばされた。

大怪我するはずだが痛いですんだのでどうやらこのジ○ミラは防護スーツの役割もあるようだ。

「ヤッター勝ったぞー」

生き残った戦闘員「まだです、ハダアーレ様はこのコーラを一気に飲むことで復活するのです。」

お前喋れるのかよ!!

怪人ハダアーレ「今は無理……」ボトン……

戦闘員「おのれウマソルジャーファイブ!!」ドカーン!

お前らもふつとぶんかい!

てかこの状況誰かツツコめよ!

私は薄れゆく意識の中でキタちゃんとかイヤちゃんがテイオーとマックイーンに抱きついていてのを見てから眠りについた。

十五分後

ウマソルジャーファイブと子供たちの触れ合い会が終わったあと、スマートファルコンとミホノブルボンそしてサイレンススズカの逃げ切りシスターズのライブが行われています。アイネスフウジンとシヨールのおねえさんだから踊らないのだろうか？

センターはスズカだ、スマートファルコンが、リーダーと聞いたがスズカセンターの方がよいと判断したのだろう。

シヨ一のあと念の為ルドルフに湿布を貼ってもらったが明日には痛みが引いているだろう。ルドルフがふたりきりの時はルナと読んでくれと久しぶりに言ってきた、ルドルフがそんなことを言うのはかなり珍しい、ライブを見たら帰るか、ウララちゃんを家に送ってな。

ルドルフに誘われたが、皐月賞が近いから無理だと断った、どこか旅行に行きたがっていたが、2年前に行った温泉にでもまたいきたくなくなったのだろうか。

帰ろうと思い、ウララちゃんを連れて駐車場に向かおうとすると乙名士記者に捕まった。急遽来月イベントが決まったからリハーサル中で私にも見てもらいたいらしい、そう思っについていくと何故か俺はウマぴよい伝説を踊っていた。なぜだかはわからないが、痛みを感じながらも嫌とは思わなかった。

芦毛の皐月賞

皐月賞の一日前

「オグリ、皐月賞のあとの練習は俺のおにぎりではなく食堂でご飯を食べてもらいたい。」

「トレーナー、もしかして、作るのが嫌になってしまったのか……」

涙目で見てくる。

「まずい、担当ウマ娘と仲が悪くなって調子を下げさせるのは一番の悪手だ、半分本当のことだが誤魔化そう、ちゃんと説明したらわかるだろう。」

「違うぞ、長い人生で一番重要なのは友達を作ることだ。そして人と人が最も話すときは人と物を食べているときだ。つまり食堂で友達を作り一緒に食事をするときそれが大切なんだ。」

「俺はお前のトレーナーでもあり、先生でもあるからな、お前のことを考えたことしかないぞ。」

「お前は、もう友達はたくさんいるが、悪いやつ以外は友達はいくら居ても問題ないから

な。」

「……本当か？」

本当に泣きそうな目で見てくる、なんでこういう時だけするどいんだ。

「もちろんだ、俺が君に嘘をついたことがあったか？」

「……食堂で、ご飯を食べるようにする。でもたまにはおにぎりを作ってくれないか？」

「……！もちろんいいぞ！そんなに俺のおにぎりを美味しいと思ってくれているんだな。」

「それに、おにぎりを作るところを今度こそ見せてくれないか？」

「もちろんだ、おにぎりを作るところを見せてあげよう」

「それもあるんだが皐月賞頑張つて勝つてくれよ。」

「任せてくれ、君のおにぎりを食べた私は無敵だ。」

そんな話をしたことで皐月賞の日もオグリキャップがお腹いっぱいになるようにおにぎりを用意することになった。

私がかこまで頑張つてこれたのはウララちゃんのお陰だ、ウララちゃんが早く勝てるウマ娘になるのを私は願っている。

そう考えないと毎日おにぎり50個はキツイ。おにぎりを作る大変さを説明してな

かつたけど、まず、ここまであると米炊くのだつて大変だ。家にあるのは元々5合炊きだからわざわざ2升炊きの炊飯器を買ったからな。

そして私は、一つのおにぎりを作るのに約一分掛けている。一日分を約50分掛けて作っているわけだ。50個の時はもう慣れたが150個作ったときは心を無にしないと駄目だった。これが続いているとオグリに弁当を勧めたくなる。それでもおにぎりを作り続けた訳だが、今回の説得でしばらく解放されそうだ。

臯月賞に向けて、練習もしたから大丈夫だろう。あとは本当に勝つだけだ。

臯月賞当日

臯月賞は午後から走るそれまでにこのおにぎりを渡さないといけない。さて控室に向かうか。

少し開いている控室から不思議な声が聞こえてくる、趣味が悪いが覗かしてもらお

う。

鏡トレーナー「クリークママ♡」

「僕頑張ったからたつきさん甘やかして欲しいでチュウ♡」

クリークママ「は〜い、トレーナーさんは本当に偉い子ですよ♡♡」

どうやら見てはいけないものを観てしまったようだ、先月、公衆の面前で葵トレーナーとウマびよい伝説踊っていたがあれよりヤバいことをしていたとは彼も疲れているんだろう、ここは何も見なかったことにしよう。まあ葵君には情報交換するが。

今気づいたが俺のリハーサルウマびよい伝説は何だったんだ。

おっとまた、少しだけ空いたドアが正直言って少し怖いがもう一度覗いてみよう。

ハッピーミーク「クソです…あのクソ女…ミークのためだの吠えてた奴が…この間のお出かけ鏡トレーナーのを……」

これ以上見てはいけない、なんだろうこの前は新しい一面を見つける日だったけど、今度は見てはいけない一面を見てしまう日なのか？

葵ちゃんも結構大胆な子なのかもしれないな、

鏡くんは実は私の想像以上に恐ろしいやつかも知れないな。

おっと今度こそ、オグリキャップの控室だな、

「オグリ、入るぞー」

「……トレーナー、随分遅かったじゃないか。」

「すまないな、ちよつと見てはいけないものを見てしまつてな。」

「……? 見てはいけないもの?」

「レースには関係ないから気にする必要はないぞ。」

「それより、お前の大好きなおにぎりだぞ〜」

「……! トレーナーありがとう! そのトレーナー、たまには、一緒に食べないか?」

「そういえばほぼ毎日作ってるが一緒に食べたことは無かつたな、たまには一緒にたべ
るか。」

「私もおにぎりを作ってきたんだ。」

そう言つて5個ほどおにぎりを見せてくれた、大きくて一つで十分たりそうだがこれがオグリの基準なんだろう。ありがたくいただく。

3個目で限界が来た。

「いや、オグリのおにぎりは美味しいなく、美味しすぎて一気に食べるのはもつたいな

「気がするな〜。」

「……トレーナー、私のおにぎりは美味しくないのか……」

コイツこんなに面倒くさい子だったか!?

「いや違うんだオグリ、実はお腹いっぱいになつてきてな。」

「そうか……やっぱり美味しくないんだな……」

「すごく美味しいから！自分で作ったおにぎりより美味しいくてすごく喜んでるからな
！」

「本当に美味しかったらいくらでも食べれるはずなんだ。」

「どんなやつだそいつは!!オグリか!コイツ美味しかったらいくらでも食べれるタイ
プか

「トレーナーが、作ってくれたおにぎりならいくらでも食べれる。」

「俺もそんな気がしてきたよ!!よーしあと2つもたべるか!!」

もうどうにでもなれ!!

「もう食えな……」

「安心してくれトレーナー、おかわりもある」

ニツコリ笑顔でオグリが言ってくる

これはオグリなりの恩返しなんだろうか、俺が悪かったから許してくれないだろうか
……

「これが最後だよな」

「……足りないのか？それはすまなかつた、次はもつと用意しよう。」

「これでお腹いっぱいだよー！したくさん食べて元気を出すぞー」

晩ごはんが間違いなくいらなくなる量のおにぎりを食べた。

「オグリ、勝ってくれよ……」

「もちろんだ、任せてくれ。」

皐月賞

実況 「最初に先頭に出たのは7番ジャラジャラ」
「3番オグリキヤップまはは後方で様子を伺う。」

解説 「7番ちよつと掛かり気味かもしれませんが一息つけると良いのですが」
中盤

「先頭にたつたのは1番スーパークリーク!!」

「一番人気のオグリキャップ足をためています。」

終盤

「ここで飛ばしてきたのはハッピーミーク先頭との差がみるみる縮んでいきます!」

「スーパークリーク粘ります、しかしその差はわずか!!」

「ここで真打ち登場オグリキャップ並ばないハッピーミークとスーパークリークをがんばら抜き!!」

「オグリキャップ!!脚色は衰えない!!」

オグリがこちらに手をふる、私も全力で振り返す。

三冠の1つ目皐月賞は私達が取った。ウイニングライブではしばらくオグリはバツクで踊ることはなさそうだ。

オグリが、センターでライブをしている、久しぶりに自分の担当ウマ娘のライブを見たが涙が出てくる。

ウマ娘の娘は子供だと言うことかも知れない。

自分の娘の晴れ舞台みたいで、泣けてくる

URAFアイナルズ優勝したときたぶんめちやくちや泣くと思う。

とにかく私はペンライトを全力で振りながらオグリを応援した。

「素晴らしいウイニングライブだったぞ。」

「トレーナー応援ありがとう。」

「今日は二人で食べに行くぞ。」

オグリが好きそうな定食屋に行った

俺は焼き鮭定食でオグリはすき焼き定食だ。

前食べたときとても美味かったのでオススメした。

「トレーナー、こういうお店はよく来るのか？」

「安くて美味いからな、新人の時からずっと定食屋には来てるよ。」

「……トレーナーは、どうしてトレーナーになろうとしたんだ。」

「俺は用心棒とかが活躍する西部劇が大好きなんだ、戦隊ものとかも好きだが、時代劇も好きだ。用心棒は先生ってよばれるんだ。俺もそう呼ばれたくてな、学校の先生にお前は、先生に向いているって言われてな、それならウマ娘のトレーナーになりたいなと

思つて勉強してトレーナーになつたけど、誰も先生つて読んでくれないんだ。」

「なら、ふたりきりの時は私が先生つて呼ぶよ。」

「実は、先生つて、呼ばれるより、今はトレーナーつて呼ばれる方が気に入ってるんだ。」

「さて、オグリ次のNHKマイルカップを勝つぞ今日はレースの疲れを癒やしてゆっくりするぞ。」

そういつたあとオグリは早速願掛けのカツ丼を7つほど頼んでいた。7冠してほしい俺の気持ちを見据えてくれた行動かもしれないが財布に大打撃だった。

芦毛のビート板

臯月賞から二日後

今日はオグリキャップの練習にすっかり付き合う日だ。オグリはどうやら長距離も走れそうなので長距離を走りきれるようにするためにプールで練習するつもりだ。スタミナを鍛えるにはプールトレーニングと古事記にも書かれている。そして今日は先生を呼んでいる。

「オグリ今日は水泳を教えてください先生として、トウカイテイオーを呼んでいる。スポーツ拔群のウマ娘だ、生徒会室でエアグルーヴに頼まれて連れてきた。」

「カイチヨーと仲良くしてるらしいけどおじさん何者なの？」

「俺まだ23なんだが、まあドルフの元トレーナーの木原正樹だ。」

「……！トレーナーそんなに若かったのか。」

「どんな奴でも社会人5年目まで行くと落ち着きが出てくるものだ。」

テイオーの指導はかなりスパルタだった。

手を掴んでようやく泳げるオグリを泳いでる途中で離すなどかなり厳しい、というかそれは自転車で後ろの荷台の部分を離す感覚でやってると思うんだがだいぶ違うぞ。

「トレーナーは泳がないのか？」

「ライフセーバーの代わりだからな、基本は見守るだけだ。」

「向こうの方に監視員もいるから、トレーナーも教えてくれないか。」

「大丈夫か、まあテイオーではお知えられない部分もあるか。」

「ところでテイオー、」

「何、トレーナー！」

「俺は君のトレーナーではないんだが聞くぞ、実は水泳教えるの苦手だろう。」

「うん！よくわかったねトレーナー！」

「いやだから、君のトレーナーじゃないからな、木原さんとよべ、たぶん感覚でこなしてた、タイプだから教えるのが苦手なんだろう。ダンスとかは教えるのは得意そうだろうが。」

「初対面でそこまでわかるなんて、流石トレーナーだね！」

「初対面じゃないぞ、ヒーローショーの怪人ハダアーレの中の人だ。あと君のトレーナーではない、木原先生とよべ」

「あのすごい演技もトレーナーがしてたんだ！すごい！」

何だこの子!? 距離感バグってんのか!? ルドルフの元トレーナーって言った途端、態度変えて、あれか結構相手を選ぶタイプの子だったのか!?

そもそも俺の話聞かないし、若干ボケてはぐらかすようにしてんに全スルーだ! しかも全肯定してくるから怖い!! 頭イカれてんのかこの子!?

危ない危ない、この子のペースに乗せられるところだった。おそらく強いウマ娘が持つ独特な特徴をこの子も持っているんだろう。

そう! サイレンススズカの左回り! シンポリドルフのジヨーク! オグリのウマ娘でも桁違いの大食い!

彼女の武器はこのイカれた距離感だ!!

「よし、二人共とりあえず、準備運動からやり直すぞ」

そうして、我々三人は準備運動を始め……

何だあのからだのやわらかさは!!?!

ヤバいつてなんか見えて不安になるくらい柔らかい!?

肩を通して後ろ手で手を組めるとかそんなレベルじゃなくて、肘が当たりそうになつてると!?

「トレーナー、ナニ、ボーツトシテルノ?」

「あ、ああ、そうだな、プールで泳ぐのに一番重要なのは準備運動だよな!」

馬鹿な!!!

ウマ娘の武器は一人一つの筈だ。

トレーナーは混乱しています

ルドルフをジョークで相手の調子を下げさせるだけの子だと思っています。

あとなんで時々半角で喋るんだ！何だこいつ！駄目だ私には何もわからない……
非力な私を許してくれ……

「……！っ、大丈夫か!!トレーナー!」

「……！大丈夫だ、オグリ私は大丈夫だ。」

「トレーナーダイジョウブ? ムリハイケナイヨ!」

「トレーナーがいきなり……なにもない所を見つめて顔を水に三十秒程入れたままだったんだ。」

そんなに俺はショックを受けていたのか、

「………気を取り直して水泳練習するぞ! おー!。」

【おー!】

かくして水泳練習は始まった。オグリはまともに泳げないから、夏合宿にも備えて泳げるようにしておきたい。

「……トレーナー少し泳ぎ方が変だと思うんだ。」

「なーに、最初のうちはきれいに泳げないものさ、変になったら俺が直してやるさ。」

「そうじゃなくて、トレーナーのクロールがおかしいんだ。」

「えっ」

「平泳ぎの方が早いし全く息が吸えてないようにも見えるし、私より変なフォームだと思っただ。」

「ハハ、オイオイ何を言っているんだいオグリ。テイオーもなんか言つてやれよ。」

「ゴメントレーナー、トレーナーノクロールハカナリヘンダヨ」

「えっ」

「正直に言うとクロールと思えないほど遅いんだ。トレーナーが泳ぐ平泳ぎは速いのにね。」

さつきまで全肯定だったのにそこまで言うのこの子、最近の若い子が全然わからない、クールにあしらうか。

「オグリ先輩といっしょにクロールで泳いでみるとよくわかるよ。」

「そこまで言うならやつてやろうじゃないか！」

私は惨敗した。これまで全く泳げなくて練習して10mようやく泳げるようになったオグリに負けた。

平泳ぎは普通らしい、平泳ぎが速ければ開き直れるので、テイオーと25mで競争した。

惨敗した。私が15mの所でテイオーはすでにゴールにいた。

俺なんであんなに偉そうだったんだろう。よく考えたら小学校の頃低学年用のプールに俺クラスの中で最後の一人まで高学年用のプールに入れなかったじゃん、

テイオーによく見てみたら平泳ぎもなんかバタフライみたいって言われた、死体蹴りまで食らってしまった。

そういえば昔ルドルフが合宿中にトレーニングの日以外に休みを作ったら、一緒に遊ぼうって言ってきて遊んだけどビーチバレーや城を作ったりしたけど一向に海に近寄らなかつたのは俺に気を使っていたんだろう。なんだろう本当にルドルフ俺にはもつたないくらいいい子だったんだなあ、一瞬結婚したいとか考えてしまった、俺メンタルクソ雑魚だったのかあ、

てか、ウマ娘の体力は俺たちヒト息子と比べると違いすぎる。本当に同じ人間なのか、不安になる、しかも頭の良さも俺たちと変わらないから、ウマ娘が世界征服とか考えたら、世界滅亡が間違いなく近づくだろう。

武田ウマ娘隊が戦国時代鉄砲が現れるまで最強って呼ばれていたのはもう覆されることはないだろうな。

よし、適當なことを考えたら楽になれたぞ、夏合宿までにテイオーに勝つ、オグリにまた尊敬されるようになるう。

その時、ふと閃いた！

このアイディアは、オグリキャップとのトレーニングに活かせるかもしれない！

オグリキャップの成長につながった！

スタミナが5上がった

根性が5上がった

どこ吹く風のコツのレベルが1上がった

「オグリ!!」

「!?なんだトレーナー?」

「一旦休憩しよう!」

「私は全く疲れてないぞ。」

「もうそろそろお昼だし、プールは自分で気付かないが疲れが貯まるものだ。休むことが上手いやつは大成功するしな！」

「トレーナーがそう言うなら……そうする。」

「テイオーも一緒に休憩してご飯でも食べよう。」

「ウンワカッタヨ、トレーナー」

私の作戦はおにぎりでおぐりに尊敬を思い出させる狙いもある。そして軽く豆知識を披露して、「トレーナーは何でも詳しいな、尊敬する♥」コレだ、完璧なプランだ！

「オグリ、おにぎりとおぐりと炭酸抜きコーラとバナナだ。」

「……？トレーナーどうして炭酸抜きコーラなんだ？」

「これから泳ぐのにこの量は自殺行為だよ」

「フツ、それはだな……」

「???」「ほう炭酸抜きコーラか……たいしたものだな」

顔の大きいウマ娘「私のデータによれば、炭酸を抜いたコーラは極めてエネルギー効

率が高いらしく、レース直前に愛飲するランナーも多いらしい。」

「何でもいいけどこのあと泳ぐんだよ〜」

胸と顔が大きいウマ娘「それに大量のおにぎりにバナナ」

私の見せ場をぶっ壊したウマ娘「これも即効性のエネルギー食だ。しかもおにぎりはオムライスおにぎり梅干しおにぎりや色々あつて栄養バランスもいい」

完全詠唱するウマ娘「それにしても水泳という激しい運動の前にあれだけ補給できるのは驚異的な消化力というほかはない」

オグリ説明聞かず食べてんのかよ。

「お前は誰だ、後お前は何を言っている。」

俺の見せ場をこうもあつさり奪うとは何者だ。あとバ〇大好きだろ。俺もアニメ見たけど。

「これは失礼した。私はビワハヤヒデだ。」

「では、俺も名乗ろう、木原正樹だ、その頭は飾りではないようだな。」

「誰の頭が大きいって!」

「オイオイオイ、俺は頭は飾りではないと言ったんだ、大きさには一切触れてないぞ。」

よし、1枚上手を取ったぞ!!

その時、ふと閃いた!

このアイディアは、オグリキャップとの
トレーニングに活かせるかもしれない!
オグリキャップの成長につながった!
トリツクのコツのレベルが3上がった

「ほっほひっふっ! これか調子がいいところなる、だから、期待していてくれ!」
何だこの状況、最近疲れることが多すぎないか。

「よし、全員食べ終わったら泳ぐぞ。」

「後、ビワハヤヒデ、気に触るようなことを言つて悪かったな、これからもよろしく頼む。」

ビワハヤヒデ「私からもよろしく頼む。」

こうして練習に戻った、オグリは結局25mは泳げなかったもので、合宿もビート板は
手放せなさそうだ、浅瀬で有効的なトレーニングも調べておこう。

テイオーはかなり興味深い子だから、ルドルフにも聞いておこう。ビワハヤヒデは頭もキレがある子だ。

「今私の頭について考えていたな」

なんで俺の思考が読めるんだよ。

このあとごまかすために俺は17アイスを全員に奢った。

途中でやってきた、ナリタブライアンも遠慮していたがビワハヤヒデに言われて食べた。ちよろそう。

NHKマイルカップに向けてオグリの調整も仕上げに入らないとな、マイルは元々オグリの主戦場だから問題ないだろうからスタミナをつけるのと準備のために水泳を選んだがまあ大丈夫だろう。

芦毛の決意

NHKマイルカップ当日

さて今日は喫茶店にでも行って心を落ち着けてからオグリの控室に行こう。

喫茶店

休みだと!? 定休日は水曜日で今日はもちろん日曜日だから開いている筈なんだが

……

張り紙があるが……ペットの犬が脱走したから探すので休みます。ワンちゃんの名前はケンジロウ、ゴールデンレトリバーで赤い首輪の犬、あだ名はケンちゃんか

これは仕方ないな。そういえば花を見に行こうと思っていたし公園にでも行こう。パンとか売ってる自販機もあるし、そこでご飯も食べよう。

公園

いたぞケンちゃん、なんか花壇の花食べてる、しかし6月じゃなくてよかったな、6月は私の好きなアジサイが植えてあるから食べてしまうと、毒で死んでしまうかもしれ

ないからな、捕まえるか。

一時間後

商店街

「ぜえ〜ぜえ〜」

元気で商店街のアイドルなウマ娘「あつ！大丈夫？木原さん！」

「はあはあ……ウララちゃんじゃないか、商店街のお手伝いかい、立派だね。」

ハルウララ「木原さん、そんなに息を切らして走ってどうしたの？」

「さつきワンちゃんが走って行っただろう。あの子は実は脱走犬でね、行きつけの喫茶店のワンちゃんだから捕まえようと思ったけど速すぎて捕まえられないんだ。」

「じゃあ私に任せて！ワタシウマ娘だからとつても足が速いから、すぐに捕まえられるよー！」

「お手伝いしてるんだろう？ウララちゃんはお手伝いしてて俺一人で充分さ。」

「おじさんと約束したから、手伝えない、でも木原さんとはつても困ってるどうしよ〜」
ヘナヘナ

八百屋のおじさん「あんちゃんその様子じゃ無理だろ、ウララちゃん、ウララちゃんのおかげでニンジンもう殆ど残ってないから、おにいさんのお手伝いしてあげてくれな
いかい。」

「おじさんありがとう！木原さんワンちゃんどつちに行つたの？」

「オヤジさん今度、人参たくさん買うぜ、ウララちゃん、ワンちゃんはこつちの道に行つたから一緒に追いかけよう。」

結果はケンちゃんを無事捕まえることができた、そして俺はうまいコーヒートサンド
イツチ、ウララちゃんは美味しいパフェにありつけた訳だ。

人助けして食う飯はうまい。

東京レース場

オグリは調子がかなり良さそうだ。

毎日「ほっほひっふー！」と言っている、正直かわいい、いやそんなことよりオグリ

の調子を見に行こう。

プシユク

「ほう、炭酸抜きコーラかたいしたものだな、」

「お前また、それやってんのかよ!」

「木原さん、実際にみたらこれは何度も言いたくならないか?」

「つて、そつちの君は誰だ。」

アメリカンな女の子「ハ、イ、タイキシヤトルデース。」

「WOW!! トムの勝ちデース!」

「ワツツヨクワカリマセーン。」

「すまん、最近ボケてない気がしたからな、ちなみに日本古来のギャグだ。」

トムの勝ちデースはもう若者は知らないのか!?

そうかこれがジエネレーションギャップか(違います)

タイキシヤトル……最強マイラーと言われているウマ娘だ。

強敵だ、マイル以下では彼女の独壇場だ、オグリ同様ダートでも強い、そして何より、
「貴方はオグリキャップのトレーナーさんデスカ、今日はヨロシクオネガイシマース。」

両手を広げてきた。なるほどかなりアメリカンというか、オープンな子だな、取り敢

えず仲良くなるためにしつかりハグだ。

.....

——なんて柔らかさだ！気持ちいい毎日これさりたい、これをされる為に毎日挨拶しに行こうって下心しかない考えが浮かぶほど気持ちいい、つてあれなんだろう、背骨に力を感じて、痛ただ！やばいかなり痛い、さつき改めてウマ娘との体力差に気付いたのに、やばい背骨が砕ける、

ハッ！オグリが遠くの方にいる、アイコンタクトだ、この前教えたモールス信号のOSで伝えるんだ！

あれオグリがこつちを見たのに、見て見ぬふりだと、冷ややかな視線を送ったら楽屋に行った。浮気をしたけど、妻にバレてもなんとも思われない悲しい夫の気持ちになった。

俺はなぜ人を呼ぼうとしているんだ。自分でいえば万事解決じゃないか、というか、離れようとするれば空気を読んで離れてくれるだろう。

手を上げて後ろに下がるこれだけで、離れてくれる、離れられない！なんてパワーだ、挨拶代わりに背骨砕きにきているのか!?

無駄に体力を使いすぎた、頭がぼくとしてきた、

「トレーナーさん、ずいぶん長い間、ハグシマシタネ、これで友達デース。」

バタン!!

「大丈夫か！木原トレーナー！」

「ああ、大丈夫だ、熱いハグだったよ、タイキシヤトル。」

「Oh！アリガトウゴザイマース！友情の印にもう一回デース！」

「ギャーツ!？」

「照れなくても、いいんデスヨー」

「そつ、それじゃあ、今日はいいレースにしような。」

「ビワハヤヒデは、今日のレースに出るのか？」

「私は今日はデータを取りに来ただけでレースには出ない。」

「偵察とは抜け目ないな、そういうえば君はまだデビューしていないんだつたな、実力も伴っているがしていないとはずいぶん入念に計画を練っているようだしな。」

「私の計画が進行するのは来年を予定している、それまでは準備を進めるだけだ。」

そうやってビワハヤヒデとタイキシヤトルと別れた。

特筆すべき強敵、タイキシヤトルの様子を見れたからオグリの様子を見に行こう。

オグリの楽屋

調子が少し悪くなったようだな、昨日までは（ほっほひっふー！）を言っていたが言わなくなってしまった。

「その、オグリ、機嫌を直してくれないか」

「……トレーナー、なんの事だ、私は見ての通り調子はバッチリだぞ。」

「ほっほひっふーで言わなくなったからてつきり調子が悪くなったんじゃないかと思っただ。」

「……トレーナー、あれはいつも言っている訳ではない」

「調子がいいときにふと、勝手に出てくるものなんだ。」

「確かにその通りだな、わざわざ言ったらそれはもう口癖ではないしな。」

「オグリ今日は任せたぞ。」

「ああ、任せてくれ、必ず勝ってみせる！」

そうして送り出した、オグリキャップはタイキシャトルに敗北した。最後の直線で伸

びきれず2着だ。

俺はとて悔しい気持ちになった、オグリが勝てなかったのは俺のせいだ、やはりオグリは少し調子を落としていた。そしてフルパワーだとしても勝てたとは断言できないことそれが一番の悔しいと思う理由だ。

「流石中央だな、全力を出し尽くしたが負けてしまった。」

「オグリ……」

「トレーナー任せしてくれ、次は必ず勝利する！」

「ああ！ そうだな次は必ず勝つぞ、このままだと俺たちはマイルが怖くて逃げた、臆病者にされてしまう。」

「ハウディ！ キハラさんこのあとパーティーを開きますから、オグリと一緒に来ませんか？」

背後から抱きつきながら、タイキシヤトルが話してきた。

オグリの様子を視る、やはり少し機嫌が悪そうだ、そりやそうだ、自分を倒した相手と教師が仲良くしてたら嫌な気持ちになるだろう、それに自分の先生が自分と同じ年くらいの子に抱きつかれてニヤニヤしてたら気持ち悪いと思うだろう。

「オグリ、どうする？」

「トレーナーの好きにしてくれ」

「なんかトゲのある言い方だが、勝っても負けてもお祭り騒ぎだからな、参加させてもらおう。」

おつとオグリの顔色が少し良くなった。うまくいったようだ。

「今日のパーティーは賑やかにナリソウデース。」

「手土産でも買ってからそっちに合流するよ。」

「ワカリマシタ、今日は楽しいパーティーにシマショウ。」

「オグリそれじゃあ、二人で買い物でもしよう。」

シヨツピングセンター

レースの後に少しだけ、シヨツピングをするとウマ娘は喜ぶ、これはルドルフの時に学んだことだ。普段は勝ったあとにしていたがこれはこれでいいだろう。気分転換は大切だしな。

オグリが無言で手を握ってきた、オグリはかなり迷子になりやすいからな、少し強く握っている気がする、悔しかったんだろう、俺は後ろを振り向かず歩いていった。

見慣れた小さな人影、いや、ウマ娘影を見つけた。

「タマモクロス久しぶりだな、元気にしていたか？」

「ウチは、オグリによくアンタの話をされてたから久しぶりの気はせえへんけどな。」

「そうか、所で、じつと立ち止まって何を見てるんだ？」

「ウチらの人形があるんや」

「……すごいな、話には聞いていたが……」

「以外に作りがしっかりしてるんや、原価いくらやるな」

「それに、タマヤクリーク、会長でもある。」

「せやけど、一番売れとるのは、オグリのやけどな、みてみい、あと一つで売り切れや。」

「人気があるんだな」

「レースだけやなくて、大食い大会でも名を売つとるからな。」

「老若男女問わず、大人気ってわけや。」

「そんなのにも出たのか。」

「まーこのオグリならウチも欲しいわ、本家と違って飯代もかからへんしな！」

「それに、なんや速そうな顔しとる、トレーナー、コイツも育ててみいひん？」

「いいかもな。」

「え……」

「ははっ、せやる？」

「つと、あかん、ウチ、イナリと待ちあわせしとったんや、」

「もう行くわ、ほなな〜！」

タマモクロスは慌ただしく去っていったようだ。

「オグリキヤップのぬいぐるみ買うか。」

「え!? な、なんでだ、これはただのぬいぐるみだぞ?」

「その……トレーナーがついても走らないんだぞ?」

「いや……止めるつもりはないが、

そうか……買うのか。」

オグリキヤップは何やら落ち込んでいるように見える、オグリってこんなに面倒くさい子だったの!?

やめておくか、いや

「買うぞ。」

「……そうか……」

街中

少女「オグリキヤップさんだ〜!」

「おっとオグリ大事な大事なファン様だ、しっかりファンサービスをしてやれ」

そう言つてオグリキヤップに俺はペンと色紙を渡した。

「……トレーナーこれは……」

「いざという時にいつも持つてるんだ。早くファンサービスをするんだ。」

ファンサービスとはファンに握手などをする事であつて

希望を与えておいてそれを奪うことがファンサービスではない。

握手をしたあとにサインを書いて渡した。

「いつも応援ありがとう、これは私からの贈り物だ受け取ってくれ。」

少女「わく！ありがとう、私一生大事にします！」

「お嬢ちゃん、お兄さんがこのみんな大好きオグリリン人形もあげよう。」

少女「お兄さんありがとう！今日買ひものに行つたけど売り切れてて買えなかつたんだ。お兄さんオグリキヤップさんの恋人？」

「なっ……」

「ハハ、違ふよ、まあ、俺はオグリキヤップの相棒さ」

「それじゃあ元気でね、向こうでママが待つてるよ。」

少女「オグリキヤップさん！今日は負けちゃったけど次は勝つてください！応援します！」

俺はオグリと二人で手を振りながら少女を母親のところまで見送つた。

「……トレーナー」

「なんだ？」

「あげて良かったのか、欲しかったんだろう？」

「確かに、タマの言う通り……」

ぬいぐるみは飯代も掛からない。」

「いや、飯代は私だって自分で出すしトレーナーには負担はかけないが」

毎回奢ってるし、おにぎりは自腹で用意してるけどな

「だが、ぬいぐるみはフワフワもしているし、小さくてかわいい、これは勝てない。」

「さつきから、どうしたんだ、頼むからハッキリ言ってくれ。」

「……本物の方がいいと思う。」

私はすごく速く走れるからな。」

ぬいぐるみに嫉妬しているだと……クソ、メチャクチャカワイイ、俺が勘違いしてい

たら確実にやられていた。

「ぬいぐるみでは無理だが……私ならトレーナーの期待に応えられると思う。」

「いや……必ず応えてみせる、ぬいぐるみよりも。」

「いいか、最初の質問への解答は俺には本物がいるからなだ、それにぬいぐるみは応援の形だ、君にはもうコチラにもファンがいる、笠松のようにな、ぬいぐるみは気持ちなんだ。君のことが好きで応援しているなら自然と欲しくなるものだ。」

「そしてそのうえで言うぞ、本物が一番だ。」

「うん、任せてくれ。トレーナーがいれば私は誰よりも強く速くなれる。」

「全力でトレーニングに取り組むぞ、どんなに厳しいものだろうとも。」

「私はぬいぐるみより丈夫だしな。これからも遠慮なく頼む！」

「当たり前だ、よろしく頼むぞ、今日はパーティーに参加するけどな。」

パーティー会場

すでに盛り上がっている。ビワハヤヒデとタイキシヤトルが何故かダンスバトルをしている、ビワハヤヒデはすぐキレキレなダンスだ。何がとは言わんが揺れている。対するタイキシヤトルはフリースタイルな自由でアクロバットを取り入れた、ダンスだ、何がとは言わんが、揺れている。

そして何故かいる、マルゼンスキー、お立ち台のうえでジュリアナ扇子をブンブンしている。

ライスシャワーがそれを見て目を輝かせている。

肉が食えると聞いて我慢できずに駆けつけたナリタブライアン 「正樹ようやく来たか。モグモグ」

「ああ、凄く盛り上がっているな、全員自由だな。」

「WOW！キハラさん遅いデスヨー、すでにパーティーは大盛り上がりしてマース。」

うん、そうだな盛り上がってるな、あとビワハヤヒデはダンスバトルに負けたようだ

な。何が審査基準なんだ。

「大盛りあがりのところすまないが、タイキシャトルは次はどのレースに出る予定なんだ？」

「次は、安田記念に出るツモリです。年末はマイルCSに出る予定です。」

つまりリベンジのチャンスはあるわけだな、マイルCSは元々出走予定だったしな、そこでリベンジしよう。

「トレーナー……安田記念に出るぞ。」

なんだって!? オグリ日本ダービーにも出るんだぞそんなハードスケジュールさせるわけには行かない。仕方ない日本ダービーには出なくていいか。

「わかった、なら日本ダービーは出走やめるか。」

「日本ダービーにも出るぞ。」

「……オグリ、その意味がわかってるよな、かなり無茶なことだ。連続出走は体を壊してしまうかもしれない。」

「それでも、私は大丈夫だ。ぬいぐるみより丈夫だからな。」

決意のこもった目で俺を見つめる。

「わかった、その代わり少しでも異変があれば出走は取りやめるからな。それにリベン

ジは早いほうがいい」

さて、これが吉と出るか凶と出るか。

芦毛と時計

(ジリリリリ) ……

ハッ！夢か……今日はオグリキャップの大事なレース日。

早くレース場に向かわなくては…

さて今日は喫茶店でサンドイッチとコーヒーを食べてゆっくり落ち着いてから、オグリキャップの様子を見に行くこの予定だ。

閉まってるだど!?張り紙がある、なになに、ペットが脱走したので、探すので本日は休みます。

ペットの犬の名前はケンジロウ、ゴールデンレトリバーの赤い首輪、あだ名はケンちゃん。

これは仕方ないな…

何かがおかしい

馬鹿な、ここまで俺が見た夢と同じだ、だがそうになるとオグリは調子を落として負けてしまう。このまま同じというわけでもないだろう。ひとまず公園に向かおう。

公園

ケンちゃんがいた、花は食べてない。早めに動いたからか、これはどうやら正夢のようだったな、俺はこのまま追いかけた場合、ケンちゃんに一時間ほど逃げられて商店街にたどり着いて、ウララちゃんに手伝ってもらい捕まえることに成功する

商店街に向かおう。ウララちゃんに手伝ってもらおう。

商店街

ウララちゃんがいた、夢より人参が残っている、早めに来たからだろう。そうになると夢でのことだが約束通り人参をたくさん買おう。

「オヤジさん、人参をダンボール二箱分ほどくれ。」

八百屋のおじさん「あいよ!!しつかしすごい量だね、人参パーティーでもするのかい?」
「木原さんニンジンパーティーするの?ワタシも行きたい!」

「それなら今日はタイキシャツルの所に行けばパーティーをしてるからそこで、人参を食べよう。」

夢のとおりならタイキシャトルはレースの後にパーティをした筈だ。

「ウララちゃんお願いがあるんだけど、公園に脱走したワンちゃんがいるから一緒に捕まえてくれないかい？」

八百屋のおじさん「ウララちゃん、もう人參殆ど売れたからお手伝いはもういいよ。木原さんの手伝いをしてあげて。」

「おじさんありがとう！木原さん一緒に捕まえにレッツツゴードよ！」

ウララちゃんがすぐく元気だ。1割増しほど元気な気がするな、よくわからないが夢より早く捕まえられるだろう。

公園

「おりゃー！」

「木原さん見てみて、捕まえたよー！」

「さすがウララちゃん、立派なウマ娘だ。」

「???」「あら、木原トレーナー、ハルウララさん、おはようございます」

「たづなさんじゃないですか、学園の外で会うのはレースの話などを聞いていたとき以来ですね。」

たづなさん「あれから、2年経ちました、素晴らしいパートナーにまた出会えたよう

ですね。また担当さんのお話を聞かせてくださいね。」

「それならちょうどウララちゃん喫茶店に行く予定ですから一緒に行きませんか？」

たづなさん「喜んで、それにどうやら、『時計』を使っているようですね。」

「『時計』？」

たづなさん「ふふっ、効果は今実感していることですよ。」

「繰り返ししていることに気づいているんですか？」

まさか、俺が気付いていないだけで何周もしているのか

たづなさん「安心してください、一回目です、残り2回は起きるでしょう。それにルドルフさんを担当していた時にも起きてましたよ。」

「なんだって!？」

緑の悪魔「貴方はそれをデジャヴだと思っていましたでしたがルドルフさんの時には3回起きてました。起きると毎回ルドルフさんの調子が良くなっていました。ルドルフさんの喜ぶ行動を取っていたんでしょう。」

「木原さん、何の話をしてるの？」

「ウララちゃん、ワンちゃんを連れて喫茶店に行ってくれ、マスターが美味しいパフェを作ってくれるだろう。俺も後で向かう。」

おかしい、たづなさんから異様な気配を感じる。

緑の悪魔「確かに彼女たちには、聞かれると困る話ですね。レースの結果を納得の行くまでやり直すなんて。」

「たづなさん、貴方はいったい何者なんですか?」

緑の悪魔「ふふ、日本ウマ娘トレーニングセンター学園理事長秘書の駿川たづなです。」

ごまかしているのか、この人はそれとも他の意図があるのか。

「あと2回は起きるといふのはどういふことですか?」

たづなさん「あなたが『時計』をもう持っていない場合二度と起きませんよ。」

「たづなさん俺は『時計』なんて物を持つていた覚えはありません。俺が持っている分かりやすい時計はこの腕に着けてある。G-SHOCK位です。」

たづなさん「気付いていないだけだと思いますよ。勝手に消費されるわけではないですし、全てのレースで使えるわけでもないです。」

たづなさん「これ以上話をして無駄ですから、一緒に喫茶店に行きましょう。」

私はたづなさんと共に喫茶店に行った。

喫茶店に行くとマスターが開けてくれた。お礼でコーヒーとサンドイッチを作って

くれる。ここまで夢のとおりだ、たづなさんが居るのを除いて。

「たづなさんここに来たのは初めてですか？」

私はさっきのような話をする気にはなれなかった。恐怖であり未知であること、『時計』については忘れたほうが幸せだろう。

たづなさん「はい、初めてでとても楽しみです。」

にこやかに笑っている。さっきまでの姿は何だったんだ

俺が頼んだサンドイッチの具材はスクランブルエッグにレタスそして主役のベーコンを挟んだ、シンブルイズベストな物だ、マヨネーズなどソースなどは入ってなくて塩コショウのみだ。

たづなさんはホットドックだ、3個もある、朝から食べるんだな、脚もウマ娘に追いつくレベルで速いし、何者なんだ。食べるのも早いな、俺まだ半分も食べてないのにもう一つ食べ終わってる。ウララちゃんはパフェを食べ終わったのか、ワンちゃんをナデナデしている

ん、そういうえば帽子を外したところを見たことがない。

「たづなさん、そういうえばこの店、実は格式が高いので、帽子は脱がないといけないんで

すよ。」

たづなさん「えっ！そんなんですか、でもあまり脱ぎたくないんです……」

たづなさん「木原トレーナー。」

「なんででしょう。」

たづなさん「どう見ても貴方の服は、スマートカジユアルとかそういうものではないと思うんですが、」

今の服装を思い出してみた。

コートにダメージジーンズ、売れないバンドマンっぽい服装だ、いやバンドマンがそういうお店だめというわけでもないんだが、ダメージジーンズはお断りされるだろう。

「正直にいうので一度帽子を外してくれませんか」

「嘘をつく人の云うことは聞きません。」

そう言って、たづなさんは少し機嫌を悪くした顔で横を向いた。カワイイ、しかし、どうして帽子を取ろうとしないのだろうか………

ハッ！まさか、いやそんなバカな、

ゴールドシップが『内緒だけどお前にだけ教えてやるぜ』と言って実はたづなさんに

は角が生えていて、パワーアップしていると云っていた、力を出すためにはエネルギーを貯める必要がある、だからたくさん食べるんだろう……

ハッ！

帽子を外さないと言うことは耳を隠しているともとれる！

耳を出さない、特徴的な耳、ウマ娘！そう！たづなさんの正体はウマ娘だったんだよ！！

な、なんだってー!?

と云うだろう、ウララちゃんの驚く顔が目浮かぶ私のこの完璧な推理の前には、フフ、あとはたづなさん本人に実はウマ娘でしょうと聞いて裏取りをすれば完璧だ

ハッ！

だがゴールドシップはウマ娘の耳とシッポは着脱は可能になっていると言っていた、

つまり俺が取るべき行動は！

「たづなさん『外す』までのあいだ目を瞑って待ってますから外してください。」

こういうと耳を外すところを見られない！恥ずかしい部分は見られないということ
で外してくれる。完璧なアイデアだ！

たづなさん「イヤです。」

心底嫌そうな目で私を見てくる。なんだろうここの目でも嫌がつてると悪いことをして
いる気分になってくる、もう一回この目で見られたら心が壊れそうだからもうやめよう

たづなさん「木原さん今さつき『時計』を使いましたね、2回も使いました。」

「えっ」

「気づいて無いんですか？サンドイッチを見たらわかるかも知れません。」

……!?!?ばかな私のサンドイッチが食べる前の状態に戻っている、ウララちゃんがパ
フェの最後のひとくちを食べようとしている、そんなことがあるのか……

そうかこれが時計の力か、過去に戻り変えることで現在と未来を変えそんな力か。

「たづなさん、この力があればどんなレースでも負けないと思いますよ。」

発動条件はわからないがうまく使えばオグリの敗北を無くす事ができる、素晴らしい

力だ。

「もう使えないと思いますよ。ルドルフさんの時は3回使ったあとはもう使っていませんでした。」

えっ、勿体ないことしたな

「それに私は感知出来ませんが、流石になんの為に巻き戻しているのかわかりませんが、トレーナーがやり直したいことといえばレースでしょう。」

そのとおりだ、俺はもう使えなくなつたが、ん、もしかして他のトレーナーも使えるのか。

「もしかして他のトレーナーも使えるんですか?」

「使える人もいるかも知れませんが、そのときには貴方は感知できませんでしょう。本来使った人しか気付けないものですから。それにあなたの夢はそんなものに頼つて叶えるものじゃないはずですよ。」

「……忘れてください、実現できるようになるまで……少なくとも秋までは」

対策は無理か、仕方ない、俺はオグリを全力で鍛えるしかない。

さて、話も済んだ、食事も取った、負けない為に早めにレース場に行つておこう。

「たづなさん、今日はありがとうございます、マスターが奢ってくれるそうなので俺は帰

りますね。」

「オグリキャップさんと二人で頑張ってくださいね。」

「ウララちゃんも今日はありがとう、おかげで色々うまく行きそうだ。」

「木原さんも元気でね、私も早く勝てるように頑張るぞー」

東京レース場

まずはコーラを自販機から無くしておく、こうすることで、イベント 炭酸抜きコーラを無くせる、こうすることでタイキシャトルに背骨を折られかけることもなくなる、ただ、このあとオグリの決意を固める為にも、レースのあともう一回遊びに行かないといけない、そして、前回の流れは敗北したが良い展開だった、再現する、タイキシャトルをパーティーに誘う、だが俺の家で準備はされていない、タイキシャトルはバツチリだろう、それを見越したうえで話誘いがえされる、これが一番良い流れだ、タマモクロスもいるだろうし、こうすると前回起きた、オグリキャップの成長とタイキシャトルへの勝利を両立できる。ゲームみたいに考えてるがタイムスリップをしたらこんな発想も出てくるようになるだろう。

おっとオグリが早めに現れた、

「……? トレーナー、その沢山あるコーラは何かに使うのか?」

「オグリ、調子は良さそうだな、このコーラはレースの邪魔になってしまうから、今のうちには排除している。」

「……? どうしてそのコーラが私のレースの邪魔になるんだ。」

「実はコーラってレース前に飲むと失格になる可能性があるんだ、カフェインが理由だな。」

「えっ。そうだったのか。」

「失格になるウマ娘が出ないように、コーラを排除しないといけない、これはやましいことではない。」

半分ウソでもあるが、オグリは俺を信頼している、問題はない、説明をしたあと、急いでコーラをオグリの控室に持っていった。

オグリの控室に行き、オグリと少しのあいだ話をした、

オグリの調子は前回と変わっていない気がするな、俺がタイキシヤトルに背骨を砕かかけけるまで、最高をキープしていたんだろう。流石だ。

オグリが立ち上がった、どうやら移動するらしい。

おそらく前回このタイミングでオグリが動き出し、タイキシヤトルとハグをしている俺を発見する流れになったんだろう。オグリについて行こう。

「その…トレーナー…お手洗いにいきたいんだ。」

「ああ、口に出させてすまない……」

「その…案内してほしいんだ。」

「……そういうことか、わかったトイレまで案内する」

ん、待てよ、この行動は俺の行動ではどうにでもならないオグリの生理活動だ。

もしかして前回のオグリって漏らしたの、嘘だろ、いやいやいやいや、そんな訳はない。だがオグリの方向音痴はただの方向音痴とは格が違う。あり得るなというかそれで調子下がった可能性があるのでは、あれくらいの年の女の子が漏らすってやばいだろう、大事件だろ、漏らしてないことを祈りたい。

他のウマ娘の偵察や対策よりオグリの面倒を見て強くなってもらう方がいいんだろ。

オグリをトイレに案内したあと

タイキシヤトルとビワハヤヒデが話をしているようだ、彼女らの会話は炭酸抜きコーラ無しでも始まるようだ、

取り敢えず話しかけよう。

「ハローエヴリワン、マイネームイズキハラマサキコレカラヨロシク。」

「タイキシヤトルデース。ヨロシクオネガイシマース」

「あと日本語で大丈夫デース。日本語は大体分かりマース。」

「木原トレーナー、少し文章がおかしいぞ。」

「伝われば、問題ナツシングと言うからな。」

「二人は盛り上がっていたが何の話をしていたんだ？」

「タイキがパーティーを開くと言うんだ、私もそれに誘われてな。」

「キハラさんもパーティーに来ませんか？」

理想の流れだ。問題なし参加一択だ。

「わかったオグリと、話して決めるよ。たぶん参加すると思うが。」

そう言つて俺は手を前に出した。そうこれこそが誘いハグを防ぐ手段、予めを手を出しておいて握手にするだ！

フハハハ！完璧な策とはこの事だ。

そうだ、さあ、手を握つて握手だ。

うん、普通に握手が終わった、頭に一瞬握撃が浮かんだが、あれは人間業じゃない、ウマ娘でもできない。

「楽しいレースにしよう」

「勿論です、でも勝つのはワタシです。」

オグリが出てきたようだ、一緒に控室に向かおう。

控室で言った

「ほっほひっふー！トレーナー！今日は必ず勝ってみせるぞ、任せてくれ。」
「やっぱり調子がいいときに言うんじゃないか。」

「頑張れよ。」そう言って俺は、オグリキャップがターフに向かうのを見守った。

結果は、1着だった。『時計』の力は偉大なようだ、レース結果まで変えられることがはつきり確認できた。

タイキシャトルは2着だ、だがこれで本当に良かったのだろうか、ウイニングライブのセンターはオグリキャップになっていた、夢の中で観たウイニングライブはタイキシャトルがセンターだった、オグリキャップが楽しそうにライブをしている、だがこの結果は正しい結果と言えるのだろうか？

炭酸抜きコーラを消し去り、一時間ほど早く終わらせた脱走犬探し、そしてオグリキャップの勝利、私は取り返しをつかないことをしてしまったのだと思う。私はオグリの純粋な笑顔を穢してしまった。彼女を褒め称えることができるのか、私は、樂をできたのかもしれない、だが私は彼女を勝たせるために、彼女の未来を穢してしまった、どれだけオグリキャップが輝かしい戦績を残しても私の心の中には『時計』を使い、勝負の世界を侮辱した、その『毒』が私に纏わり付く。

気づいたらライブは終了していた。

オグリが話しかけてきた。

「トレーナー！見ててくれたか？」

「もちろんだ、次もセンターで踊ろうな。」

私はもう『時計』を使えない、手段を選ばずオグリを勝利させる、それすらも取りづらくなった。

「トレーナー！今日はどこに行くんだ。」

「ご飯を期待しているんだろう。」

「タイキシャトルの所でパーティーだが、その前にショッピングセンターに行こう」

ショッピングセンター

前回は負けたあとに来ていたが、本来は勝った後に来ようとしていた。

オグリは手を握ってくる、とても優しく握っている、喜んでいるのが見なくともわかる。

前回と同じ場所にタマモクロスがいた。前回同様挨拶だ

「やあ、元気にしていたかタマモクロス。」

そうして始まった会話は前回とほぼ同じ内容だ。

タマモクロスにいろんな人形があるが一番人気はオグリ人形だと、伝えられ残り一つだと伝えられる。それを伝えた後にタマモクロスは立ち去った。

私はそれを買った、オグリが少し悲しそうになっている

そしてその後、パーティー用にみやげを用意してタイキシヤトルのパーティー会場に向かった。

そしてオグリキャップのファンの少女に出会った。

オグリキャップに色紙とペンを渡しサインを書かせた。

少女はオグリキャップが勝利したことによつてか、前回より喜んでるように見える。

少女は買えなかったようだが、ぬいぐるみを買に行くとき前回より、早めに買いに行つたおかげで、間に合った、勝利するとたくさん売れるようだ、

少女の笑顔は私の心に傷を与える。胸を張れる勝負ではないはずだからだ、そして私は少女にオグリの相棒、と答えた、相棒を欺いているのだ。さらにファンまでも欺いているのだ。もう後戻りはできない。

私は決心する、このことを人に伝えることはないだろう

たづなさんは知っているだが、この心の毒は私の中だけに留めておく、オグリキャツプは被害者、タイキシヤトルも被害者である、出走したウマ娘全てが被害者であり、その加害者は私だ、未来は変えるのではない、穢す物だ

勝負は1度きりだから素晴らしいのだろう、これは心を腐らす毒なのだろう。

この毒は私だけが持つべきものだ、この気持ちは私だけが持つべきものだ。『時計』の力は使つてはいけないものだ。

「オグリ、パーティに行くぞ。」

パーティは前回の面々に加えハルウララが加わっていた

タイキシヤトルがこう言ってきた。

「オグリ〜！次に出走予定のレースは何ですか？」

「日本ダービーと安田記念だ。」もぐもぐ

「なら、私は安田記念に出走シマス。そこでリベンジデス。」

「オグリ安田記念に出る予定は無かったんだが、」

「トレーナー、今日あの女の子のおかげで応援されていることに気がつけた。レースに沢山出走したい。」

「連続出走は体に悪いんだがその様子だと、やめる気はないようだな。」

「わかった、精一杯サポートしよう。」

「ありがとう、トレーナー！」

「それではオグリにキハラさん、首を長くして待っていてください！」

「それを言うなら、首を洗って待っている。だけどな」

前に進むしかない筈だ、『時計』を使う者も現れるかもしれない、『時計』を使つての勝利は絶対にさせてはいけない、そしてオグリを必ず最高のウマ娘にしてみせる

芦毛のダービー

時計を使ってレースに勝利してから6日ほどたった、私は時計についてたづなさんに説明されたこと以外にも知らない、あの一日を何度もループするんじゃないかと恐れていたが、そんなことは無さそうだ。そんなシリアスなことを考えながら今日はオグリキャップを家に呼んでおにぎりを作っている。

「やつぱり、難しいなどう作ってもトレーナーのおにぎりの味にならない」
軽くつまみ食いをしながらさういう

「難しく考えるものじゃないさ、適当に、心を込めて作ればうまくなるおにぎりってそんなもんさ」

だがおにぎりは奥が深い、料理番組で一見そんなもん流す必要なさそうだが、塩むすびを作るのをプロの料理人が作っているのを15分間放送したことがあった、あれは驚いた、

「トレーナーちゃん綺麗に掃除もしてるんだな。」

「それに関しては、掃除が好きな知り合いがいるんでな、『キサマにはたつぷり重曹を味あわせてやろう』とかそんなことを言いながら掃除する変なやつだ。」

あれからエアグルーヴがルドルフとたまにやってきて掃除をするようになった。よっぽどエアグルーヴはメンタルをやられているようだ。

それにトレーナーをまた頻繁に変えているようだしそろそろしっかりした、相棒を捕まえてほしい、まあ、生徒会活動とレースの両立に付き合ってくれるトレーナーがあまりいないのだろう。ルドルフといっしょにやってた時も生徒会活動はどうしても負担になっていたしな、負担だけにならずウマ娘の成長に役立つわけでもあるんだがそこを考えるトレーナーが少ないんだろう、これを考えるやつは少しゲスなやつだしな。

「オグリそろそろおにぎりが百個を超えそうだからそろそろ作るのをやめて一緒に食べよう。」

「……トレーナー、おにぎりは外で食べよう。」

「そうだな、外は晴れてるし、まだ十二時にもなってないからな、ピクニックには丁度いいだろう。」

オグリは連続出走を決めているため、あまりトレーニングはしないほうがいいと判断して、ここ3日は軽めのトレーニングをそして今日は完全な休みだ、元々土日は自由にしてくれって言うのが俺の方針なんだが、今日は元々無理矢理なにもするなと言っていた。そう言うとおにぎりを作っている様子を見せてくれと言われた。たびたびおにぎりを作っている様子を見せてくれと言われていたのでこの機会に見せておこうと思

朝からオグリを迎えに行つて、おにぎりを作つていた、オグリはおにぎりの出来に納得していないが米も尽きるし、ピクニックにでも行こうと思う。

大きめのバックバックにおにぎりを詰めた、量が多すぎて入り切らない、普段50個は入っているが、流石に100個は入らない、半分は冷凍庫に入れて保存しとこう

「オグリ、おにぎりは60個ほど持つて行くから、40個は保存しとくぞ。」

「……保存するおにぎりはトレーナーが食べてくれ、今日は二人で作つたおにぎりを食べよう。」

普段ピクニックは山登りをして山頂で美味しく弁当を食べるタイプだが、オグリにきつい運動をさせないつもりだから山登りはしない、なので公園にやつてきた。

公園

1時頃

ウマ娘が居た。子供を引き連れてこつちにやつてきた。

ハジケリストなウマ娘『おつ、あそこに怪人がいるぞ！お前ら捕まえたやつには褒美

を取らせるから捕まえてこい！』

子どもたちに捕まる、……………

「ゴールドシップ何をしてるんだ、子どもたちと遊んでいるのか？」

「よし、お前らよくやった！お前たちにはこの男をくすぐりの刑にする褒美を与えてやる！存分にくすぐれ！」

オグリが公園のベンチで俺たちの様子を見ている。多分遊んでいると思っただろう。実際には遊ばれているんだが、

子どもたち「ハハ、それぞれー！」

こちよこちよしてきた

「あつはつはははははははははは！ちよ、やめて笑い死ぬから。」

子どもたち「このお兄ちゃんこちよこちよに弱いぞ、みんなもつとしよー」

子供に5分ほどこちよこちよされた。

「さあ、これでエデンについて話すつもりになっただろう！」

「エデン……何だそれ。あとたづなさんに生えている角は何なんだ？」

「何いってんだ人間に角が生えてる訳ねえだろ。」

「えつ、ちよつとまって、昔言ってた耳と尻尾は着脱可能って言う話も嘘なのか。」

「オイオイ、ゴルシちゃんが嘘つくわけ無いだろお前トレーナーなのにウマ娘も信じれ

ないのかよ、やっぱトレーナーは全身緑で歯がむき出しのやつだよな。」

「そんなトレーナーがいるわけ無いだろ!! 何だガチ〇ピンか! そいつは!!」

「それよりお前なれたのか? 立派なマグロ漁師に」

「俺の目標は最高のトレーナーだ!! マグロ漁師じゃない!!」

「そうか! なれたんだな立派なカニ漁師に、お前がロシアのカニ漁船に乗るって言ったときには今生の別れだと思つたがまたあえて嬉しいぜ!」

「まずい会話にならない、オグリも待つてるしここは、話しに乗って会話をぶった切りにいくぞ。」

「俺もカニ漁師になれて本当に嬉しいよ、ゴールドシップは元気にしていたか?」

「何いつてんだ? お前はトレーナーだろ、どうした頭がぼくとしてるのか?」

いきなり冷静になるんじゃない! ようやく狂気に合わせられると思つてたら一気に突き放された気分だ。

勢いで話を誤魔化すしかない!

「フツフツフ、エデンへの行き方は今行われている、トウインクルシリーズのURAFアイナルズに勝利するとわかる。」

「君は、これからレースに勝つしかないのだよ。」

「全ては、エデンの名のもとに……」

イケたか！イケてくれ！結構恥ずかしいからな！

「チクシヨ―！テメーらの掌の中つて訳か、だがゴルシちゃんはそのなもんに負けねー！」

「絶対お前らより先にエデンにたどり着いてみせるぜ！」

良かったお気にめしたようだ、ゴールドシップは子どもたちを引き連れてどこかに遊びに行つたようだ。

座っているオグリに話しかけに行く。

「トレーナー、さっきは楽しそうにしていたな。」

「子どもたちの相手だけならまだいいんだが、ゴールドシップの相手まですると疲れ」

オグリと共に景色を楽しむ、花が綺麗に咲いている。エアグルーヴの趣味が花を育てることだと聞いていたが俺は見るだけで十分だろう、それだけで心があたたまる。

「オグリこうしていると心が休まるだろう。」

「トレーナー、私達はこれで大丈夫なんだろうか？」

しばらくトレーニングが緩んでいるから、少し不安になっているのだろう

「オグリ君は連続出走をする予定だからな、あまり運動をするのは良くないと考えて、しばらく控えめのトレーニングのほうがいいんだ。」

「それに君はめちやくちや強いからな。少し休んでも問題ない、タイトルが全てを物語っているからな。」

「……タイトル？なんのことだ？」

やばいな、ゴールドシップと話したから変なことを言ってしまった。

「気にするな、そんな時は空を見るといい。不安になったときに考えをまとめる時は空を見るといい」

「空か……」

オグリキャップが空を見上げている、俺も考える時は空を見上げている、夜空の時もあるし、雨空の時もある。

今日は綺麗な晴れ模様だ、こういうときに空を見上げるのは心の余裕につながる。じくと空を見ている。

「何を考えているんだ。」

改めて口に出ると違うものが出るはずだ、そしてその言葉は最初より核心をつく。

「故郷のことを考えていた

みんなは元気になっているだろうか……。」

「ん……あの雲の形、

どこかシゲさんに似ているな。」

そうか故郷の人たちに、自分の活躍が伝わっているか気になっっているんだな。ぬいぐるみが沢山売れてファンもできたが、頑張ってきた故郷が恋しくなったんだろう。

「あつちは、トメさんで……」

向こうは……どて煮。はあ……。」

なぜどて煮？てか、ホームシックになつてないか？日本ダービーのレースは明日だよな、やばいどうしてレース前に限つて調子を落とすんだよ……」

よしオグリの調子を上げる為に動き回ろう！

「オグリ、おにぎりは食べ終わったな！」

「……ああ！トレーナーおにぎりはちゃんと食べ終わったぞ。」

「少し公園の中を見て回ろう。」

フッフッフ、私はオグリが公園でかわいがっている、猫のハツラツが居るのを知っている。故郷のトメさんの猫である、ハツラツのような元気な猫は今のオグリのホーム

シツクを治すのに最もいい存在と言える。

そして呼び出す為に、私の胸ポケットにはマタタビ、バックパックには、ねこじやしを入れてある。私に死角は無い。

そしてこの時間はすべり台の下で、陽の光を避けて寝転がっている。カワイイ

そしてオグリをハツラツが見える所に誘導する。これによりオグリは自分でハツラツを見つけたように錯覚し紹介してもふもふする。

「ん……、ハツラツそこにいるのはハツラツだな。そこは危ないからこっちに出てこい。」

「——おっと！」

「出てこいとは言ったが、飛び掛かって来いとは言っていないぞ。」

「まったく……：そういうヤンチャなところもトメさんが飼っていたハツラツにそっくりだ。」

「トレーナー、こいつはハツラツ。私の友達だ。」

よし、完璧な流れだ。

「そうか、友達か、かわいいやつだな。オグリちようどねこじやしを持つてるからそれで遊んでやれ。」

「トレーナー、なんでねこじやしを持っているかわからないがありがとう、これでハツと遊ぶ。」

オグリがねこじやらしで野良猫のハツラツと戯れている。カワイイ

「はは、ハツラツ楽しそうだな。」

ハツラツがニャーと鳴きながらねこじやらしに猫パンチをしている、美少女と猫、素晴らしい構図だ。

2時間後

ずっとオグリがねこじやらしでハツラツと遊んでいる。いくらなんでも飽きないのか？あと猫は気まぐれで飽きやすいんじゃないかなかったのか。

おっとハツラツがオグリをグルーミングした。それに対抗してオグリが「グルーミングをしてくれるのか。」

ふふ、お礼に撫でてやろう。」

「もふ、もふ……ハツラツは柔らかいな。」

いつまでも撫でていられそうだ……。」

なにか不穏なことを言っている。

2時間後

「しまった、もうこんな時間か……!」

「トレーナー、何時間も付き合わせてしまつてすまない。」

「ああ……大丈夫だ。俺はちゃんと起きてるぞ。」

「ん？トレーナー大丈夫か？」

「ああ気にするな。君が元気ならばそれでいい。」

「だが、予定していた、自主練習の時間がなくなってしまった。」

あれかえってオグリの調子が下がった気がする。

ならば

「オグリ、門限まで時間がまだあるから俺の家でご飯を食べないか？」

食事で元気を出させるしかない、おにぎりは食べ慣れているから元気を出さすことができない。他の料理で元気を出させるしかない

「わかった、今日は自主練習もやめて一緒にご飯を食べよう。」

よしこれで巻き返そう。

トレーナーの家

ポストによく見たら手紙が入っているなオグリキャップが帰ったら読もう。

そして私はオグリキャップが元気を出すようにあらゆることをした。食事を作り、カサマツ音頭を踊り、カワイイ猫動画を見せ、いろんな手段を使ったがあとひと押しが足りない気がした。

「トレーナー、今日は楽しかった。明日は絶対勝つ。楽しみにしてくれ。」

まずい絶好調じゃないはずだ。あとひと押し何かが必要なはずだ。

だがオグリは帰ってしまった。

俺は仕方ないので手紙を見ることにした。

「これは……明日オグリに読ませなければ。」

ダービー当日

やばいゴールドシップがいる。捕まるとオグリに見せるものが見せれなくなってしまふ。

となると少し遠回りになるが別のルートを取るしかない。

やばい楽屋が少し空いている。これは覗くしかない。

「こいつらうまびよいしたんだ!!」

何故か、葵ちゃんと祥太朗くんがミークに謎の言葉を言われている、そういえばうまびよい伝説のうまびよいってなんなんだろうな。

祥太朗くんは忙しいなこの前はスパーパークリーグと赤ちゃんプレイをしていたが今度は葵ちゃんと遊んでいる。

固いやつだと思っていたが結構軟派だったのかもかもしれない。
さて遠回りはこれぐらいでオグリの部屋に行こう。

オグリの部屋

「トレーナー今日は必ず勝ってみせる任せてくれ。」

頼もしいがこれを見せないといけない

「オグリこれを見てくれ」

「……どうしたんだ、トレーナー？」

「……っ！トレーナーこれは。」

「そうだ、ファンレターだ、前の時にも言ったが君を応援している人がいる、これでもつと心に火がついただろう。」

「ああ！トレーナー、この手紙の差出人のためにも負けるわけにはいかない！」
そうしてオグリを私は送り出した。

実況 「一番人気3枠6番オグリキヤップ覇気を感じます。」

解説「私が一番期待しているウマ娘です、ぜひ頑張ってほしいです。」

実況「この評価は少し不満か？2番人気5枠9番ゴールドシップ」

実況「3番人気はこの子ハッピーミーク実力では負けていません」

実況「威風堂々とスタートを待ちます。」

実況「体制を整えて、いまゲートが開きました！スタートです。」

実況「ゴールドシップ少し出遅れたようだ、しかしこの子は後方からのワープするよ
うな末脚が魅力なウマ娘です。」

実況「ハッピーミークかなり飛ばしています。」

解説「少し、掛かっているかもしれないませんが、一息つけると良いですが。」

実況「前から4番目はオグリキャップ、前を狙っています。」

レース終盤

実況「おっと！ここで伸びてきたのはゴールドシップ

バイトアルヒクマヤトンネリングボイスを次々抜いていく、凄まじい末脚だ！」

実況「オグリキャップもここで仕掛けてきた！ハッピーミークに追いついた！」

実況「ハッピーミーク苦しいが粘っている。しかしここでオグリキャップとゴールドシップが抜け出した。」

実況「オグリキャップ、ゴールドシップ並んでいる凄まじいデッドヒートです。」

実況「このまま、並んでゴール!!わずかにゴールドシップが体制有利か!?!」

……

実況「確定しました、一着オグリキャップ！皐月賞と日本ダービーを制し三冠ウマ娘に近づきました。」

解説「2着のゴールドシップも健闘しましたが、どうやらオグリキャップのほうが仕上がっていたようです。」

ということでオグリキャップは勝利した。

ちなみにファンレターの内容には天皇賞春を勝利した。タマモクロス以上の活躍を

祈ってますとも書かれていた

次のレースは安田記念タイキシャトルとの再戦だ。今度こそ完璧な勝利を！

ところで祥太朗さんと今回のレースに出ていないタマモクロスとナリタタイシンが何故かガラガラを持ったスーパークリークに追いかけていたがあれは何だったんだらう。

芦毛と勝負師

日本ダービーの次の日

「…トレーナー、少し顔色が悪いが大丈夫か？」

「心配させてすまないオグリ、朝変なものを飲んでな」

「本当に大丈夫なのか？保健室に行くか？」

オグリがとても心配している、俺の舌に合わないものを飲んでしまつて気持ち悪くなつてしまった、朝に作つてそのまま飲むじゃなかった。

「大丈夫だ、しばらく経てば元気になるはずだ。」

「トレーナー…昨日のレースはどうだった？」

「いい勝ち方だったと思うぞ、ゴールドシップの追い上げがかなり怖かったがしつかり最後までスタミナがもつて走りきれたから、問題ないはずだ。」

そうなるどダービーよりさらに短いマイルの安田記念はスタミナの強化は必要なさそうだ。さてそうなるど今日の朝作つたこれの価値が本当になくなるなこの「牛乳コーラ」

「トレーナー…水筒を買つたのか？いつもはペットボトルのお茶を飲んでいたが。やつ

ぱり中身はお茶か？」

「お茶ではない、栄養はバッチリだが、すこぶるまずい、学生の頃に友達と飲んだファミレスのドリンクバーの飲み物全部混ぜたやつにまずい、コーンスープとかコーラを混ぜたやつにだ、飲んだあと一日は体調を崩すこと間違いなしだ。」

ちなみにそのスープを飲んだやつは6人だがそのうち4人は次の日学校を休んだ、そして残りの二人俺ともうひとりの奴は休み時間に入るたびトイレにいった、半分食中毒だ。(お店に罪はありません、彼らは若くアホだったので。)

その話をしたあと、オグリと体育館に移動する

ここで、トレセン学園のカリキュラムについて説明をしたいと思う、午前は普通の学校でも行われるような授業とレースについて勉強する、G1に出走するにはどうすればいいとかそんな感じだ、普通の授業は一般の普通化高校より難しいが超難関の高校よりマシだ、俺は高校までしか行っていないが偏差値72の高校で高成績だった、だが生徒のウマ娘達は午前の授業のみなのでテストを受けると普通に赤点になる生徒が多い、俺も午前の授業のみで母校のテストで赤点を取らないようにしろと言われても無理だと思ふ。

オグリはよくお腹がなりまくるので食堂に授業中に食べに行けと言われている、

トレセン学園は文武両道を目指すように言っている、あまりにも無視すると「肅清！

遺言を忘れずにな！」

と理事長に言われてしまう。

なのでオグリを運動させない為にも今日は勉強をすることにした、ちなみにあまりにも成績が悪いと夏合宿中に補習を受けることになる、夏合宿に集中させる為にも成績はあげておいたほうがいい。

まあ、半分遊ぶんだけどな、俺は将棋盤とコマそれと眼鏡を持って体育館にはいった。「トレーナー…それは何に使うんだ？」

「将棋をするんだ、そして形から入ろうと思いいこの地球を代表する最強の将棋指し羽○さん眼鏡を用意した、これをかけてみてくれ。」

「トレーナー私の耳に掛けれるタイプじゃないから無理だからトレーナーがかけてくれ。」

忘れてた、ウマ娘の耳は頭の上の方にあるのに将棋界最強のヒトムスコの眼鏡を掛けれるわけがなかった、しかたないので、私が掛けてみた、

「トレーナー似合ってるな、つけると先生つて感じが増すから毎日着けたほうがいいかもしれない。」

「ハハッ、そう言うなら今日試して評判が良かったら毎日つけるよ。」

そう言いながら、将棋の駒を並べた、ひとまずオグリに駒の動かし方を覚えてもらい

適当に打った、私は接待プレイを嫌う男だ、当然初心者相手に矢倉を組んで盤石の体制で勝利を得た、2回線目はオグリは私の打ち方をみて学習したようで、見様見真似で矢倉を組んできた、しかし強みを完全に活かしきれず、飛車を取ってどんどん蹂躪した、3回目オグリが二歩をした、初心者では気づかないことだ、それを指摘したが続けた、途中で気付いたが俺は角がワープしていた、オグリには秘密だ。

そんな感じでオグリと将棋を打っているとウマ娘が近寄ってきた。

とつてもギャンブラーなウマ娘「体育館の真ん中でヒリつく空気の中将棋とは面白そうなことをしてるな。」

「その声と、若干校則やぶり気味な服装のウマ娘といえはルドルフのチェス友達のナカヤマフェスタだな」

「フフ、私のことをよく覚えていたな、最後に会ったのはもう2年以上なのに。」

「俺もチェスをしてボコボコにされたからな、二回戦にチェスボクシングにして戦ったがチェスとボクシング両方でボコボコにされて完敗したからな。」

ボクシングの方は4ラウンド目で俺のストレートに合わせた、クロスカウンターで倒されたがゴングに救われチェスに戻ったところ意識が朦朧としてマトモに打てなくなり敗北した。その時は大丈夫と伝えたがルドルフが看病すると言って俺の話を聞かなくなってしまうが、レースには勝てたので問題ない。いつかナカヤマフェスタにはり

ベンジしようと思っていた。ちょうどよい機会がやってきたようだ。

「木原さん、あたしとまた勝負してくれないか、あんたは己の勝負で決して油断をしない、だがスキを見つけたしぬくその気持ちを得るためにはアンタを倒すのが一番いい。将棋で勝負してくれ。」

「いや、その前にオグリに勝つてからだ、今一応授業中だから、俺の目的はオグリの頭の回転を速くするためのトレーニングでもあるからな、オグリも良いな？」

「ああトレーナー、私に任せてくれ。」

そういつたオグリは善戦したと思つたがナカヤマフエスタの策にハマり敗北した。相変わらず勝負に強いなナカヤマフエスタ。

「オグリ君の仇は俺が討つ、将棋はチェスと違ってまだ自信があるからな、任せてくれ。」
「トレーナー……任せたぞ！」

「ナカヤマフエスタ、俺は今『牛乳コーラ』を持つている、敗北した方はこれを飲む、味は不味くて体調を一日崩すぐらいだ。これを3回勝負をして一回の敗北ごとに飲んでもらう。」

「イイねえ、リスクが無ければ勝負は面白くない。あんたとは面白い勝負ができそうだよ。」

そういつたあと俺は将棋をした、一戦目は俺が勝利した

オグリとの戦いを見てナカヤマフェスタの戦法を覚えたからだ。

「ナカヤマフェスタちゃんまずは一杯だ、紙コップがあるからそれに入れてあげよう。」
ニッコリ

「一戦目は木原さんの勝ちだが、2戦目はわからない。楽しみにしててくれ。」

少し悔しそうな表情で牛乳コーラを飲んでいる、堪らない、ウマ娘の整った顔立ちが苦悶に歪むのがとても唆るだがこれは過程だ、勝負の後はナカヤマフェスタのお口直しにファミレスにでも連れて行ってあげよう。オグリも頭を使ってお腹を空いてるだろうし。

「ククク、随分と苦しそうだが味は堪能できたかな、君は後これを最低2回は飲むことになるからねえ。」

その後私は二杯の牛乳コーラを飲んで苦しんだ。

芦毛と皇帝と帝王とトレーナーのレース

私が牛乳コーラを飲んで苦しんですぐあとのことだ、オグリが私を心配しているが自業自得なのでしょうがない

「オグリ、ナカヤマフェスタは強かったな、やはり俺も得意な麻雀にすれば良かったか。」
「トレーナーはすごいぞ、一戦目は勝てたし次はわからないさ。」

そうしているとルドルフとテイオーが現れた。

「トレーナー君、何をしているんだい、それとその眼鏡とても似合ってるよ。」

「将棋をしていたところだ、ナカヤマフェスタにやられてしまっただけな。メガネは最強の将棋うち○生さんばいメガネを用意した。」

「実は生徒たちから体育館の真ん中で将棋をしている不審な人物がいるから、調べてほしいと頼まれてね、早速来たわけだが君たちだったんだな。」

「それにナカヤマフェスタと勝負をしたということとはなにか賭けて勝負したんだらう？」

「ああ、負けた方はこの『牛乳コーラ』を飲むという条件で勝負をして俺が敗北した。」
「トレーナーなら私とも勝負をしてくれないか？負けた方は勝った方の言うことを何で

も聞くという条件で。」

「いいだろう、俺が勝てば暫くオグリのトレーニングに付き合ってもらおう。そして様々なことを融通してもらおう。オグリもそれでいいな。」

「トレーナー……それは必要なことなのか？」

「ルドルフは経験豊富だし、導くのが得意なウマ娘だ、コーチとして素晴らしい存在だ。」

「わかった……トレーナーを信じよう。」

「ククク、トウカイテイオー君、今から君の尊敬する人が私に蹂躪されるところをしっかりと見ておくといい。」

一時間後

完全敗北

「カイチヨー絶対勝つって信じてたよ！」

「バカな、敗北するとは……ルドルフは将棋に関しては何人かハズじゃ。」

「君と別れてから始めたんだ、最初は弱かったけど大会に出て優勝したこともあるんだ。」

ガチ勢かよ！そら勝てるわけないな。

「フツ、すきな命令をするといい。」

どうせルドルフのことだから、生徒会のお手伝いとかそんな感じだろう。

「このあと、一緒に遊んで欲しいんだ。」

そっち系か、珍しいな。いや

「ハハーン、さてはデートのお誘いだな、全くいつまで経ってもトレーナー離れができないんだから♡今日は一緒にいて、アゲル♡」

「……！トレーナー本当に大丈夫か！牛乳コーラの飲みすぎで頭がおかしくなったのか！？」

「…………ハッ！俺は一体何を言っていたんだ。」

「君がそんなふうになったのを見たのは初めてだよ。」

「体調が悪いのなら他の日でも構わないが……?」

「いや大丈夫だ、オグリとテイオーも来るか?」

「私もトレーナーが心配だから一緒に行こう。」

「僕もカイチョーと遊びたいから一緒に行くよ!」

「ルドルフもそれで構わないな?」

「もちろんいいとも、今日は楽しい日にしよう。」

ルドルフの考え

本当は正木君とふたりきりでデートに行く予定だったが、ここはオグリキャップに対する牽制として見せつけようテイオーはまだ恋を知らない、敵ですらない、ここで彼と仲良くなることで私の元に帰りたくなってもらうのが私の作戦の一つだ。もう一つは有馬記念でオグリを倒し目標を達成させずコンビを解消させ私と再び組んでもらう作戦だ、こちらは出来れば行いたくない、少なくとも2年間はしたくない。このデートこれでは特別感がないどうすればいいものか、

ハッ! そうかこうすればよかつたんだ。

「トレーナー! すまないが私は一旦寮に戻って着替えてくるから車を回して待っていて

ほしい。」

そう言つてルドルフが猛スピードで寮にいった。

「オグリとテイオーも着替えてきてくれ。俺は車を用意してくる。」

「トレーナー、気をつけて安全運転を頼んだぞ。」

オグリとテイオーはそう言つて寮に向かった。

ゲームセンター

「トレーナーとカイチョー、メガネがお揃いでとても似合つてるよ！」

そういえば羽〇さんメガネをつけたままだった。

「このメガネは強者や皇帝にふさわしいメガネなんだ」

「何度も敗北している、俺にはもうつける資格はない。」

そう言つてメガネに手をかけたがルドルフが止めた。

「トレーナー、今日は勝者の命令に従つて貰うよ、一日中メガネをつけていてくれ。」

「トレーナー、やっぱりメガネは似合つてるようだ。みんな外せなんて言わないしな。」

負けまくつてるのに今日はいろんな人が優しい。

「そんなことより、今日は…」

キタちゃん「お小遣い全部使ったけど、一つも取れなかったね……」
ダイヤちゃん「クレーンゲーム難しいね……」

「目的変更だ、クレーンゲームでテイオーとマックイーンの新しいぬいぐるみを取るぞ。」

「もちろんいいとも、私達の後輩になる子たちだ、助けておいて損はないはずさ。」
帰る前に早速話しかける。

「やあ、キタちゃん、ダイヤちゃんお兄さんが二人のぬいぐるみを取ってあげよう。」

キタちゃん「あのく失礼ですがどちら様ですか？」

ダイヤちゃん「キタちゃん、この人悪い人かもしれない。」

「テイオー出番だ。」

「この人は悪い人じゃないよ」

そんなふうにテイオーに説明してもらっている間にクレーンゲームに向かう。

「しかし、トレセン学園もえげつない商売するよな。」

クレーンゲームでしか取れない人形を置くことでこのように回収する。苦手な人はほんとに取れんからな」

「関係者に聞かれたらとても怒られるよ。」

そんなことを言いつつ500円を投入する、このゲームセンターはクレーンゲームを

5000円で6回遊べる、この6回で取ればすぐくカッコいい。

「ルドルフは横に立って縦軸を見てくれ、オグリは俺とタイミングを測ってくれ。」

正直いって、縦軸を見てくれたらなんとかなるがオグリ of の機嫌が悪くなる可能性もあるから、オグリにも手伝ってもらおう。

トウルルルートウルルトウルル

よく見たら久しぶりに見たな、このSEGのUFキャッチャー、しかもソックのやつだ。

「トレーナー、今だ。」

「OK、わかった」

「トレーナー40cm先の場所がいい位置だ。」

「ヨシ！バッチリ2つとも取れたな。」

「…想定外に5ゲーム余ったな、ふたりとももう大丈夫だから、人形を持って行ってあげてくれ。」

二人に任せて、もつと取れるか試してみよう。しかしよくバッチリ取れたな、ここまでする簡単なのは新しく開いたときのショッピングモールのゲーセン以来だ。

そんなこんなで子どもたちにもあげた分をぬいて、6個も手に入った。袋があるからそれに入れて戻ろう。

「トレーナー……すごい量を取ったな。」

「いや、それがまだまだらしい、最高記録が3回で15個らしいからな。デートだからこれはルドルフにプレゼントしておこう。」

「トレーナー君本当にいいんだね。生徒会室に飾っておくでしょう。」

ナリタブライアンがこの前そんなことをしたらしいが生徒会室が人形まみれにならないことを祈ろう。

「代わりに、俺が最もゲームセンターで得意なゲームで勝負してほしい。」

「フフ、皇帝は勝負を逃げるわけにはいけないからね、相手になろう。」

「オグリとテイオーも俺と戦ってもらおうぞ。」

「トレーナー麻雀なら私は打てないぞ。」

「安心しろ、四人プレイできるゲームで一番楽しみやすいやつだ。」

「今なら、店員さんが300円で作るカードを無料で作ってくれるらしいから、作りに行こう。」

準備は万端だ、さてここでアーケードゲームの仕組みを紹介しよう。今回遊ぶのは私の口から言うのはがっかりする人もいるかもしれないが、マリ○カートアーケードグランプリDXだ、私はこのゲームを2005年の初代版から遊んでいる。その時は小学生だった、DXへのデータ移行が出来なかったが、完全新作だから仕方ない。このゲームはアーケードゲームでありレースゲームだ、

つまり、マシンスペックの差が存在する、僅かな差だが私が負けるとおりはない、そして私は、すべてのアイテムを集めカートもコンプリート済みだ。このゲームであれば経験も多い、何度も言おう負けるとおりがない。勝利することで、水泳では勝てないテイオーを倒し、オグリから尊敬されるのが狙いだ。

私のマシンのカスタムは

パイロット ヨツシー 加速型

マシンウルトラボイジャー 最高速と加速を強化海空◎

アイテム ヘビーキノコ トリプルゴールドバナナ ファイアーボール

バランス型かつどんな局面でも戦える構成だ。

シンボリドルフ

パイロット ロゼッタ 最高速型

マシンギャラクシーコメット 最高速とハンドリング強化

アイテム 不明

バカな、レアマシンを持っているだと、それなりに遊んだことがあるようだな
オグリキャップ

パイロット キノピオ ハンドリング型

マシン マッシュラン 加速を強化

アイテム 不明

キノピオに合わせた構成だな。相手にはならない筈だ、初心者だから、動かしやすさ
でハンドリング型のようにだ

トウカイテイオー

パイロット どんちゃん ハンドリング型

マシン ドンドコドライブ 加速を強化

アイテム 不明

やはりルドルフが敵になるだろう、だがテイオーは何でもこなすタイプの人間だ、俺
の妨害をしまくれば勝てると気づけばかなりまずくなる。

さてレース開始の準備が整った、走る前にこれを伝えて始めよう。

「負けた奴は、最後の牛乳コーラを飲んでもらうぞ！」

3人「えっ!？」

3 2 1 スタート

まずはスキをつけてロケットスタートを決めながらスタート。このことは画面にてくるが意識しないとできない、序盤の攻防は私が制した。今回のコースはピーチキヤツスル目を瞑っていても走れるコースだ。

コーナーに入る前にドリフトを入れる、これがアーケードのマリオカー○の最も重要な要素、加速方法が全く無いこのゲームにおいて、ドリフトターボは自発的な唯一の加速方法と言える。そしてアイテムボックスに触れる

ルドルフはドリフトを使っているため、やはり経験者だ

出てきたアイテムはファイアーボール丁度いいアイテムだ、このゲームの洗礼を受けてもらう。

うしろからオグリ、テイオー、ルドルフと続いている、大方の予想通りだ、だがルドルフもアイテムボックスに触れる前、このタイミングでファイアーボールを後ろに投げ

る!
「なに!？」

「驚いただろう! アイテムボックスは透明度はそこまで高くない! それに被せる形で最

適な位置、そう！走っているラインに目掛けて投げれば直撃する！」

「そしてファイアーボールは前と後ろ両方に投げられ壁に当たると反射して飛んでいくアイテム！相手のカートがどの位置につくか、どの角度で撃てばどう反射するかそれが完璧に合わさることで前後を完璧に射撃できる究極のアイテムとなる！」

最も恐ろしい攻撃アイテムトゲコウラは初心者でも使えるため、飛んでくる可能性があるが、コインでの加速ではないため、マシンスペックにより一気に抜き返せる！

問題はない！

「フハハハハハハッ！キタちゃんダイヤちゃん君たちはそこで尊敬する人々が圧倒的な速度で蹂躪されるのを見てるといい！」

「トレーナー、やっぱりテンションがおかしいぞ。」

オグリはファイアーボールを受けたルドルフを抜いてドリフトの差でテイオーを抜いてきていた。オグリのアイテムはPOWブロック この距離では届かない。

順番は代わって上からオグリ、テイオー、ルドルフ 再びコーナーに差し掛かる。今度はドリフトレベルを教えよう、ドリフトはコーナーをどれだけドリフト待機状態で走るかでターボの長さが変わる。レベルで表記される、そして私は当然毎回最高のレベル

3のドリフトだ

当然アイテムが決まらなければ抜けない！

更に私の攻撃は炸裂する！完全有利の状況だ！負けるはずがない！

そして2つ目のアイテムボックスに到達する、オグリはアイテムを無駄撃ちするしかない、テイオーのアイテムはボム兵のようだ、ルドルフには当てない、これも無駄撃ちだ、

ルドルフのアイテムは不明だ、だが問題ない。

アイテムボックスに触れる、アイテムは……なるほどルドルフのアイテムはテレサだったようだ、一位の相手のアイテムを奪い透明化する、強力なアイテムだ、取られたアイテムは一瞬しか見えなかったが、ヘビーキノコ、このゲームの加速アイテムであり強化アイテムだ、スピードアップと高速ドリフトが可能になる。

順位が入れ替わったルドルフ、オグリ、テイオーの順番だ。オグリの2つ目のアイテムは巨大キノコだがヘビーキノコの加速には勝てない。テイオーのアイテムはアカコウラためているようだ、

ルドルフが透明化状態だが、私に近づいて来たのがわかる、ヘビーキノコのもう一つの効果、重くなることでカートにダメージを与えることができるそれを狙っているのだろう、これを避けることはできない。直撃する、

カートがスピンしてスピードが落ち一旦停止する、

その間に更に巨大化した、オグリが私を轢いていく、それが終わったあと、テイオーのアカコウラをくらう、

踏んだり蹴ったり、泣きっ面に蜂だ。

順位は代わり一氣に最下位になった、

だがまだ、第一周逆転はこのゲームの醍醐味だ、そしてこの状況はいい展開ともいえる、ルドルフのアイテムテレサは後ろにすることで効果を発揮する。

私のアイテムはバランス型だが実際の使い方はすべて攻撃と妨害特化即ち後ろが最も強力な位置だ。

楽しみにしていてくれ。

長いのでダイジェスト

ドリフト中のスキについてテイオーにファイアーボールをぶつけ、ぬきさる、

オグリにはドリフトでぬいたあとにゴールドバナナを当てて、一氣に速度を落とさせる。

最後のルドルフはコーナーでヘビーキノコを使用し、コーナーを制し一位をもぎ取った。

順位は私、ルドルフ、テイオー、オグリ順番だ。

「トレーナー…その本当に飲まないといけないのか？」

やばくないか、オグリの体調が悪くなったら安田記念に勝てなくなってしまう。え、どうしよう。

「ええい！ままよ！」

私は牛乳コーラをがぶ飲みした、

「トレーナー！大丈夫か!？」

「トレーナー君、さっきの気分悪そうな様子はそれを飲んでなったんだろう、大丈夫なのか。」

「トレーナー！どうして飲んだの!？」

「…いやなんとなくわかるだろう、あと俺は君のトレーナーではないからね。」

「取り敢えず口直して横にあるスーパードジュースでも買いに行こう。」

キタちゃんがかっかりしている。

スーパード

お嬢様のウマ娘「チョコが一番ですわ！ワツフルといえばこれですわ！種類いっぱい

ありますけどもこれだけあれば勝ちですわ！」

「マックイーン！こんなところで何してるの？」

「テイオー!? こっこれは、見なかったことにしてください！」

見てはいけないものをみたがダイヤちゃんの為にもマックイーンも連れて行こう。

そして再びレースを行った。今回は罰ゲームの代わりにオグリがシートを離れて、マックイーンが入った。

レースの結果

一位から順位、私、テイオー、マックイーン、ルドルフの順番だ、

「トレーナー今度は、私が飲まないといけないな。」

と言いつつ、私の手元から牛乳コーラを取ろうとする、こんなもんウマ娘に飲ましてはいけない！

私が一気にのんだ。

ルドルフの心のこえ

間接キスは無理なようだ。

キタちゃんが悔しがっている、テイオーがマックイーンに負けたのが悔しいようだ。オグリは私を少し尊敬した目つきで見つめてくる。

ルドルフに頼む、服を買ってきてくれと、お金を渡すとルドルフはすべてを察した。私はトイレに向かった、多目的トイレだ、

私の今の服装はカッターシャツに、スラックス、トイレに口から吐き出した。気分が悪い状態でレースゲームしかもカメラがぐるぐるする、吐き出すに決まっている。

しかも2回もだ！

『気分が悪くなったらすぐゲームを中止しましょう』

「めちやくちや気分悪い、気持ち悪い、」

ノックが入る、どうやらルドルフが服を買ってきてくれたようだ。

元の服を袋に入れてリュックに入れる、匂いが出ないようにだ、ルドルフの着替えは、ラフなズボンと文字のTシャツ、文字は……会長は今日も快調だ……

やりやがったなルドルフ！

いや、確かにこの前褒めたけどさ、俺も似たようなの持つてるけどさ、人前で着るも

のじゃないだろう！

着替えて出る。

「ルドルフ、これって……」

ルドルフが上着の内側の肌着を見せてくれた、

………会長は今日も快調だ………

ペアルックかよ！ 何だこのクソダサペアルックは何なんだ！

それからのことは短くまとめようと思う、テイオー達に何故着替えたのか、その服は何なのかと聞かれたがカッターシャツは動きづらいので買ってきたと伝えた、流石に自分で自分の首を締めたとは恥ずかしくて言えない。それにより、かわりに私のセンスが犠牲になった。

あと、オグリは安田記念に勝利した、レースゲームでの私の動きを見てコーナーでの攻め方や溜め方のコツを掴んだようだ。休憩とこれを狙っていたので、バツチリだタイキシャトルは強敵だった、次はマイルチャンピオンシップで戦うだろう、だが、その前に夏合宿だ。

そして、その後、現れた、謎の最強レーサーマルゼンセンパイについてはまたどこかで語るとしよう。

??? 「今の走りはチョベリグよ！」

次回！ 電脳レーシンググウマ娘対戦 第15話

「私は赤いスーパークー！」

来週も私の走りを見てくれ！

芦毛とマツドな合宿

オグリたちとゲームで勝負をしてから二週間ほど経った

ルドルフがオグリと一緒にトレーニングをしてくれるようになった。どうやら○リオカートで負けたことで、

一応負けたので言うことを聞いてオグリとともにトレーニングをしてきている。「やっぱり、誰かとトレーニングをしたほうがいいようだな。」

周りに頑張っている人がいると、自分も頑張ろうと思ひ、トレーニングをする。しかもワーカーホリックなルドルフだ、めちやくちや励む。

勉強の時とかは、『一応補修をすることにならないように』教えてもらっているが、オグリ「会長……ここはどうすればいいんだ？」

ルドルフ「この問題はこう解けば簡単になる。」

こんなふうの問題の解き方からしつかり教えてくれるので、オグリの成績はかなり良くなった。

こんなふうを考えるのは良くないが成績がいいということは、頭が賢くなったと考え、そして賢いということは様々な作戦を考え、実行したり、相手の策にハマらないよ

うになるということだ、他にもレースの位置取りとかがよくなったり色々あると思うが、頭を鍛えるのは悪いことではない、そういった部分は中等部2年のセイウンスカイが高いと思う。彼女が本気で走る姿を見た覚えがない、走る姿も見せないし、彼女は策士タイプだろう。だが様々なところで言われている、黄金世代に彼女は数えられている、彼女は私から見ると才能のある天才型だが、オグリ程わかりやすいタイプではない。恐らく何事も無ければ台風の目は彼女になるだろう。

ここまでながながと語ったが、伝えたいことは一つ賢さは大切だ。特に長距離のレースでは賢さが重要だ。フルマラソンの選手でも良いタイムと悪いタイムでは、かなり変わってくる、賢さはその平均を上げる能力といえる

今日はオグリとルドルフがトレーニングをしている間に

同期のトレーナーから面白い話があると言われたので、話を聞きに行こう。

「さあうちとやろやあ」

「一緒に頑張らしましょうね。」

あの様子だとタマモクロスとスーパークreekも一緒にトレーニングをしているようだ、スーパークreekはビート板勢だが、タマモクロスはどうなんだろう？

まあ、あの様子だと問題なさそうだし、同期のところに向かおう。

学園内のトレーナー室

「乃河くん、久しぶりだが来週の合宿を控えた時期に呼び出すとは余程面白いことなんだろう、君の担当の実験台になれというのなら、ルドルフに通報して学園の平和の為に罰を受けてもらうがそうじゃないだろう。」

あまり会わないと思うので、いらなと思うが乃河悠一

私の同期だ、担当しているウマ娘はアグネスタキオン、トレセン学園のトレーナーで一番のイケメンだ。

同時にかんりのひょうきん者でもあり、頭が割とイカれていて、タキオンの担当になつたのもウマ娘の限界を超えた姿を見たいという好奇心と楽しそうというアグネスタキオン相手に持つてはいけない恐ろしい感情を持つている、ブレーキは壊れている。

乃河くん「いえ、正木さん今日はこの写真を見てもらいたくて、来てもらいました。」
そう言つて写真を見せてもらった。

「……………発育良すぎないか？」

子供に見えるが何がとは言わないがすごく大きい

「あと、このアングルはどう見ても盗撮したものには見えませんが、」

盗撮イケメン「彼女の名前はダイワスカーレット小学6年生です。」

「この子ランドセル背負ってんの!? オイオイこんな写真持ってたら都条例で捕まるぞ。しかもロリのこんな写真ポルノ認定されてマジで捕まるぞ。」動揺している

乃河容疑者「ただの写真なんですが…この写真を見ればわかると思いますが彼女はウマ娘です。素行も良くて身体能力もウマ娘とはいえ小学生とは思えないほどあると言われてます。」

「ダイヤの原石という訳だな。俺は昔、確かに優秀そうな子がいたら教えてくれと言っていたが、小学生を出してくるとはな。」

「とはいえ、今の俺にはオグリがいるからな、二人以上の育成はするつもりはないから大丈夫なんだが……」

乃河くん「いえ、彼女は私が育てたいと思っています。どことなくタキオンに近い気配を感じますし、」

「じゃあ、なんで見せてきたんだ?」

モルモット「それは貴方にこれを飲んでもらう為です。タキオン今です。来てください。」

完全に油断していた! 背後を見るとアグネスタキオンがいた。俺の両腕を上挙げて

て捕まえている。

「これは一体何のマネだ……」

アグネスタキオン「安心してくれたまえ、これは人体にウマソウルを定着そして強化させる薬だ、成功すれば君は超人になれる。」

「それは恐らく、人間にしか使えない筈だろう。君の研究が目指していた物とかなり違うはずだ。」

「ウマソウルの強化その部分を調べるために君にも飲んでもらおうというわけだ。私が飲んでも何も起こらないんでね。」

ウマソウルってなんだ!? 勢いで受け入れていたが何だそれ。ニンジャソウルの親戚か!?

「ということで助手くん、モルモットに早く飲ませるんだ。」

モルモット「ハイわかりました。タキオン」ゴクゴク

「乃河くん!?!?!?!?!」

「助手くん!?!?!?!?!」

乃河くん?!!「モルモットが飲みました。これでいいでしょう。」

「助手くん話が違うじゃないか! 木原くんはとても頑丈で今回の薬の被検体にうってつけどと君が言ったんじゃないか!」

乃河くん「タキオンこういう物はまず私をモルモットにして実験しようと思は言いました。だから危険だからといって木原さんを犠牲にするのはよくありません。」

「それはそのとおりだが……」

何が起ころるかまだわからないんだ。それをわかっているのかい。」

そんなもん飲まそうとしたのか。

「私はそれが原因で何か起こったときに対処できるように研究しておくから、後で報告するように！」

……

「取り敢えずお礼を言っておこう。助かったよ」

「いえ、これは我々の問題です。タキオンがどうしても私に飲ませようとしなないのですから、ご迷惑をお掛けしていませんでした。」

「しかし本当に大丈夫なのか、体調が悪くなったりしているようには感じないがタキオンの薬だ何が起ころかわからない。」

「いえ、むしろ元気になったくらいです。あなたも一杯どうですか？」

「ハハハ！俺は元気いっぱいだから大丈夫だよ。ところで生徒会室に行きたいようだね。」

「ハハハ、冗談ですよ。それでは私は合宿の準備に入りますから失礼します。」ダツ
「まちやがれ！逃さんぞ！」シユタツ

その日は一日中元気になった乃河くんを追いかけまわした。結局捕まえられなかった。なので今回は見逃した。

夏合宿スタート

今日から夏合宿が始まる。実力向上の為の強化トレーニングが始まる。

「ここが合宿所……。」

トレーナー、聞きたいことがあるんだが。」

「なんだ？」

「この合宿所に……バイクングはあるのだろうか？」

「……合宿だつてこと忘れてないよな？」

「いや、忘れていない。」

「この合宿が、とても大事なことも。」

「すべてのレースで勝つために、」

しっかり鍛えていくつもりだ。」

「大丈夫だ。私は頑張る。」

……ただ食事も大事だと思っただ。」

——オグリキャップとの

熱い夏合宿がスタートした！

………そういうことにしてくれ

芦毛と未確認生物

タキオン「木原くんこのコーラをあげよう。」

「ありがとう、早速いただこう。」

色も同じだが僅かに味が違う。フタを閉めてぶん投げた！

「貴様何を飲ませた！」

「色も味も完璧におなじようにしたつもりだが君には効かないようだね。あと君そんなキヤラではないだろう」

「それはうちのモルモット君が飲んだ物をパワーアップさせ効果が早く出るようにしたものだ。」

「あれからモルモット君はとても元気になってね。」

「実験は成功してモルモット君の身体能力も強化され100mを9秒30で走るレベルになった。」

「今の男子世界記録更新してんじゃねーか、どう考えてもドーピングだがその記録はおかしい。」

「タキオン乃河くんは結構鍛えてある人間だが100mは12秒台のはずだ、いろんな

ことを放って聞くが、そのレベルにいきなり強化されれば体に異常がある筈だが大丈夫なのか、筋肉痛とか」

「無論一週間の経過観察でバツチリ確認しておいた。私達ウマ娘には効果はないが普通の人間が飲むと体力が格段に強化される魔法の薬だ。」

「それを海に投げるとはもったいないことをしたね。その薬をどれほどの人が欲しがるものか。」

「だが、君の研究には必要ないものだろう。」

「そのとおりだ、二号くん私の研究の目的はウマ娘の限界に挑戦することであり、永続的な強化だ、成功しているがウマ娘に使えないのならば意味はない。」

誰が二号だ、人を勝手にパワーアップさせようとするんじゃない。しかし焦ってぶん投げてしまったが、海に流れたあれが環境に悪影響を与えないことを祈ろう。

オグリがタマモクロスやスーパーパークリークと一緒に海の家に行ってる間を狙つてくるとはなんて狡猾なウマ娘だ、仕方ない口直しに本物のコーラを飲もう。

友達と一緒に過ごす時間は大切だろうから席を外した

俺も海の家に行ってコーラを買おう。

海の家

オグリが海の家で行われている大食い大会に参加している。タマモクロスとスーパークリークはオグリの応援をしている。

「一時間半の長めの食事休憩にしておいたが、まさかその一時間で大食い大会に参加するとは思ってなかったよ」

「木原さん遅過ぎるで！もうすぐオグリの優勝が決まるところやー！」

「オグリちゃんあつという間に完食するから作る方も間に合っていないようで、本当に圧勝してますよー」

オグリが勝つのはわかっているがどれだけ食べているかが重要だ。見てみよう。食べているのは焼きそば、海の家で食べると美味しいものランキングで毎回入る素晴らしいものだ、夏祭りのランキングにも入る。

皿は10皿で重ねられているものが、30個 300皿かあ、
わんこそばかな？

そんなこんなで終了まで観戦した。

オグリキャップの優勝コメント

「美味しい焼きそばだ、次回も参加したい。」

司会のお兄さんのコメント

「オグリキャップさんはなんとこれまでの最高記録の108皿を大幅更新の3倍以上の352皿を食べましたので、これはもう3回優勝したのと一緒ですので殿堂入りとなります。これからは海の家大食いグランプリをよろしくおねがいます。」

オグリは大会出禁になったようだ。

「トレーナー見ていてくれたか？」

「バッチリみたが、すごいお腹が膨らんでいるが、大丈夫か？」

今まで食べてたおにぎり50個もまだ本気になっていなかったって訳だな。正直背筋がゾツとしてるよ、心を殺して作ったおにぎりでもまだお腹いっぱいになってなかったみたいで、

「トレーナー大丈夫だ、このあとのトレーニングにも支障はない。」

ボテ腹をさらけ出した状態でそんなことを言っている。

「……取り敢えず明日は腹筋しまくろうな。」

「トレーナー…少し食べすぎたようだ。すまない」

「安心しろ、俺はいつぱい食べるオグリが好きでトレーナーをしているわけでもあるかな。好きなだけ食べるといい」

今日のトレーニングはビーチを走るトレーニングだ、

ビーチで走るとバランス感覚がよくなり減少する体力も増えるため、スタミナの増強も見込める、おまけに足腰の負担も減らすことができる。最高のトレーニングだ。

ちなみに本当かはわからないが頭の回転も速くなるらしいぞ。

皆も近くのビーチでLet's run

走ってみたら体がだいぶ軽く感じる。いつもは自転車で並走しているんだが走ってオグリとルドルフに追いつくことができる。

タキオンの薬ヤバすぎないか、ゆっくり走っているウマ娘に追いつくことができるってかなり強化されてるのがわかるな。

練習終了後

「トレーナーこれを見てくれ。」

コーラだ、2Lが6本もある

「これはいい」

「大食い大会の景品がこれだったんだ、いつもお世話になってるから、受け取って欲しい。」

お礼のことばを伝えたあとオグリを合宿所におくつてトレセン学園のトレーナー室に戻った。合宿中はここで住むことにしている。そのためベットもおいてある。

コーラを飲みながらJAWOを観て寝よう。

次の日、私の体力は元に戻っていた。タキオンの葉は効果が強化された代わりに一日で切れてしまったようだ、毎日超人は流石に疲れるのでこれでいい、さーてオグリの様子でも見に行くか。

ガチャリ

ドアを開けて部屋を出ると外に茶色くて速そうで美しい生物がいた。

ガチャリ

ドアを閉めた。うん、見て見ぬ振りをしよう

「いやー、幻を見るとはタキオンの薬の副作用だな、念には念を入れて窓から出よう。」
謎の生物「木原さん、開けてくれませんか。」

「ムッ、その声はわが友、乃河子ではないか？」

乃河子「いかにも自分は、トレセンの乃河である。」

「外にUMAがいるからあとにしてくれないか。」

乃河くん「もう気づいていると思いますがそのUMAが私です。」

「……………乃河くん、タキオンの薬で人間をやめたのは何回目だい、」

乃河くん「いえ、それが初めてなんですよ。発光したり、すごい身体能力で動きまくったこともあるんですがこの美しい生物に変身したのは初めてです。」

「その割には落ち着いてるね。ところでそれってこの前の薬の副作用？」

乃河くん「そうだと思いますよ。日に日に身体能力が強化されて飲んでから8日目の今日いきなりこの姿になりました。」

「俺もタキオンから同じやつ強化された物を飲まされたんだけど。」

乃河「明日から僕と同じUMA友ですね。」

ドアを開けて乃河くんにドロップキックをくらわした。

反撃で後ろ足で蹴られた。内臓が破裂するかと思った。

乃河くんと取っ組み合いをしているとルドルフとオグリがやってきた。

「……!? トレーナー初めて見るがその生物は?」

「同期の乃河くん、ほらあのイケメンの、タキオンの薬で謎の生物、取り敢えずUMAと呼んでいるがそれになってしまった。」

「どうも木原さんの同期で友達の乃河です。オグリさんに会うのは初めてですがルドルフさんは何度かお会いしたことがありますね。」

ルドルフ「なるほど、アグネスタキオンの薬の作用か、彼女はやはり要注意人物だな。」
ルドルフはすごく冷静だ。オグリはよくわからないって考えているだろう。今なら? マークが見える気がする。

オグリ「トレーナー、合宿所の海でサメが出たんだ。」

「ああ、それは大変だな! トレーナーや理事長たづなさんライフガードに報告して警察や猟友会を呼ぶのが決まりだが、それはしつかりしたか、」

ていうか、今俺に報告しているのがそのことか、

「待っていてくれ、今すぐ警察と猫友会を呼ぶ。」

「それだけでは無理なようだから、私達についてきてくれないか。」

そう言われたので、急いで行くために乃河くんに乗せて貰ってビーチに向かった。



「……………ルドルフ、サメって実は魚類なんだ。イルカに似ているから哺乳類だと思う人がたくさんいるらしい。だから陸上にはあがらないはずなんだ。」

「トレーナー残念ながらこれは現実だ、約10mのサメが陸で活動している。」

サメが這いずり回るように動いているサーフボードを巻き込んで引きずっているようだ、元は確か9cmほどの厚さだったサーフボードがヤスリに削られたようにえぐられハーピーターンぐらいの厚さになっている。

「立ち入り禁止にしているようだな、合宿所で色々な人を呼んで作戦会議をするぞ。」

皇帝と地獄の鬼(ごっこ)

「理事長が海外出張により不在ということで今回は私が取り仕切る、まあ、ほとんどのトレーナーは避難して残ったのがここ以外合宿場所が取れない、新人トレーナーだらけで私が最年長だからリーダーになるしかないだけだな」

「なお今回の会議には第一発見者のオグリキャップと生徒会長のシンボリルドルフが出席するが構わないな。」

桐生院「あの〜」

「なんでしよう桐生院くん」

「先輩少しキャラが変わりましたね、この問題警察に通報すれば解決するんじゃないですか?」

「昨日の金曜ロー〇ショーって何か知ってる? J A O S だからな、通報したときイタズラだと思われて相手にされなかった。」

「第一10mのサメなんてなんとかするのは警察でも無理だろう。」

「オマケに陸にあがって動き回る。全力疾走すれば人間でも逃げられる速度だからいいがこれはかなりまずい」

「デモゴルゴンって怪物がいるが人間の全力疾走より少し遅い速度で追いかけてくる奴がいるがあれのヤバさは折り紙付き、なんせパニックに陥った人間よりは速いからな。」
「怪物がいるがアレだから気分的にはB級映画の世界に迷い込んだみたいだ。」

ルドルフ「トレーナー君、乃河トレーナーについては説明しなくていいのか？」

「俺は慣れたが説明が必要だな、俺の同期のアグネスタキオンのトレーナーの乃河悠一くん、元の姿はイケメンだが今は謎の未確認生物UMAになってる。」

乃河くん「どうもアグネスタキオンのトレーナーの乃河悠一です、タキオンの薬で発光したことがありますがこの姿になったのは初めてです。」

「ツツコミどころは沢山あると思うが第一発見者のオグリに話を聞こう。」

オグリ「…あのサメ？は海で腹筋や腕立て伏せやマラソンとかで全身のトレーニングをしていた時に見つけたんだ。」

「私はトレーナーが不安になっっているから多めに腹筋をする為に速めに自主トレーニングをしていたんだ。そうしていたら海にとても大きな影が見えて近づいてみたらあのサメだったんだ。海からあがって追いかけてきた」

「その後は急いで逃げてルドルフと合流してトレーナーのところに行った。」

「さて、この話を聞いてどうにかできると思った人は手を挙げてくれ。」

「ハイッ！と言って葵ちゃんが勢いよく手を挙げた。」

「こういうときの為のマニュアルはありませんか？」

「あるけど役に立たんわ！マヌケ！先祖代々鋼の意志を継いでるだけはあるわ！」

サメが出たときは備え付けられてる水中銃で誰かに退治してもらおうことになってるが10mのデカブツにあんな棒が効くか、心臓に届くのも難しいはずだ。オマケにアレの皮膚はレジンなどの素材を容易く削ることができる。ぶつかるだけで大怪我の可能性もある。更に水中だけなら危険性は減るが残念ながら奴は水陸両用だ、陸で追い詰めることができてても海に逃げられる、そうなる人間に恐れを持つようになって襲わなくなるか、人間に憎しみを持って人を優先的に襲うようになる怪物が誕生するかのどっちかだ。」

葵ちゃんがショックを受けている。

「ながながと言ったが言いたいことはやつの対処方法は今の所どこにもない。ただし我々で考えないといけない。」

鏡祥太郎「木原さん、言われたとおりサメの偵察をしてきました、大きさは正確には16m程で人間をわざわざ襲うような性格ではないようです。近くにある動くものに襲いかかるようです。発見時刻から一時間後ぐらいに海に戻りました。」

「いいニュースと悪いニュースをありがとう、聞いたと思うがジョーズの2倍ぐらいの大きさらしい。ジョーズではない、海に戻るということは長く居られないのか陸にいる必要がないのに気づいたかのどっちかだがまたあがつてくる可能性はあるだろう。近くにある動く物体に襲いかかる、

ジョージ〇のノトリアスBIGかな」

「トレーナー君今日はキレッキレだな。」

「フハハハ！今の時代にこんなクソみたいなB級サメ映画みたいなことが起きるとこうなるよ。しかもデカさがジョージ〇の2倍の大きさというのが安直すぎる。タイトルはビッグシャークだな。」

「ここからはルドルフの視点でお送りします。」

正木君が大爆笑しているようだ、よほど頭にキテるらしい、今度サメのジョークを作ろう。

今は事件の解決だ、せっかくのトレーナー君との久しぶりの夏合宿だ、あんな怪物に台無しにされては困る。

ルドルフ「トレーナー君あのサメの対処方法は思いついたかい？」

木原正木「思い付いたがあこのサメの鼻つ柱に蹴りを叩きこむのは考えたが無駄だろう、顔面に近づくのも危険だし、人間の蹴りが聞くような大ききじやないだろう。」

「第一銃があつてもあの大ききさだ、倒すのは難しいし時間がかかる凶暴化して暴れまわる可能性もある。」

「トレーナー君、サメが現れた理由は何だと思う」

「古代の巨大ザメ、メガロドンが現代に復活したつて言われても納得できるサイズと形状だ、ただし昔のサメが陸を動き回れたかは謎だ。」

「冗談はさておいて、陸で活動するサメなんていないからな、人の手が加えられているのは確かだ。何度もうがアホな映画の博士以外あんなバケモノを作るやつはいない。」

トレーナー君も私と同じように人工的に造られた生き物と考えているようだ。

「トレーナー君、乃河トレーナーの変化とあのサメは同時期に発生した。この2つは関連があるように思う。」

「その場合容疑者はアグネスタキオンになるな、早速話を聞きに行こう。」

「桐生院さんに鏡さんもアグネスタキオンに話を今のうちに聞きに行くということ構わないかい。」

鏡さんも桐生院さんも私達についてきてくれるようだ。

アグネスタキオンの合宿部屋に向かった。途中でテイオーに出会った。

「カイチョー！ボクも一緒に手伝うよ！」

「テイオー、とても危険なんだ。君は連れていけない。」

「それなら尚更手伝うよ！ボク、カイチョーの役に立ちたいんだ！」

「ルドルフここは俺に任せてくれ。」

トレーナーは頼りになるな

「テイオー今回の作戦はチームを分けて行動している。エアグルーヴやナリタブライアンは逃げ遅れた生徒の避難誘導や巨大ザメの情報収集をもらっている。」

「テイオー君にはそちらに回ってもらいたい。そしてオグリを連れて一緒に避難してお願い。」

「!?そうか……トレーナーは私をおいていくのか……」

「オグリ今回のような問題は本当はトレーナーや生徒会だけで解決すべき問題なんだ、テイオー、オグリは一人だと迷子になってしまう。一緒に連れて行ってほしい、頼む。」
「……トレーナーワカッタヨ、オグリ先輩は僕がしっかり安全なところに連れて行くからね。」

「その代わり今度はボクのトレーナーになってね！」

「ああ、オグリが最強になったらな。」

テイオーが『イツニナルカワカラナイヨ』と言っているが。一年半後には最強になつてもらふ予定なんだがな。

「ルドルフ、タキオンを探すぞ。」

「トレーナー君、何か取り返しのことになつてゐる気がするんだが。」

トレーナー君まさかオグリの次はテイオーのトレーナーになるつもりなのか！私のトレーナーに戻つて私と一緒に歩んでくれるはずじゃないのか…

「どうしたルドルフ？タキオンを探さないと解決は遠退くぞ」

「トレーナー君、君はオグリキャップを有馬記念に出走させるつもりかい。」

「ああ、いま話すことではないが年末の有馬記念に出させるつもりだ。スケジュールは建っているがオグリにはまだ伝えていない。目の前のレースに集中してもらいたいからな。有馬を気にして菊花賞を勝てなくなれば元も子もないからな。」

「私も出走しよう。」

トレーナー君はあまり驚いてないようだが、桐生院さんと鏡さんはとても驚いてい

る。

「今のオグリキャップの実力を測るためにも有馬記念で全力で勝負をする。」

これは敵対宣言と言えるだろう、それでもトレーナー君の表情は変わらない。君が育てたトウインクルシリーズ最強のウマ娘皇帝シンボルドルフの宣戦布告を受けてもトレーナーは微動だにしない。

少しだけ木原正木トレーナーの思考

ルドルフはトレセン学園に在籍している最強のウマ娘だその凄さは俺が彼女を育てた実績だけで、特別な資格を貰える程だ、彼女のG1勝利回数を伝えてなかったと思うが10冠だ、彼女の目標は7冠だったようだが出れるG1を片っ端から出続けて10冠だ、そりゃ記者もルドルフはつまらないって言うよ。

勝負服に付いてある勲章より多くのG1を勝利している。

彼女を育てたことで俺にはある願いができた。

ルドルフがトウインクルシリーズを席卷した時にこの最強の彼女をもうひとり最強のウマ娘を育てあげ倒したいと思った。

オグリの気持ちに任せるが恐らく遅かれ早かれ彼女たちは激突する定めだったんだろう。

オグリは強いウマ娘と競い合いたい、ルドルフはすべてのウマ娘が幸福な世界の為に強さを示さなければならない。

ルドルフとぶつかるのはもう一年先だと思っていたがタマモクロス、スーパークリーク、オグリにはライバルがいる。

だが彼女は今頂点に立ったことで生徒会の仲間たちもついてきてきているが、戦う相手としては孤独になってしまっている。彼女の玉座は私が破壊しなければならぬ。

そしてオグリに海外で惨敗したルドルフの代わりに、日本のウマ娘の強さを見せ付けること、それが俺のもう一つの夢だ。

ルドルフの視点

「トレーナー君(こ)がアグネスの部屋だ。」

トレーナー君が高速でノックをする、鍵は掛かっていない。勢いよく開ける。

「アグネスは何処だ!」

「ひいい、アグネスデジタルです」

「違うわ！やばい方のアグネスのタキオンだ！」

「二号くん少し静かにしてくれないかい、今キミにも使用した薬をウマ娘にも使えるように更に改良しているところだ。」

「そうかそうか、ところで今の乃河くんを見てもらいたい。」

「タキオン、姿が変わりましたが私です、美しくなりました。」

アグネスタキオンが絶句している、デジタルの方は目を輝かせているようだ、トレーナー君は話を進めるためにショックを与えたようだ。

「タキオン今外で巨大ザメが出現している、何か心当たりはあるかい？」

「……………私の薬では巨大化はしないはずだが……………」

「乃河トレーナーはこの姿になってから体重が500kg程になっている、身体能力は格段にあがったようだけどね。」

「私の薬で巨大化やその姿になったのなら二号くんにも効果が起きている筈だ。結果が早く出るように効果が十倍早く出るようにしたからね。」

トレーナー君を研究に使ったようだ、許せないが事件の解決後に処分しよう、

「俺の体力が上がったのも飲んだ当日だけだ。失敗作だったのか、他の要因があるかどれかだな。」

「二号くんその後食べた物や飲んだものはなんだい、それと何か特別な行動はしていない

「いかい？」

「特段変な行動はしていないが寝る前にコーラを飲んで遅めの食事を取っただけだ。合宿中は食事を作るのが面倒だからカップ麺を作った。」

「トレーナー君、カップ麺だらけでは栄養が偏るから私が食事を作ってあげよう。」

遊びに行く口実ができた。処分は軽くしよう

「そうか！モルモット君その姿では私の弁当が作れないじゃないか！」

「タキオンすみません、どうか美味しい料理の作り方を覚えてください。」

乃河トレーナーとアグネスタキオンが弁当の話が始めたので遮った。

「とにかく実験としてモルモット君にコーラを飲ませようその次はカップ麺だ。」

乃河トレーナーはとても食べづらそうだがコーラを飲んでいる。

「あとは少し時間が経つのを待っていてくれたまえ。」

2時間後

乃河トレーナーがヒトの姿に戻った。桐生院さんがとても驚いている。アグネスタキオンが安堵の表情をしている、トレーナーが急いで乃河トレーナーを移動させて服を用意した、元に戻ったら全裸になるのを危惧していたんだろう。

トレーナー君の携帯から音楽が流れるどうやら電話がかかってきたようだ。

トレーナー君が相づちをうって話を聞き出している。

「タキオンあのサメは君の薬が原因のようだ」

「どういうことだ、二号くん」

「鏡君から連絡があったが再び陸に上がった。今度は四本脚でさっきの乃河くんのようなUMAのような姿らしい。」

「君が原因だと確定した。残念だが一旦確保しなければならない」

トレーナー君がカツコよく決めている。

「私と思うにあのサメはキミが海にぶん投げた、薬品で変化したものだと思うんだが。」

「君があんなもの作らなればこうはならなかったんだぞ！」

「キミが海に放り投げなければここまで大事にならなかつたんだ！」

「トレーナー君今は問題解決が先だ。」

「解決方法はいたってシンプルサメの口の中にコーラを入れるだけだ、正直いって乃河君がコーラで戻ったのも訳わからんが解決するならそれは些細なことだ。実は俺最近コーラのステマを延々としているような気がするがもう気にしないぞ。」

トレーナー君がそう言つてコーラを用意すると言つて部屋をあとにした。

私達は作戦を用意してトレーナー君を待った。元に戻るのに2時間かかるのも考えて作戦を考えた。

トレーナー君が2Lのコーラを5本用意してやってきた

トレーナー君に作戦を説明した、私が一旦おとりとなつてサメの前で走り、誘導して、走つてサメが疲れたあとトレーナー君達にコーラを口の中に入れてもらう。

これが今回の作戦だトレーナー君は少し不安そうだが了承して、早速作戦を執行した。

ビーチ

まず私がサメの前に立って走る。

サメが私を追いかけてきた、第一段階は成功だ。

もう三十分以上走っているがサメが一向に疲れない。

このサメはどうやら足が生えて速くなり体力の消耗が少なくなったようだ。朝のときは簡単に逃げられたものが振り切れない。だがあと三十分は逃げれる筈だその前に体力を消耗させればいい。

あれから二十分ほど経った、ビーチでは普通に走るより多めに体力を消費するようだ、私の方が先に限界が来てしまったようだ。

私の体が砂浜に倒れ込む。

最後はトレーナーの側と決めていたがどうやらそれは無理なようだ、最後に見た顔は不安そうな顔だった、最後に見る顔はやはり笑顔が良かったのだろう。

私は後悔している、学園の問題を解決できずに夢を叶えることも出来ずに私が消えてしまうのがとても悔しい。

地平線からすごい速度で走る人影が見える。

私が一番見たい幻覚だ、最後に幸せな気持ちになれた。

私の体はサメに食べられるのだろう、両親にはこんなことになってしまったことを不甲斐ないと思っている。

サメの口の中は想像より暖かった。それにさつきまで嗅いでいた筈なのに懐かしい香りがする。

「ルドルフ今君が3年前にされたがっていた、お姫様抱っこをしている。」

「……トレーナー君どうしてここへ？」

信じられない、トレーナー君が私を助けに来てくれたようだ。

「お姫様抱っこは無反応か、ルドルフ一人で犠牲にするようなことをさせてすまない、エアグルーヴを呼んでいるから、安心して休んでくれ。」

「……トレーナー君、とても脚が速いんだね。」

「タキオンが作っていた薬を大急ぎで5本飲んだ、単純な薬で飲めば飲むほど体力が強化するようだ。」

「それと猛スピードで逃げてるから手荒になるかもしれないけど許してくれよ。」

そう言ってトレーナー君は私をエアグルーヴの方向に放り投げた。

私はエアグルーヴの側で安心して休んだ。

トレーナーの視点に戻ります

「ルドルフから引き継いで一時間以上走ってようやく疲労してきたようだな。」

サメの動きがようやくゆつくりになった。

コーラを口に放り投げようとしたとき、私の手がUMAの形になった。

「嘘だろ……」

ガブツと頭から逝かれた。

「……変な夢だったな。」

「一日頑張つて働く夢かつ、自分が死ぬ夢を見ると朝から元気がなくなるな」
しかし夢で良かった。あんな冗談みたいなことで死にたくないからな。
着替えて部屋を出よう。

UMAがいた。うん、これは『時計』だな。

「乃河君サメのことは覚えてるかい。」

「ええ、もちろん覚えてますよ。木原さんすっかり頭から食べられてましたから。」

「たづなさんから説明は受けていると思うが本来『時計』は一人3回までだ、俺はもう使い切っている。乃河君が使うしかないはずだ。」

「時計は自分のウマ娘に関わることにしか使えず、自動発動するようです。私の場合はタキオンがあのことで薬を作るのをやめることがトリガーになったようです。」

「ただ木原さんがあの時のことを覚えているのに驚きました。使用者しか覚えていない筈です。」

「俺はすっかり夢を覚えておくタイプだからな。そのおかげだろう。細かいことはいいからコーラを飲んでくれ。」

「ええ、もちろんいただきます。それと実は私も昨日のJAW〇を観たんですよ。」

「なるほど、感想を言ってくれ。」

「映画は面白いですけど、現実だと巨大ザメは嫌です。それにJAWSと比べたら悪いですね、私達を襲ったのはかなりB級ですから。」

「そのとおりだな、さあ、ルドルフとオグリが来る前にコーラを飲んでくれ。」

「あの後大変でしたよ、時計が発動するまででしたがルドルフさんずっと泣いてましたよ、あんな姿始めてみましたよ。オグリさんは冷凍庫に入ってあるおにぎりを泣きなが

ら食べてました。」

「今回はそうならないさ。どうすれば助かるか予想は建ててある。」

昨日に戻ってくれば薬を飲み干してコーラを飲めば万事解決だが、朝に戻ったので、他の方法を取る。

一つの行動を変えるだけで充分だったようだ。そうテイオーとオグリにも手伝ってもらったことだ、こうすることでルドルフのスタミナは解決される。アグネスデジタルにも手伝ってもらったが一番スタミナがあった、愛の為せる技だな。

ルドルフは意識してなかったと思うが取り返しのつかないこととはそういうことだろう。

それに心なしかオグリの根性とスタミナが鍛えられた気がする。成功ということだろう。

サメは二度と発生しないのでまた明日から普通の合宿だ、いろんな人間が『時計』を使つて何度もやり直さない限り大丈夫だ、終わらない夏休みは絶対にあつてはならないからな。

不沈艦と焼きそば屋台

サメ騒動が終わり合宿所に平和が戻った。私がこの仕事を教師のようだといったのはこれだけの大事件を解決してもポーナスも出ないというところだ。ポーナスは贅沢を言い過ぎたかもしれないがせめて感謝状くらい貰えないだろうか。

一回死ぬという経験もしてしまっただが、なかつたことになったのでこのことを知っているのは乃河ちゃんと俺だけだ。

まあ、気にはしてはいけない『時計』のおかげで助かったわけでもあるし、リトライできただけ感謝しよう。

そしてあれだけのことをしたんだが、

まだオグリのお腹は膨らんだままで、

今日もオグリのトレーニングは腹筋多めだ。

ルドルフのトレーナーは海外出張している。

預けるという意味合いでもあつたんだろう。

タマモクロスとスーパークリークにはオグりに野菜多めの料理を勧めてもらおうように頼んでおいた。肉よりは太りづらいはずだ。しかしオグリがとうもろこしを屋台で沢

山食べたと聞いたときはしまったと思った。

とうもろこしは野菜の中でも糖質とカロリーが高い痩せようとしているときにたくさん食べるのは悪い。置き換えダイエットとかしてる奴には悪いが米のかわりにコーンを食べてダイエットとか言ってるやつは2個以上食うなよ。茶碗1杯よりカロリー多いからな。

ジュ

元気なウマ娘「トレーナー何してるの？」

「その変な半角まじりの声はテイオーだな」

「見ればわかると思うが焼きそば屋台をしている。」

「ゴールドシップが手伝えと言ってきてな、日頃一緒に遊んでいるから手伝うことにした。今ゴールドシップは昼休憩中でついでにライバル店の偵察に行っている。」

俺はこのクソ暑いなか焼きそばを焼いている、一人じゃないとはいえ普通に12時頃に休憩を取るとは思ってた。なかつた。

「そっちのカッコいいお兄さんは？」

乃河くん「前あつた時はUMAの姿でしたね、改めて自己紹介します。アグネスタキ

オンのトレーナーの乃河悠一です。」

「アグネスタキオンってこの前のサメ騒動の元凶だった人だよな。」

テイオーが少し恐がっているようだ。ここはかわりに釈明しよう。

でも乃河くん素でヤバいからなタキオンと組む前からヤバかったし、人に迷惑を掛けないタイプのヤバい人だしな、一緒にトレーナー試験受けたときに体力測定の水泳部門で自由に泳いでくださいって言われたときに背泳ぎ選んだ人間だからな。それはどっちかというところか、一番謎なのはあんなにイケメンなのに彼女がいたことがないというのが不思議だ。告白をすべて断っているのか？

簡単に説明するか。

「安心してくれテイオー、乃河くんはいつも一番にタキオンの犠牲になっている人だ、あと面白さもあるぞ、モノマネが得意でこの前はビコーペガサスに正しいアマゾンポーズを教えていた。あと昔読モだったらしいから読モシャウトもうまいぞ。」

乃河君が昔元祖のア○ゾンの変身をしてくれたが、するときにはパンツ一丁になってしたから、かなりノリもいい

「ふくん、それでこのお店のオススメは何なの？」

「よく聞いてくれた、ゴールドシップにはただの焼きそばだけでは客の心を掴めないと言った様々な物を増やしている、俺のオススメはオムそばだ、卵のおかげで甘さがまし

て栄養もバツチリで夏にびったりな物だ。」

「私のオススメは海鮮焼きそばです、近くの漁港で取れた新鮮なエビイカアサリなどを使用していますのでとても味わい深いものになってます。」

「じゃあボクはオムそばをちょうだい。」

「ハイッ！オムそば一丁！」

「つてラーメン屋やないかい！」

乃河くんはこういうノリがいい。

今度は生徒会の3人がやってきた。

「いらつしやい！うまい焼きそばだから是非食っていつてくれ。」

エアグルーヴ「貴様らちゃんと許可は取ってあるのか」

「安心してくれ営業許可もあるし、俺は食品衛生責任者と管理者両方の講習を受けてるから、安全面には気をつけてある。ちゃんと講習会の卒業証書もある。」

ナリタブライアン「肉はあるのか？」

「お肉マシマシの焼きそばはあるぞ。」

「ならそれを頼む、肉は更に多めに入れておいてくれ。」

「ルドルフとエアグルーヴは何がいい？」

「トレーナー君のオススメの物を頼むよ。」

「食べるとは言っていないが私は一日分の半分野菜焼きそばをくれ。」

「わかったルドルフはオムそばにしておきな、エアグルーヴなかなかないセンスをしているな。」

最近野菜の値段が上がってきているので、この野菜焼きそばが一番原価が掛かってある。オムそばは比較的安い、肉マシマシ焼きそばも結構原価はかかっている。

海鮮焼きそばはトレセン学園のお陰で安く仕入れることができたので実は結構安い。

ちなみに俺が好きなのは塩焼きそばだがあまり売れないオムそばも好きだが夏の暑さに塩焼きそばの塩分が非常によく効く、似たような現象でポカリ美味すぎ現象がある。

その後も俺たちは焼きそばを作り続けた、ナウでヤングなウマ娘にはナポリタンをオグリには特盛り野菜焼きそばをそんな具合で暗くなるまで焼きそばを作っていた。

夕日が沈みかけている頃

「乃河君俺たち間違つてた気がするんだ、冷静に考えて一日中焼きそば作つてるトレーナーつて俺たちぐらいだと思ふんだ。」

俺はオグリが太り気味だからまともなトレーニングが出来ないが乃河君はどうなんだろう？

「私はタキオンが謹慎中ですので気分転換ができて良かったと思つてますよ。」

そうか、あれだけのことでだから流石に謹慎処分はくらか退学にならないだけ良かったのだろう。

「本当にルドルフさんには感謝してます。タキオンと併走してくれたことも今回の件も本当にいくら感謝してもしきれません。」

乃河君は確か最初モルモットになるのを拒否していたがルドルフと併走するタキオンを観てモルモットになるのを決意したんだっけ、トレーナーじゃないあたりやつぱり狂つてるな。

ハジケリスト「遅くなったな！オメーらちやくんと焼きそば売つてたな？」

ようやく帰ってきたようだ。

「随分遅かったな、あの海の家恐ろしいサービスのドリンクバーで遊んでたのか？」

「なくに言つてんだ、アタシが店を放つて遊ぶわけねえだろ！偵察ついでに勝負してき

「たんだよー！」

「料理勝負ですか、確かに宣伝にもなりますしライバル店とこのお店の焼きそばの違いもわかりますし勝ったときは宣伝になります。」

「おう！バッチリナカヤマフェスタと対決して勝ってきたぜ！」

「いやー、強敵だった、ソースの隠し味にオイスターソースを混ぜた、恐ろしい焼きそばだった、けどアタシの作った究極のゴルシちゃん焼きそばmk2の敵じゃなかったな、」

「ちよつと待て、海の家のお店がナカヤマフェスタだったのか？」

「何いってんだそんな訳ねーだろ、アイツはただの客だぞ。」

「なんで客と勝負してんだよー！」

「じゃあねーだろ、アイツ勝負好きだし、その後はビーチフラッグにビーチバレー、遠泳対決に綺麗な貝拾い対決もしたぞ。」

「しつかり海を満喫してんのかよー！お前こっちは昼飯休憩も取らずにクソ暑いなかこの鉄板で焼きそば作ってんだぞ。」

「なんだ、そんなに怒って、そーか昼飯食ってないから腹が減ってるんだな、ほらアタシが作ったゴルシちゃん焼きそばmk2をあげるから食え。」

むしろ怒りのボルテージがあがったが腹が減っているのは本当なので食うことにし

た。

「うますぎる!!」

「乃河くん別にいきなりボケなくてもいいからな、けど確かにめちやくちやうまいな、腹いっぱいになったらなんかどうでもよくなったな。」

「お前ら明日も頼むぞ!」

「それは勘弁してくれ!」

俺と乃河君は一齐にダツシユで逃げた。

ゴールドシツプの追い込みは凄まじい乃河君が一瞬で犠牲になった、その10秒後乃河君を担いだゴールドシツプに捕まった。

その話をオグリにすると何故か知らんがゲートを出るのが得意になったかもしれない。マジで訳がわからない。

明日はオグリの太り気味を治す為のトレーニングをするつもりなので仕方ないので鏡君を犠牲にしよう。

赤ちゃんプレイの件で脅しをかければ大丈夫だろう。

芦毛の神社

木原「鏡くん少し話をしようか？」

鏡「はい！先輩！」

「君は元気だね、これから君の元気がなくなるような話をしようと思っ
ているがいいかい？」

「えっ、アツハイ」

「君は担当しているウマ娘のスーパークリークに赤ちゃんプレイを
してもらっている。」

「そのことについてなにか弁明はあるかい？」

「先輩見ていたんですね、これは秘密にしておきたかったです
が話しておきます、クリークは誰かを甘やかしたり、彼女のイメ
ージする母親の行動をしないと実力を発揮でき
ないんです。」

「そのために僕は彼女の母親プレイに付き合うことで全力を出
せるようにしているんです。」

「君はあくまで自分が愉しむ赤ちゃんプレイではなくクリークの
為のママさんプレイだと言いたいんだね。」

「一つお願いがあるんだがポケットの中にあるものや持っている持ち物を見せてくれな
いかい?」

「えっと、それは……」

「大抵の人間は嫌がるのだが、最終的には見せる、よほどやましいものを持っていない限りはね。」

「私の推測では君はおしゃぶり、よだれかけ、ガラガラどれかを持っていると考えている。もちろん君はスパークリークのためと言うだろう。」

「ここまで話しておいてだが、君を追い詰めようとしていない、ただ君の現状を確認したい。」

鏡君は無言でおしゃぶり、よだれかけ、ガラガラの三種の神器を取り出した。

「それを出したうえで君は言い訳を考えているだろう、それもそうだ、普通の人間はそうする、でもそれは無駄なことだ、誰も信じない。」

「私は君の絶望が見たいわけではない、だからこれは誰にも話すつもりはない。」

「僕は最初はスパークリークのためにといいこのことに付き合いました、今は拒否感はなくなりクリークに全てをゆだねてしまっています。」

「人の心とは簡単なものだ、一度許してしまうと何度も許してしまう、もつと簡単なのはだんだん馴染んでしまうことだ、君はクリークママの赤ちゃんである自分と本来のトレ

セン学園のトレーナー鏡祥太郎の自分との境目を失いかけているんだろう。」

「赤ちゃんがママに甘えるのは当然のことだからね。」

「何が言いたいんですか……」

「ここまで言つてまだ分からないのかい？ 君の心と脳は赤ちゃんに侵されてしまった。」

このあと焼きそば屋台を任せると言う少し呆然としながら屋台に向かつていった。

少し言い過ぎたかもしれないが彼のためにも伝えておいて正解だろう、スーパーク
リークと一旦離れたほうが自分たちの関係について考えるいい機会になるはずだ。

鏡君に焼きそば作りをさせることに成功した。ゴールドシップは納得しきつてない
ようだが、満足してもらおうしかない。

そういつたことをしたあとだが本日はオグリと神社に行くことになっている。オグ
リの元気がないので合宿中のウマ娘の定番の海で遊んで気分転換というわけにも行か
ないので神社にお参りというわけだ。

オグリ「トレーナー……合宿中に無理を言つてすまない」

「元気がない状態でトレーニングはケガをするだけだしな、でも他にもいい場所がある

と思うがどうして神社なんだ？」

「最近、体が重いんだ……。」

太り気味だからな

「何をやってもちよつとしたミスをしたり、とにかく調子が悪い……。」

太り気味だからな

「それで、『困ったときは神頼みだ』って、マサさんが言っていたんだ。」

「実際、故郷のレース場の中にある神社で、お祈りしたら、レースで勝てたこともあるんだ。」

「だから、神頼みをすることにした。」

「それなら俺も一緒にお願いするよ。」

「いいのか？ありがとう、トレーナー。」

オグリキャップとお祈りをした。

「御賽銭もしたし、頼みを聞いてくれるといいが……。」

「……む？何か、ポケットの中に入っている……。」

「——こ、これはラーメン屋の替え玉無料券！」

早速のご利益だ！

「きつと、ラーメンを食べて元気になれるという事なんだろうな……！」

「体も軽くなった気もするし……うんラーメンを食べに行くか……」
早速頂いたご利益を手に、軽やかな足取りのオグリキャップと、ラーメンを食べに行つたのであつた。

次の日

膨らんでいたオグリのお腹がひっこんだ、…おかしい野菜多めに取らせて栄養にも気を遣つた食事ではなくラーメンで痩せるのは訳がわからない。

ま、まあまともなトレーニングが出来ようになるのを喜ぶべきだろう。次起きたときも神社に行こう。

でも今日は雨模様が一日続くらしい、ゴールドシツプも屋台を畳んでいる。雷まで降るらしいから今日は屋内でのトレーニングだ。

ドン！ゴロゴロジャン

早速降ってきたな。近くで雷も落ちたようだすごい音だ。

サイボーグなウマ娘「恐怖対象雷を確認、これより防御モードに移行します。」
不思議な子もいるんだな口ポツトみたいな口調だ、どうやら雷が怖いらしい。

しかしライスシャワーが近づいている、俺は邪魔になるだろうから離れておこう。アグネスデジタルが好きそうな組み合わせだな。

オグリに会って合宿中の雨の日用のトレーニングを伝えよう。

そう思い歩いていると足元にバナナの皮が落ちていているのに気がついた。バナナ先輩
ピワハヤヒデが落としたのだろう、友人として拾っておいてあげよう。

噛みつくのが好きなウマ娘「あー！どうして罨を取るのー!?!」

「フツ、これが罨だと随分手を抜いているようだな、」

「何！これはあのと時汚されたウインディちゃんの誇りを取り戻すための罨なのだ！」

回想

「ふんっ！何度叱られても、止めない！これから廊下に罨を作つてやるのだ！」

アマゾン!!「……そーかいそーかい。反省しないと、でもあんたの罨よりバクシン
オーの注意のほうが悪ろしいけどね。」

「あいつ、生徒に注意するときものすごいスピードで走るからね、廊下を走るなど注意す
るときも走るあいつのほうはまだ厄介さ。」

「あんたはまだ、バクシンオーと比べれば可愛いもんさ！」

「ンガーツ！絶対バクシンオーより廊下で走る奴を捕まえてやるのだー！」

確かにウマ娘の全力疾走は危険だがバナナのほうが危険だ。だが彼女は学級委員長
と取り締まりで対抗するという良いことをしていることに気づいていない。

「フツ、所詮子供か。可愛らしい物だ。」

おっと怒っているようだ。ここは逃げよう。

フフ、バクシンオーと同じ方法は取らないはずだから走ってこないはずだ、これで簡単に逃げられる。

ってアレ？ダツシユで追いかけてくる。

「ウインディちゃんの怒りを受けるのだー！」

「ギャー——!!!」

オグリ「トレーナー、その首筋にある歯型は……」

「シシマイに噛んでもらった、ご利益もあるし縁起がいい。」

そう言っただけはタマモクロスに最近獅子舞姿のた○けん見てないなど言っただけでオグリと将棋のトレーニングをした

芦毛とビデオ

雨はまだまだ続く、今日は過去のレースを見て研究をすることにした。

木原「オグリ、この人があの恐ろしいエアグルーヴのお母さんだ、記者会見の映像まであるからわかると思うがエアグルーヴと似てないだろう。めちやくちや明るい人だ。たわけとか貴様とか言わないぞ。」

オグリ「トレーナー、でも走っている姿は似ているぞ、とても強そうだ。」

「そこでこの人がキングヘイローのお母さんだ、7冠のすごいウマ娘だ、7冠ウマ娘の娘ということまでキングヘイローはすごい期待されてるぞ。この人も強敵と戦いまくって勝ったり負けたりしてたからキングヘイローのあのど根性と努力は親譲りかもしれないな。」

昔のレースを見ていると今活躍している。ウマ娘の母親が出ることもあるのでそこいらへんの解説もしている

「全く関係ないんだが後輩のBNWと呼ばれている三人組のウイニングチケットの座右の銘はパワフルなレディらしいぞ、なんでだろうな。」

「トレーナー、この人たづなさんにそっくりだ、昔はレースに出てたのか、それに他のウ

マ娘達を置き去りにしているぞ」

「ハハハ、オグリたづなさんは人間だぞ、あとその映像は白黒だぞ、ほらそれにたづなさんは緑の服だからな、アハハ」

たづなさんの正体は不明だがおそらく人間だろう。そうであってくださいそんな感じでオグリとレースについて勉強している。

「トレーナー40年以上前のレースにマルゼンスキーが出ていた気が……」

「気にするな、それは気のせいだ。ほら俺年上には敬語使うだろ、マルゼンスキーに敬語使ったところ見たことあるか？」

「そうだな、きつと気のせいだな。」

危ない、新人のときマルゼンスキーに敬語使ってたんだよな、たづなさんと理事長をちゃんづけで呼ぶから年齢が謎なんだよな。

「ほらオグリ今度は最近のレースを見るぞ。」

オグリとルドルフのレースを見た。

「ルドルフ今とだいぶ違うな。」

「今でもたまに中央を無礼るなよとか言ってるけどな、昔のほうが威厳はあつたよ。けど今はダジャレのおかげで親しみやすさがましたな。これはヒミツなんだがルドルフ

はジョークをまとめたメモ帳を持つてる。それにジョークが書かれたTシャツも持つてる。」

「それにとっても速いな。いつかレースで勝負したい。」

ルドルフが有馬記念で勝負したいと言っているのは隠して伝えるのは菊花賞のあとにしよう。今のルドルフ弱点を教えておこう。

「オグリ実はルドルフはラストスパートの時に3人以上追い抜くとめちやくちやく速くなってたんだ、理由はわからないがその力を使うためにいつもは差して戦ってたが最近では安定する先行策をとっている、おかげで恐ろしい爆発力が無くなったから少しだけやりやすくなっている。そこが弱点だろうな。」

オグリがその話を聞いてうなずいている。さて重要な話もしたしお菓子のおかわりを用意してあげよう。

すぐく食べるから多めに用意しておいてよかった。

テイオー「トレーナー！遊びに来たよ〜」

「テイオー、遊んでいるつもりはないんだがな、まあいいか、テイオー昔のレースを観てるが一緒に観るか。」

「観る観る！カイチヨウのレースもある!？」

「担当だったからな、レース前のインタビューからあるぞ。」

「コーラとお菓子を用意するから興味のあるレースを観てくれ。」

「テイオー、このレースにたづなさんが出ているんだ、トレーナーがどうしても信じてくれないんだ。」

「え〜!? たづなさんってレースに出てたの! 強かったの!」

「10レース見たけど全部勝ってるぞすごい人だ、それにレコード勝ちが多い」

「へ〜 たづなさんってカイチョーぐらいすごい人だったんだ〜」

「イヤだから気の所為だからな、オグリそういうことにしておいてくれ、ほらおにぎりも作ってあげるから。」

そう言うとおグリはようやくたづなさんのことを話さなくなってくれた、知らないほうがいいこともある。

「かわりに俺の考えたルドルフがメイクデビューについて言いそうなことを言おう。」

キリ『そんなものは鎧袖一触だ』たぶん転入生が入ってきたら言うと思う。」

「え〜、カイチョーって確かに四字熟語よく使うけどそこまで無理やり使わないよ〜。」

まあ、中央に転入してくるウマ娘がそうそういるわけでもないけどな。それにオグリレベルの強い子はそうそう現れないだろう。でもこれは絶対言う。

ルドルフ「今日は勉強会のようなだね。私が何か言うと話していたが何を話していたん

「だいたい？」

「気にするな、ルドルフは皆のために粉骨砕身で頑張ってくれる品行方正で立派なウマ娘だって話していたんだ。」

「そうか、そう思ってくれているなら頑張っているかいがあるよ。ところでトレーナーその首筋にある歯型は……」

「ルドルフが勘違いするとは思わないが一応言っておこう、トレーナー仲間がキスマークと間違ってたがこんな深々と大きいものがあるわけない、シシマイに噛まれた。そう言うことにしておいてくれ。」

「カイチヨ、キスマークって何々？」

「テイオーそれは私には説明できないからトレーナーに聞いてくれ。」

そういうわけでテイオーに説明した、テイオーの顔が赤くなっている、夜には相部屋のマヤノトップガンも赤くなるだろう。

そんなこんなで3人でビデオを見た、若者にビデオがわかるか不安だったが、問題なかった、ルドルフはレースシーンは見られても普通だったがインタビュをみられると少し恥ずかしそうにしていた、どんな人間にも恥ずかしい過去はあるという訳だな。

全員レースに対する理解力が上がった気がする。これ以上は今日は効果が出ないだろう。

「さて、レースについての勉強は十分出来たと思うからDVDの映画でもみるか？」

「ボクもレースはたくさんみたから映画が観たかったんだ。ありがとうトレーナー！」

ルドルフとオグリも賛成してくれたので映画を選んでもらっている、正直サメ映画以外ならなんでもいい。

タマモクロスやスーパークリークと一緒に映画を観て反応が見たかったが二人とも今日はレースらしい、合宿中にレースは疲労を残しやすいからあまりしない方がいいが何か理由があるんだろう。

見る映画が決まったようだ、

ちなみに俺のオススメはコマ○ドーだがター○ネーター2になった、どちらもすごいマッチョマンが活躍する映画だから実質同じだ。

テイオーとオグリが溶鉱炉のシーンで泣いていた。俺は泣かない、金曜日○ドショーでもみるし、土曜プレ○アムでも見る、何なら一年に一回DVDで見る、でもその度いい映画だと思う。そんなにみてるがたぶんDVD持っていないラピュ○の方が多く見て

と思う。何度も同じシーンで泣くのは無理だ。でも先輩が閃光○ハサウエイを3回見たけど3回とも泣いたと言っていたので大ファンなら泣けるのだろう。

この勢いでターミ○ーター3を観るようだ、ポップコーンがきれかけているので買ってあげよう。

ルドルフに伝えて部屋を出た。

ツルン　グチャ

「ハツハツハー！あんなに言っただのにウインデイちゃんの罠に引っ掛かるなんてお前馬鹿だなー！」

シンコウウインデイが大はしやぎしている、タキオンから取り上げておいたUMAになる薬を飲んだあと全力で追いかけて回した。

捕まえたあとヒシアマゾンに引き渡した、ポップコーンと一緒にコーラを飲んでUM Aにならないようにした。

コーラでなぜ治るのかはわからないが気にしたら負けだろう。

ターミネーター3の反応は2より良くは無かったので2のほうが面白く感じたよう
だ。

天気予報では明日は晴れるらしいのでトレーニングに戻るだろう。

同期と畑

晴れたと思ったたらトレ－ニングではなく畑仕事をしている、俺が言えることは無農薬は大変ということだ。

理事長「雑草！根っこから引き抜くことを忘れずにな。」

理事長が無理やりあの口調で話しているのがわかる。

夏合宿の途中だが俺たちはトレセン学園の人参畑の草抜きをしている。無農薬で栽培している為雑草が生えまくる、連日の雨により凄まじい量が生えてしまった。

生徒会が時々手伝っていたようだが手が足りないというわけで俺が呼ばれた。謹慎明けの乃河君とタキオンもいる。

乃河「木原さん、随分手慣れてますね。」

「俺の母校の高校は商業科と農業科があつて俺は商業科だったんだが、部活動の方で野菜を育てるとポランテアをしていた、設備があるから本格的に野菜を育てることもできた。ポランテアの方では故郷の植林活動と伐採事業を手伝ったこともある。なれなきやできない作業だったよ。」

ちなみに俺の故郷の植林活動は自然を守るための活動と言っていたが俺の故郷は林

業が長い間殆ど停止していたためむしろ山に木が有り余っていてむしろ間伐材だらけで土砂崩れが起きるくらい木が多いんだがそのあたりはよくわからない、森は百年サイクルで管理しないといけないらしいが林業を行う人間が少ないし、増えることもないだろうし、これ以上木を植えないほうがいいと思うがそこいらへんは誰も話さない。植林と伐採を行っているのが別々の組織だから起きるんだろう。

そんなふうには様々なことを考えていると落とし穴を発見した、簡単に発見したのでシンコウウインディの落とし穴だろう。ゴールドシップの落とし穴は見つけられないからな。

「乃河君、引つかかるマヌケはないと思うが落とし穴を埋めるから、スコップを貸してくれ。」

「私も埋めるのを手伝います、そのほうが早く済みます。」

「ありがとう、早速埋めるとしよう。」

落とし穴の目の前に移動したとき、いきなり足場が沈んだ、

……そういうわけか、ここまで恐ろしい罠を作るのはゴールドシップだろう、ダミーを作つて誘導して本命の穴に落とす。引つ掛かりやすいように考えられた恐ろしい落とし穴。落とし穴だからそこまで危険ではないが3mも掘るな一人で落ちたら出れなくなるわ。

いやゴールドシップがそんなただえげつないだけの事をするとは思えない、ということとは

「おつしやー！ゴルシちゃんの落とし穴に落ちたにんじん泥棒はどんなやつだ〜！」

「俺だ、あとにんじん泥棒じゃない。」

「オメー、トレーナーが落とし穴に引つ掛かるなよ。そんなんじや立派な侍になれねえぞ。」

やはり意味不明だな、友人だと思っていたがやめようかな

「ほらアタシが引つ張ってやるから、早く手を上に上げろ」

「3mもあるから腕を伸ばすくらいでは無理だ、乃河君も引つ張り上げるのを手伝ってくれ。」

「ええ、わかりました。」

そう言つて乃河君がゴールドシップの足を掴んで支えて穴から引つ張り上げてくれる。体力ヤバいなタキオンの薬を飲みすぎたのか？

引つ張りあげてくれた、ゴールドシップが助けてくれたが穴を掘つたのもゴールドシップなのでヒシアマゾンに連れて行こう。理事長に報告は段階をとばし過ぎて大変なことになるかもしれない。

一時間後

「乃河君今度こそウインディの落とし穴だ、埋めよう」

「道をチェックしながら進みましょう。」

これは俺が引つ掛かったあとにわかったことだがゴールドシップはこの畑に大量の落とし穴を作っており、高難易度のマインスイーパーや、トル○コ不思議のダンジョンのワナの石像部屋のようになっている、俺がくらったのはシンプルな落とし穴だが他にも転び石、ネバナバ、水浸し、回転、様々なギミックがある、モンスターが出ればガチのダンジョンになる。

「……乃河君、タキオンはどこに行つたんだい。」

「今は皆さんにお茶を配りに行つてます。」

「……今のうちに捕まえよう、何か起きる前に」

穴を埋めたあとタキオンを探した。

「タキオンそのお茶は普通ですよね？」

「モルモット君、勿論だとも夏の暑さにピッタリの美味しい紅茶さ」

「タキオン、君は前科もちだからな、悪いが今のうちに捕まえさせてもらうぞ。」

タキオンが素直に連行されてくれた、本当に何もしてないのかもしれない。悪いことをした。

「木原さん、オグリさんも手伝ってくれていますが何をしていますか。」

「オグリはメジロライアンとトマトの畑に行っている。雑草を抜いたり畑を耕したりしているだろう。」

「あの二人仲いいんですね。」

「俺は初耳だが一緒に畑を作ってるから仲はいいんだろう。それにこの地獄よりあのトマト畑にいてくれる方が安心だ。」

「それもそうですね、私達が穴埋め班に選ばれたそうなので二人で埋めましょう。」

畑作業では本来ないはずの穴埋め作業をしている。というか何が起きるかわからないので地雷処理を任されている気分だ、さっき花火が炸裂したしな。焦るからやめてほしい。

「もう20個以上埋めたがまだあると思う?」

「流石にないと思いたいですがゴールドシップですからね、何が起こるかわかりませんがもう7時を超えて暗くなってきました、理事長も帰りましたし、残っているのは私達くらいですからもう帰りましょう。」

そういうことで帰ることにした。

次の日の朝

「乃河君も気になるから来たんだと思うが、これは俺たちだけの秘密にしておこう。あと犯人は誰だと思う。」

ニンジンが落とし穴に落ちていて、何故か顔があつて腕と足があり歩けるように見える、某魔法映画のマンドラゴラのような、鳴きだしたらやばいかもしれない。

「タキオンだと思いません、謹慎中に栄養価の高いにんじんを作ろうとしていましたし、どうすればいいと思えます?」

「にんじんのくせに土の中が苦しいらしい。このまま埋めてやれば動かなくなるだろう。」

そういうわけで埋めた。タキオンはやはり実験をしていたようだ、このにんじんのように動きだすにんじんが増えるかもしれないがその時は理事長に話して畑を燃やすしかないだろう。

数日後

乃河君はタキオンがにんじんに注射した栄養剤をすべて破棄して、調査レシピもシュレッダーに掛けたあと燃やしたようだ、これで同じことは起きないだろう、事件になっ

ていないので報告せずにしておいた。

ルドルフ「トレーナー君、最近トレセン学園の無農薬にんじん畑で夜な夜な悲鳴のよ
うな音が聞こえるらしい」

テイオー「エー！カイチョーホントナノー！」

「フフ、テイオー怖いのか」

「ボ、ボクは無敵のテイオー様だからね！怖いものなんて何も無いよー！」

「ああ、その件に関してはマンハッタンカフェが乃河君と調査したらしいどうやら彼女の目には何も映らなかったようだから幽霊のしわざではないらしい。テイオーも怖が
らなくてすむぞ。」

「だからボクには怖いものなんて効かないってば！でもオバケが出るわけでもないから
これで皆が安心できるね。」

「トレーナー君、今でも聞こえるらしいから原因は不明なようだ。今日の夜一緒に調査
してくれないか。」

「ああ、もちろんいいぞ、調査道具はこつちで用意しておくからしつかりトレーニングし
ておいてくれ。俺はこのあとオグリのかわりにトマトの水やりに行くからそのついで
に準備しておく。」

エアグルーヴの花に水をあげるのも頼まれたのでそれもする、夏合宿のあとのレクリエーションについて会議するらしいので長引くようなのでかわりに頼まれた。オグリは今日は早朝からトレーニングに向かったので水やりを忘れているようなので代わりにする。

ルドルフと夜ににんじん畑を調査したが当然確信には触れないようにした、それに今日は鳴き声も聞こえなかったので問題解決は困難だが問題なし時間経過で自然に解決として処理してもらった、

そういうことでトレセン学園の怪談に夜な夜なにんじん畑に忍び込む者に聞こえる謎の悲鳴という話が加わった。

あのにんじんには悪いが悲鳴もあげなくなったし、3m以上深いところにいるから見つかるともないだろう。

夏合宿はまだまだ続く、ここでのオグリの成長が明暗をわけける。基本はウマ娘に任せるのが私の方針だが明日はオグリのトレーニングに付き合おう。

芦毛と母性の合宿

今日はオグリのトレーニングを見ている。腹筋はしていない、今日もビーチマラソンだ、スピードは鍛えておいて損はない。マラソンだからスタミナも鍛えられる、このことについては前も考えた気がする。

「本当は遠泳をして全身を鍛えたいんだがオグリはビート板勢だ、何かあったら大変だ。そして今日はクリークとトレーニングをするようだ、ルドルフは生徒会、タマモクロスはパワーを鍛えに行っているらしい。」

差しにはパワーが必要だからだろう。テイオーはなぜかルドルフについて行っているらしい。あれで生徒会メンバーではないから不思議だ。

まあ、それより気になることがあるんだが、

木原「その、祥太郎君突然下の名前で読んで少し変だと思っているかもしれないが聞くよ、その自転車に付いている補助輪はなんだい？」

祥太郎「……実は僕自転車が苦手で、普通の道でも大変なのに砂浜でこげずに走れるわけがないと思い補助輪をつけました。」

「その、羞恥心とかそういうのはお持ちでない？」

たしかにコケたら大変だけど、見た人全員ドン引きするか、見てはいけないものを見たときの反応してるよ。ほら二人のことは俺に任せて走ったあとに渡す飲み物を買ってくるとか、そっちのほうがいいんじゃないのかい」

「あとこうするとクリークが喜びます。」

「そっちが本命だな、てか君すごいな！担当ウマ娘の為にまさかそこまで捨てるのか！?実はトレーナーって俺以外全員やばいやつなんじゃないよな。」

「先輩がそれ言わないでくださいよ。先輩はボケもツツコミもこなす人だと思われてますよ。」

それは別にやばいことではないと思うが、オグリとクリークの様子を見てみよう。見たところオグリのほうがスピードはあるな、だがスタミナはクリークの方が上だろう。胸にあんな重たいものがあるのにどういうことだろう。サブタンクなんだろうか？

ってクリークがコケた。ド派手にコケた。大事を取って保健室に連れて行くようだ。オグリも一緒にコケていたがなんともなさそうだ、頑丈だからノーダメージなんだろうか、それともウマ娘の謎の一緒にこけたのに一人だけダメージを受ける現象だろうか、ウマ娘の謎は深まるばかりだ。オグリも保健室に連れて行こう。

保健室

クリーク「オグリちゃんに追いつこうと思って急いだら砂浜に足を取られてしまいました。」

オグリ「いきなり加速してすまない。」

「オグリちゃんのせいじゃないですよ、それに最近何をしてもうまくいく気がしないんです。」

それは少しおかしいな、体の状態は完璧と呼べる状態のはずだ。それに傍から見れば絶対調に見える。そう考えていると鏡くんが話しかけてくる。

「先輩はどう思いますか、この状態。」

「絶対調で体力もバツチリあるのに失敗する。ただのスランプではないと思う。ウマ娘の体についてはわからないことのほうが多い、だから所感が重要だ、何か心当たりはあるかい？」

「実は……」

そう言つて、軽い血行不良があり秋までレースなど気をつけるように言われているのを教えてくれた。

「その状態で皐月賞に出てきてあの強さだったのか、恐れ入るよ。ダービーに出走しなかったのは体を気遣つてだな、君たちは治す方法は考えているのかい？」

「それがまだ、わかつてないんです。」

「思いつく限りの血行不良を治す方法を試すといい。それで治らなければ他の要因があるのがわかる。難しいことを考えすぎて基本的なことを行えていないだろう。」

「オグリも手伝ってくれるか?」

オグリがうなずいて返事をした。早速移動する。

プール

「トレーナーどうしてプールなんだ。」

「体のどこが原因で血行不良になっているのかわからないからな、全身動かすことができる水泳の出番だ。それに見たところクリークに最も向いているトレーニングは水泳だろう。」

「クリークは泳ぐのが苦手で、こうなつてからは避けていました。」

「頑張ります。」

この水泳まで失敗したらもうどうしようにもならないが流石にそれはなかった、やはり完璧に見える。オグリも一緒に泳いでいる、両方ともビート板持ちだがそこは問題ないだろう。

「祥太郎君、これは私の考えだが君とクリークでは認識の違いがあると思う。それは何を大切にするのか、なんの為にレースに出るのか、そう思ったところだと思う。だから

質問するよ、君が最も大切なものはなんだ。」

「スーパークリークです。」

「ああ、それが正解だ、だがそれだけではまだ足りないだろう、君たちの関係はそれだけでは言葉が足りないはずだ、今度は少し変えよう、君たちの力の源はなんだ？」

「それはクリークが努力を続けていること、体調を崩しても諦めない彼女の努力のおかげです。」

「半分正解だ、だが少し違う、どうして彼女が君を甘やかし褒め続けているか、わかってきているはずだ。彼女が君に伝えたいことを。」

「先輩はわかっているんですか。」

「オグリが俺におにぎりを作ってくれたんだ、とても大きな一つでお腹いっぱいになるようなすごいやつだ、そして俺は毎日おにぎりを作ってたんだ、50個だ。だから恩返しだったんだろう。」

「トレーナーはあまり褒められる仕事じゃない。公務員みたいなもんだしな、でも彼女は知っているんだろう、君がとっても凄いやつだということを、トレセン学園にいるウマ娘は全員エリートだ、トレーナーもそのはずだ、大前提だ、そのうえで君を褒めるんだ。」

「僕はどうすればいいんですか。」

「君はこの前の私の話を受け取りすぎたようだ、演じるのは悪いことではない、だけど信じないのはダメだ。私から言える一つの答えは、どうして褒められ甘やかされているときに演じているんだ、君自身が褒められているのに。」

「この関係は少しおかしいと思っっているんです。」

「何がおかしいんだ、トレーナーとウマ娘の関係はどこも違うのに、どんな関係が正解かは誰にもわからないんだ、俺だつてこの前はおにぎりを作り続ける機械になっていた。それもトレーナーなんだろう。」

「長々と説教臭いことを言ってしまったが、ここまで言えばわかるだろう、円満にいく一番の方法は本気で甘えることだということが、

「ありがとうございませう！ようやくわかりました、絶対に秋までにクリークの血行不良を治します。菊花賞は必ず勝利します。」

「ああ、楽しみにしているよ、君たちが最強になつて現れるのを。」

「祥太朗くんはようやく自分の進む道を見つけてきたようだ、だが本当にわかつているんだろうか私が言ったことは人間性を捨てると言っていることに。」

「オグリそろそろあがつてくれ。」

オグリが返事をしてあがつてくる。

祥太朗くんに応援の言葉を伝えて、外のアイスの自販機でオグリを待つ

「トレーナー、クリークは大丈夫なんだろうか」

「少しアドバイスをしておいた、秋には完全に治っているはずだ。俺たちも菊花賞にむけてトレーニングを続けよう。強くなつて現れるはずだ。」

オグリにアイスを買ってあげた。俺はチョコナッツモナカを買った、17アイスで一番うまい。チョコがパリパリでナッツの香りがよくて非常にうまい、期間限定のやつを入れてこれを抜くやつは絶対に許さん。

「トレーナーはどうして私にアイスを買ってくれるんだ。」

オグリは俺のおすすめしたソーダフロートを舐めながら聞いてくる。

「今日はマラソンの後に水泳もして頑張ったからなアイスぐらい奢るさ。」

甘いと言うやつも居るが食いしん坊でかわいい相棒と一緒にいたら奢りたくなるだろう。破産しない程度にな。

オグリのライバル達はさらに強くなるだろう、忘れてはいないが夏合宿だからな思ひ出も大切だが強くなるのも大切だ。

芦毛とお出かけ

ライバルのパワーアップを手伝うという冷静に考えたらしないほうがいいことをしたんだが大丈夫だろう、オグリが同じぐらいパワーアップすれば問題ないしな。

オグリ「トレーナー、どうして今日は砂の城を作るのがトレーニングなんだ。」

「オグリ、少し疲れているんだろう、だったらついでに遊ぼうと思つてな夏合宿でもたまには全力で遊ぶ日があつてもいいだろう。」

この前のトレーニングでわかつたことだがオグリも疲れが溜まっているようだしな。コケた時に疲れているように見えだし、

「オグリこのタライに砂を入れたから踏みまくってくれ。」

「城を作るには土台が必要だ。土台は……」

「オグリ辞めよう、向こうにバカでかい城を作っているゴールドシップがいる。バレたら大変な気がする。」

作るのをやめて正解だったようだ、及河君が奴隷のように働かされている。

「トレーナー、やっぱりトレーニングをしたほうがいいと思うんだ、クリークだって今もトレーニングをしている。」

「クリークはあのあと5日ほど休んだからな、俺たちも休まないと体を壊してしまう。」

「トレーナー……」

「強くなるには走ることも大切だが休むことも大切なんだ、失敗してケガをしたら元も子もない。」

「ゴールドシップに見つからないように今日はレストランにでも行こう。」

「つまり、遊びに行くぞ。」

「さあ、この雑誌をよく見てくれ。」

見せてみると雑誌を食い入るように見ている。

「すごいな……黄金色のクリーム……これはウニか、パスタの上でキラキラと……まるで宝石のようだ」

やはり料理は偉大だな。オグリにはすごく効く

「ああ、こっちは……あたたかいパンケーキに冷たいアイス……。新鮮な果物がこんなに……なんて贅沢な……。」

チヨロすぎないか、催眠術師に騙されたりしてないよな

「気になるお店を見つけたようだな。」

「……トレーナー本当は次の休日に行ってみようと考えてはいたんだ。故郷と比べると店が多くてな……時間がかかって結局行けてなかったんだ。」

「どんな店なんだ？」

「うむ、パスタとパンケーキが人気の店だな。ここは『隠れた名店』と呼ばれているらしい。」

「しかし……実は先日も同じようなラーメン屋の広告を見つけて、向かってみたんだが……。」

「地図を見てちゃんと電車に乗ったはずなのに、見つけることが出来なかったんだ。」

「さすが隠れているだけある。……一筋縄ではいかないな。」

「はっ……。まさか、世を忍ぶ仮の姿で潜んでいるのか……?」

「そんな忍者や黄門様みたいな店はない。」

「むう……であればどうしてたどり着けなかったんだらう。不思議だ。」

地図を見てみるとかなり簡易的なものだ、中学の修学旅行で沖縄に行ったときわかりづらすぎてマクドナルドで済ませたのを思い出した。余談だが日本では沖縄のマクドナルドにしかないスーパーサイズとかそんな感じのコーラがある。デカすぎて同級生はドン引きしてた。

そんなどうでもいいことは置いておいてカフェに行こう。

「オグリ善は急げだ、早速行くぞ。」

「ああ……それにトレーナーと一緒になら。安心だな。よろしく頼む。」

ということとで早速車で向かう。何事もなくカフェに到着した。

「ここがそうなのか……まったく迷わなかったな。さすがトレーナーだ。」

「……………」

「どうした？」

「いや、こんなにも垢抜けた場所だとは思っていなかったから……なんだか落ち着かない。」

「この服で大丈夫だろうか。」

都会には、決められた服装でないと追いつ返される店もあるのだろうか？」

「ここは問題ない。」

「そうか、それならよかった。だが……やはり少し落ち着かないな。」

お店のスタッフ「ご注文はお決まりになりましたか？」

「あ……えっと、なんだったか……。」

「パスタとパンケーキじゃなかったか？」

「うむ。だが名前が少し難しく……。」

「フランス語のような……カタカナの……。1つはウニのパスタで、なんと……」

……」

「ウニのパスタを2つ」

「それですと、リュミエール・ドレのウニクリームパスタですね。」

「おお……正式な名前でなくてもいいのか。……よし。」

「すまない、フルーツがたっぷり乗ったパンケーキも2つ、お願いしたいのだが。」

「はい、フリュイ・クレープですね。かしこまりました。」

「すごい……見ていたか、トレーナー。私でもちゃんと注文できたぞ。」

慣れない場所にオグリキャップは緊張しているようだったが、食べた後には、すっかり緊張も解け――

「美味しかった……味わったことのない味だ。口の中でとろけるように、一瞬でなくなってしまう……。」

「……トレーナー。1つ提案があるのだが、お代わりをしないか？」

「あまりにも一瞬でなくなってしまうので、少し味わい足りない気分なんだ。せつかく出向いて来たのだし――」

「お代わりもいいけど、他のも試さないか？」

「他のも……言われてみれば確かにそれもアリだな。」

「パスタもパンケーキも素晴らしい味付けだったし、他のメニューも負けず劣らずの美

味しさに違いない。」

「となると何を頼むのが正解なのか……。むう、これは非常に難しい選択だぞ。」

そう言つてオグリキャップがメニューとにらめっこをすること数十分——

「……ダメだ、決まらない！どれもこれも美味しそうで、全部注文したくなってしまう。」

「ん？……それでも問題はないか。」

「トレーナー、メニューに書かれているもの、全部注文してみるというのはどうだろう。」

「それは勘弁してくれ……」

「こうすればよかつたんだ。みたいな顔をしてヒカ○ンみたいなことを言わないでくれ……」

「……ダメなのか。だったら君が注文を決めてくれないか？どのメニューが好みだ？」

「ハンバーグのパイ包み焼き」

「ふむ……初めて聞く料理だ。」

「うん、せっかくの機会だしそれを食べてみよう。私に注文させてくれ。」

オグリキャップは子供ののように嬉しそうに手を挙げて店員を呼ぶと、『ハンバーグのパイのやつ』と注文した。小学生かな？

「サクサクのパイに程よい酸味と甘みのベリーソース、パイの中には肉汁たっぷりのハンバーグ——」

「まるで夢を見ているかのような幸せなひと時だった。」

いきなり語彙力が復活した。

「なるほど、ハンバーグに果物のソースというのがピント来ていなかったが、これは確かにありだ。」

「ありがとうトレーナー。キミのおかげで、食の世界が広がったみたいだ。」

「自分の好物だけでなく、一緒に食事する相手の好みのものを食べてみるというのも、楽しいものなんだな。」

実はハンバーグよりスバゲッティ・ネーロ、イカスミパスタの方が食べたかった、好物だしあまり食べれる店も多くない。同じものを食べるからみんな大好きハンバーグにした。秘密だがな

「トレーナー、今日はありがとう。料理も美味しかったし、とても楽しかった。」

「こちらこそ、いいセンスだった。」

「ふふつ、そう言ってもらえると嬉しい。今日は本当にいい日だ。」

オグリを車に乗せて合宿所に戻ろう。帰ったら今日のことを思い出して布団に入るのだろう。

「それじゃあ、次の店に行こうか。」

「……ええ？」

「普段は学園近くの店を巡るばかりだったが、今日はトレーナーが案内してくれると言っていたからな。」

「いくつか他にも目星をつけてきたんだ。」

「ランチの時間は過ぎてしまいかもしれないが腹具合からして、あと10件は回れるだろう。」

「今日は1日カフェ巡りになりそうだ、楽しみだな、トレーナー。」

心なしか足早になるオグリキャップと共に、門限ギリギリまで、カフェ巡りを続けたのだった……。

そしてビーチには姫路城が出来あがっていた。まさに砂上の楼閣である。

夏祭りの時期も近づいている、他にも肝試しや生徒会のイベントもあるから手を貸そう。半分は過ぎたがもう少しだけ夏を満喫しよう。

芦毛と夏祭り

海辺の施設に泊まり込み実力向上を目指す夏合宿、折り返し地点を過ぎているがもう少し続く今日も早速オグリのトレーニングを始めようとしたところ――

「すまない、トレナー。トレーニングを開始する前に、受け取ってほしい。」

オグリキャップがバッグの中からゴソゴソと一枚の紙を取り出す。

――どうやら手書きのアンケート用紙のようだ。

「私が体を温めている間にでも、答えておいてほしい。なに、すぐに済むはずだ。」

アンケートの内容は――

『甘いものは好きか』『辛いものは好きか』『食物アレルギーは?』と、食べ物に関するものばかりのようだ。

「ほとんど『はい』か『いいえ』で答えられるようになっていたので、手間はとらせない……と、思う。」

「頼めるだろうか。」

「構わないが……」

「ありがとう。では、よろしく頼む。」

オグリキャップが準備運動で走っている間に、アンケート用紙に記入した……。

「助かった。夜までには確認して、役立てたいと思う。」

「役立てる？」

「うむ、トレーナーがしっかりと書いてくれたので問題ないはずだ。安心してくれ。」

「あとは、トレーニングに集中し、今日のメニューをしっかりとこなすだけだ。」

「中途半端な状態では、楽しみも半減する。できるだけ体を動かし、夜に備えよう。」

「夜に何かあるのか？」

「知らないのか？ 今日から——……むっ、

これはアレだな。」

「秘密にしておくほうが、それらしいのではないか？」

「どう思う、トレーナー？」

「よくわからんがやりたいようにすればいい」

「……うむ、悩ましいな。とりあえず、トレーニングを終えてから考えるとうしよう。」

オグリキャップは、ソワソワしている。問いかけるのをやめ、トレーニングを開始することにした

「はあ、はあ……ふっ。」

「今日のメニューはこれで終わりか？ もう少しいけそうな気がするが……。」

「このくらいがちようどいい」

「そうか……うん、今日はここまでにしよう。」

「トレーナーが答えてくれたアンケートの確認もしなくてはならないし、身を整える時間も欲しい。」

思案するオグリ「下見はしてあるが……なにぶん、初めてのことだ。時間は十分にとつておいた方がいいだろう。」

「どこか行くのか？」

楽しそうなオグリ「ああ、連れていきたい場所がある。汗を流したら、合宿所の前で待っていてくれ。」

「だったら食事を済ましてからの方がいいんじゃないか？」

マジトーンオグリ「……それはいけない。いけないんだ。トレーナー」

育ち盛りオグリ「私も、トレーニング後の空腹に耐えるのはツライ。すぐにでも食事をとりたいたいのが、正直な気持ちだ。」

苦悶の表情のオグリ「この時間、合宿所に戻れば夕飯の香りが廊下を漂っている。今日の献立は竜田揚げと煮物らしいから殊更香り立つだろう。」

覚悟完了オグリ「だが、乗り越えなくてはならないんだ。目的を果たすためには、多くの誘惑に打ち勝たなくては。」

宣誓オグリ「どうか、わかってほしい。」

「わ、わかった。」

ニツコリオグリ「ありがとう。」

食いしん坊オグリ「……まあ竜田揚げと煮物は取っておいてもらえるか確認だけはおこう。」

「ではトレーナー。後ほど、また。」

オグリキャップは足早に立ち去った。―そして。

「ついでに、トレーナー。」

「どうだ、素晴らしい屋台の数だろう。」

「祭りか？」

「ああ。今日の夕飯は、どうしてもここでとりたかったんだ。」

「見ての通り、たくさんの屋台がある。トレーナーの好きなものもたくさんだぞ。」

「良かったら、今日はご馳走させて欲しい。日頃の礼と感謝を込めて。」

「もしかして、その為のアンケートか？」

「うむ……キミが私を知るほど、私はキミを知らなかったからな。何が喜んでもらえるのか、調べる必要があった。」

「とにかく、もてなしたかったんだ。私なりに……キミのために考えたフルコースで。」

いつもは食べることにレースのことしか考えていないオグリキャップが、アンケートまで作って考えてくれたフルコース……。

メインヒロインオグリ「それに……キミと食べる食事はとても美味しいんだ。だから折角なら、一緒に楽しめれば……と。」

「凄く嬉しいよ!!」

「……そうか。それなら、良かった。私も嬉しい。」

「では、さつそく案内しよう。まずは『超特大ジャンボシリーズ』からだ。」

「これはすごいぞ。あらゆるものがジャンボの名に恥じぬ大きさになっているんだ。」

「かき氷はバケツサイズだし、お好み焼きは座布団サイズ。たこ焼きは野球ボールサイズが……。」

「大きすぎないか!？」

「とはいえ、かき氷はもはや飲み物だし、お好み焼きは……見てみる、ほぼキャベツだ。」

「いや……もはやこれは、前菜では?」

「前……菜……!?!」

さてここで心の中で落ち着くために少し説明しよう。

かき氷がほぼ飲み物なのはそこまで大きいとある程度作り置きしないといけないからどうしても溶けてしまい水が混ざるから飲み物認定しているんだろう。いやそれは

それでおかしい。

お好み焼きが殆どキャベツなのは利益を出すため、売るには屋台で売れる値段にする必要がある。だからキャベツの割合が多いのだろう。それに肉とか海老とかイカとかいろんな具材が入るとそれこそまともに食べれる人間はいないだろう。キャベツなのは店側の優しさかもしれない。ちなみにキャベツは消化によく温かいまま食べられるので胃に優しいかも知れない。ただしここまでデカければなんでも消化に悪いぜ。

そして実はタコは結構安い、駄菓子などでタコが使われるのもそれが理由だ。なので屋台側もギリギリ赤字を免れているんだろう。しかしいくらなんでも一つの大きさが野球ボール並だと関西人でも食べるのにお米と食べる奴はいないだろう。関西の人間はうどんやお好み焼き、粉ものをおかずにご飯を食べるぞ。タマモクロスがこの前『アー！ウドンハオカズヤー』と大井生まれの江戸っ子イナリワンに言ってた、俺も粉もののご飯と一緒に食べるが関西出身ではないぜ。

「ふふっ。トレーナーも興奮しているのだな。わかるぞ……私もワクワクしている。」
「違うぞ！冷静に考えながら絶望しているんだぞ！」

つと、心のなかで叫んでいると

「すまない、店主。かき氷を2つと、お好み焼きを4つ。」

「4つ!？」

「うむ、他の屋台も回る予定だから、まずは控え目にな。足りなかつたら、また戻つてくれればいい。」

「遠慮はいらない。好きだけお代わりしてくれ。」

「いや、流石に食べきれ——」

「トレーナーはいつも、私に足りないものをフォローしてくれる。これはいまの私にできる精一杯の感謝の気持ちだ。」

「こういったことは初めてで、照れくさいが……」

「どうか、受け取ってほしい。」

大きすぎる感謝の気持ちに、しばらく動けなくなるほどお腹いっぱいになったのだ。た。

「おつ、オグリ食べるのは一旦やめて金魚すくいとか射的とかしないか、それにお好み焼きのあとにもんじゃ焼きは斬新すぎると思うんだ。」

「トレーナー、アンケートではご飯はいっぱい食べる方と書いていたぞ、それにこの前はおにぎりを食べていただろう。」

「いやーでもやっぱりお祭りといえば遊びも醍醐味だと思うんだよなあー、それにほら

俺はキミの代わりに遊びの屋台を調べてたからね、足りないところは補い合うのがトレーナーとウマ娘だからね。」

そう言っているとき背後から肩を叩かれた。

振り向くとゴールドシップがいた。

「粉モンばつか食って喉かわいただろ！このゴルシちゃん特性のスペシャルドリンクで水分補給するといいぜ！」

「えっ!?ちよっ!?!」

ゴールドシップが俺の口の中にドリンクを入れてきた。

そのまま抵抗できないので飲むしかない。

「なぜこの仕打ちを、あと色の割にまともな味だったか何を混ぜたんだ?」

「オメー、何アタシの店に来る前に食い物やめようとしてんだよ。お前の後輩もようやく焼きそば作り半人前になったから食わしてやろうとしてんのによ。」

「あとゴルシちゃんスペシャルドリンクの中身はにんにくにマムシにクモにオメーが作ってた牛乳入りコーラにタキオンの薬を混ぜて作ったスペシャルドリンクだぜ。」

「ミスウイトエンジェルオグリ」「トレーナー!大丈夫なのか?」

「ああ、大丈夫だオグリ、俺が大丈夫なのは地球が赤色で月が青色なくらい当たり前のことだ。そして俺はきみがルドルフとスケートをしていたのを知っている。」

「……トレーナー?」

「それに今回のお話は本来はオグリとジャンボシリーズを食べたところで終わる予定だったんだがあまりにも間を開けすぎて申し訳ないと思った作者がいつもより少し長めの話を書こうと思って伸びたお話だからな。」

「……トレーナーが壊れてしまった。」

「あと作者が夏合宿に入ってから展開が遅くなってしまつて申し訳ないと思つているのも知つているし、同期の乃河くんのイケメン設定を生かしたネタや話をせずあんまり意味のない設定になつているのも申し訳ないと思つているのと、サメが陸にあがつて走り回るとか意味不明な話ばかり書いて悪いと思つているのも知つている。」

「そして何よりウマ娘のキャラクターの出番が減ってきたのも申し訳なく感じてるようだ、天才バカボンの主役は一応バカボンだがバカボンのパパの方が出番が多いのと同じような感じだ。」

「トレーナーひとまず病院に行こう。」

「マイエンジェルオグリ、畏処苦導幻という言葉があつてな、美味しいものを食べると元気になるという言葉だ。」

「安心してくれ私はすぐに元気になる。」

「オメー大丈夫か、でも面白くなつたから別にいいな」

「ありがとう！ハジケリスト私はとても気分が良い。」

「おう！後でアタシの屋台に來いよな！」

「オグリ、それじゃあまずはヨーヨー釣りをするぞ。」

「トレーナー……元に戻ったのか？」

「オグリ私はいつでもこんな感じだよ、君のトレーナーだからね。」

「その……理由になつてないと思うんだが……？」

「ハハハ！氣にするな遊びに行くぞ！」

そういうと私はオグリの手を掴んで屋台に向かった。

「ウー、トレナイヨー」

「私も紐が切れてしまいました……。すみません店員さん、もう一回お願いします！」

「フツ、無様だな」

「まさかヨーヨー釣りにそこまで苦戦するとはな」

「トレーナー、すごい自信だな。」

「私はヨーヨー釣りは保育所で孤独のハーレム状態の時から得意でね。」

「ワケワカンナイヨー！」

「ならば私達にお手本を見せてもらえませんか。」

「良かろう、ついでに勝負にするぞ、二人まとめてかかってくるがいい、言葉を覚える前

にヨーヨー釣りをしていた私の技術見せてやろう！」
「ならボクたちが勝つたらこのあとの屋台奢ってもらおうよ！」

結果

トレーナー

TMタツグ

33個

4個

「まさか、お手本を見せてもらったあとにここまで差が出るとは思いませんでしたわ。」

「ウートレーナーガココマデツヨイトハオモツテナカッタヨー！」

「トレーナーどうしてこんなに上手いんだ？」

「さっき言った通りだが、3歳の頃にはヨーヨー釣りをしていた。保育所の七夕での屋台そこで私はヨーヨー釣りの技術を研いだ。」

「そしてマックイーンあの時の絶望を思い出しただろう。おっと無理に思い出す必要はない、世の中には忘れていた方がいいこともあるからなあ。」

マックイーンが頭を抱えてうずくまった。テイオーが駆け寄るがマックイーンは大丈夫と言っている。

「トレーナー、さつきから何を言っているんだ？」

「気にするな。そんなことよりコツを教えるから一緒に遊ぼう。」

コツを説明するぜ☆

まずはこよりをねじります。この時店によつては怒られるので店主の目を盗むか諦めることだぜ☆

こよりは短く持つて操りやすくしよう。そうすると暴発を防げるぜ☆

こよりは水につけないようにしよう。紙製だからすぐに弱ってしまうから気をつけよう☆

ゴムと水風船の接続部を狙おう、こうすると輪つかをむりやり作れて取りやすいぞ☆

このテクニックを使ってレッツエンジンヨイ☆

オグリとのイベントはカットだぜ☆

競走馬またはキャラクタのイメージを著しく損なう表現は行わないようご配慮くださいますようお願いいたします。

という、電波を受け取って全カットになったぜ。

TOLOVERレベルのイベントは起きてないから許してくれ☆

皆の妄想の中でイベントを完成させてくれよな。

トレーナーとの約束だぜ☆

「オグリ今度はゴールドシップの焼きそば屋台に行くぞ。」

「今日行く予定の屋台に焼きそばはなかったから丁度いいし一緒に行こう。」

テイオーとマックイーンもついてくるようだ、

「ゴルシ大将塩焼きそばを一つ頼む！」

「私はオムそばを頼みますわ。」

「ボクもオムそばお願い！」

「大将、海鮮焼きそばを2つ頼む。」

「よしアタシの焼きそばをメ・シ・ア・ガ・レ♡」

「大将ボクも焼いているんですが。」

「鏡くんも少しハジケというのを理解できたようだな」

「えっ、全然困惑してるんですが。」

「本当にわからないと喋ることすらできないからな、目指せビュティポジションだな！」

「先輩大丈夫ですか。」

「だいじょうぶだ……おれは　しょうきに　もどった！」

「本当に大丈夫ですか？」

乃河くんならわかるんだが、鏡くんはわからないようだ。

「その様子だと悩みは少し解決したようだな、話はきかんが頑張れよ。」

「ゴルシちゃん焼きそば、気合を込めて作ってやったからちゃんと食えよ！」

「おう！美味しく食べるよ。」

そう言って屋台を離れた。マックイーンとテイオーはキタちゃん和ダイヤちゃんと遊ぶようなので空気を読んで離れた。

その後もオグリと夏祭りを楽しんだ。

少しだけ時間は流れて

「オグリ今日が夏合宿の最終日だ。悔いが残らないようしっかりトレーニングするぞ。」
「今日もよろしく頼む。」

夕方

「オグリトレーニングお疲れ様。」

「トレーナー今日で合宿が終わるんだな……」

「少しさみしい気持ちになるな……」

「オグリ君はこの夏合宿とても強くなれた。マイルチャンピオンシップも問題ないはず

だ。それでも少しきみしいけどな。」

「オグリ実は合宿最終日にするイベントがあるんだが参加するか？」

「……どんなイベントなんだ？」

「肝試しだよ。少し前から生徒会と手伝いたいって子を集めて開いて訪れた生徒を怖がらせるイベントさ。」

「トレーナーはどっちで参加するんだ？」

「おれはおぼけだ白塗りになって白装束で化けて出るやつだ。」

「トレーナー私もちようど衣装もあるしタマも衣装があるから私も怖がらせる方で参加しよう。」

いきなり巻き込まれるタマモクロスだが大丈夫なんだろうか？

合宿所近くの森

集まったウマ娘やトレーナーも各々考える怖がらせる服装をしている。

「トレーナー君今年も参加してくれてありがとう。」

「生徒の思い出を作るのもトレーナーであり、教師の仕事でもあるからな。」

「ところでルドルフどうして乃河くんは七色に発行しているんだ。」

「すまない、ここに来たときには既に光っていたんだ。私にもわからない。」

ゲーミング同期「正しくは1680万色だそうですね。」

「とりあえずそれで怖がる人間はいないから受付で明かりになってくれ。」

「あとオグリにタマそれは怖がらせる衣装じゃないだろ、ハロウィンの衣装だろ！」

オグリは恐らくドラキュラの仮装(マント)、タマはゴースト衣装(萌え袖)こんなもんみたら恐怖心が引つ込むわ！

「でもトレーナーおぼけの服装だぞ。」

「急に参加が決まったからウチもこれしかないんや。」

「ルドルフ洋風肝試しでも癒やしポイントにされそうだぞこれは」

「トレーナー君それは大丈夫だ、二人には受付係をしてみらう。」

「なるほど。可愛いから人は呼べるな。」

「それとウララちゃんも白装束かい。」

「ワタシはこの懐中電灯で驚かすんだよ〜」

「なるほどシンプルだが効果的だね」

「最後に回したがルドルフとても怖いTシャツだな、殆どのウマ娘がいきなりみたらシヨックのあまり気絶すると思うからでないでくれ。」

さつきからずつと頭を抱えていたエアグルーヴとナリタブライアンが顔を上げた。

ルドルフのTシャツは文字だけのやつで『皇帝を肯定する行程』と書かれている。見

た生徒の会長の威厳は爆裂四散するだろう。

「……？トレナー君普通のTシャツだよ。」

「この空間で白の服に文字は怖すぎる『大嘘』それに指揮する人間が必要だからドルフはあまり出ないほうがいい。そのほうがみんなの役に立つしな。」

「わかった、トレナー君の指示に従おう。」

エアグループとナリタブライアンと無言でハイタッチした、始めて心が通じ合った気がする。

そしてその他ウマ娘ちゃんを怖がらせるのは不本意ですがこれもウマ娘ちゃんたちのためといってアグネスデジタルや貞子の衣装で駆けつけたマルゼンスキーなどがある。

それぞれの配置につく前におれは顔の部分を白く塗らないといけない。青白くすることで恐怖感を演出するつもりだ。

というわけでウララちゃんに塗ってもらったが白くなりすぎた。

アレだ、コウメ太夫だな。暗闇でコウメ太夫がどれほど怖いかはわからないが行くしかない。

全員で情報を共有できるようにブルートウースイヤホンを装備している。

さてタマモクロスとオグリの様子は

ウマ娘A 「タマ先輩かわい〜」

ウマ娘B 「タマ先輩一緒に写真取らせてください！」

どうやら最初はよく知らない子のようだな、やはりタマモクロスは怖がらせ要員にはできないようだな。

「タマ大人気だな。」

「オグリ先輩もカッコよくてかわいい〜」

「オグリ先輩も一緒に写真撮りましょ〜」

「ウチラは観光スポットやないんやから早く森に行き〜」

遠回しに促したな、恥ずかしさも相まって強気に出れないようだな。

「最初の二組がいった。」

小声でオグリが言っている。

そういえば乃河くんガン無視されてたな。あの光り方だとイヤでも目に入ると思うんだが、ヤバそうなものには関わらないトレセン学園の教育が行き届いているな。

「バァー!!」

「キヤーー!!??」

ウララちゃんとかアグネスデジタルの不意打ちが決まったな、もうこれだけで怖いだろう。

走り回ったところでナリタバライアンのこんにやくだ。

くぐもった叫びが聞こえてくる。

なおも逃げ惑う生徒達。

井戸から這い出る貞子。

ちよつと違うが恐怖で逃げていく。

いきなり明かりをつけて動き回るおばけ提灯。

ここまで来ると何が起きてても怖い。

そして薙刀を持って彷徨うグラスワンダー。

：ちよつと待てスプラッターホラーがいたぞ。

しかも見える位置にいたやばすぎる。

固定回線「ルドルフ、薙刀を持っているグラスワンダーが見えたがどう思う。」

「ああ、そのことか、実はエルコンドルパサーとグラスワンダーにも協力を依頼していた

んだ。張り切っていたがそんなものを用意していたんだね。」

「別にヴァイオレンスな展開になる訳じゃないんだな」

「トレーナー君そろそろ君の出番の様だ、しつかりキメてくれ。」

「その、トレーナー今回の子は肝が強かったんだ。」

「俺以外にはダツシユで逃げてたけどな。」

「最後にコウメ太夫が出てきたけど何だったんだろう。と言っていたが……」

「忘れてくれ。」

「トレーナー今度はテイオーとマヤノトップガンだ」

作戦を変えよう。普通に出てきてもコウメ太夫だからあまり怖くないだろう。

「ウワーー!？」

「マヤ わかつちやった」

だんだんテイオーが怖がらなくなってしまった。

私は全力で怖がらせないといけない。

ここで私の特技を説明しよう。私は後ろ向きで100mを15秒台で走れる、さらに首と肩の関節が柔らかい。これを使い。

目をギンギンにして全力で見上げるようにして後ろを向いて腕は逆手で超スピードで追いかける。

「ギャアー!!?」

「アイコピー?」

「トレーナー、テイオーが涙目ですごいスピードで逃げて行って、それにマヤノトップガンが笑顔でついていった。」

「つまり大成功だなオグリ!」

「トレーナーその調子で頼む。」

任せてくれ、と口に出さずとも伝わるだろう。

その後は順調に進むので見どころだけ見せよう。

一流のトレーナー「キング」

一流のウマ娘「私に抱きつく権利をあげるわ」

「感謝しなさい。」

赤ちゃん「ク、クリーク怖くないのか？」

ママ「はい、みくんな私の赤ちゃんだから怖くありません。」

ガラガラとおしやぶりとよだれかけを持ったクリークが赤ちゃんを探している、ナリタタイシンと鏡君が犠牲になった。

W「お^ッば^ッけ^ッこ^ッわ^ッい^ッよ^ッー^ッ」

蹴られギャル「チケゾーさんアタシも怖いよー！」

突如現れた徘徊型エネミーゴールドシツプ、果たしてその目的は!?

「ジョーダン！一日一回の蹴りに来たぜ！」

ロジカルウマ娘「おばけなんて全然ロジカルじゃねーし、そんなもん信じねーし。」ガクガクブルブル

不憫巨峰「救いはないのですかー」

一通り終わったあと

グラスワンダーは徘徊型で変なタイミングでエンカウントして怖がらせる役目でエ
ルコンドルパサーはグラスワンダーを怒らせて逃げているようだな。

さつきめちやくちや怖がせられたから近づいてきたらテイオーと同じように怖がら
せよう。

その後私は薙刀を振り回すグラスワンダーから10分以上逃げることになった。模
造刀であると信じた。

無人島と鍋

皆さんどうも木原正樹トレーナーの同期の乃河悠一です。

突然ですが僕は無人島にきています。新人の炎鶴祐也さん、炎鶴くんと木原さんと僕で無人島ツアーに参加しました。合宿が終わってすぐに炎鶴くんに誘われたのできました。僕が生でヘビを食べていたら船が出ていつてしまいました。

日帰りの予定だったので食料などはありません、ヘビは食べれるところは僕が全て食べました。なので本当に食料はありません確保しなければいけません。それでは木原さんが状況確認をするので皆で話しましょう。

木原「もうわかっていと思うが乃河くんにエンちゃん我々は現在危機的状況に陥っている。」

「とりあえずゴールを確認しよう。このツアーは毎月5日に行われている。今日も5日なので一月生き延びることが出来たらゴールだ。」

乃河「私はタキオンのおかげで2週間は食事を取らなくても大丈夫です」

「君は本当に人間なのか？」

「ええ、代わりに16時間の睡眠が必要になる省エネモードにならないといけない」

が。」

炎鶴 「先輩俺のせいでこんなことになってしまつてすいません。」

「大の大人がこんなについて誰も確認してないのが一番悪いからこれは仕方ない。」

炎鶴くんの考え

先輩たちこんな時でも冷静で凄いな、この人たちといれば一月大丈夫な気がしてくる。頑張つて生き延びて素敵なウマ娘を見つけて素敵なトレーナーライフを送るぞー

「ところで乃河くん、尻が光っているのは何か理由があるのかい？」

ほの明るく緑色に発光している。

「省エネモードだと自動的に光るようになります。」

「葉無しでも光るのか（困惑）」

「それでは僕は一旦睡眠に入ります。夜の見張りなどは僕がしますので探索をお願いします。」

乃河くんの恐るべき頭脳を頼ろうと思つたが明日の朝の探索まで活躍はお預けだな。エンちゃんの方は体力はすごいあるから頼りになるし明るいうちに探索しよう。

森の中

ヤシの木などがあるような島ではないので食料を集めるのは大変だろう。

海に出るのもいいが火をつけるのに三十分ほどかかってそれなりの暗さになってしまった。焚き火が出来たから拠点はそこで頑張ろう。

遭難まで入れば間違いなく死ぬので海の探索は後回しだ。

炎鶴「先輩この島毒を持った動物とかいると思いますか？」

「流石に日本だからいないと思いたいが山には普通に毒ヘビが出るから、ここにおいてもおかしくはないから気をつけよう。」

「乃河さんさつきヘビを生のまま食べてましたけど大丈夫なんですか？」

「よくわからんがほぼミュータントだから大丈夫だろう。」

「適当に話をしながら探索を続けたが滝などもあり生物もそれなりにいるようだが今日は捕まえることができなかった。」

焚き火の側

「とりあえず無人島で無言でいると気が狂うらしいから適当に話をしよう。」

乃河くんが全裸で尻を振っている。

「先輩もしかして乃河さんはもう手遅れなんですか？」

「わからん、もうさつきから導入とGMとPCが適当なクトゥルフ神話TRPGを体験

しているような気分だ。」

「その場合、ずっとファンブルが出てますね。」

全裸で尻を振っている男がそんなことを言う。

「多分君はSanityでファンブルが出たんだろう。神話生物でも見たのかい？」

「お尻でSOSと書いています。目に止まった船が助けに来てくれるかもしれないません。」

「俺が漁師で君をみたら怪物か既に手遅れだと思って見て見ぬ振りをするよ。むしろ見た人間のSAN値が削れるよ。」

「先輩やっぱり海の探索もしましょうよ。」

「海が荒れてきているし、暗闇で離れ離れになったらそれぞれ危険だ、お腹が減っているなら今日は俺のカロリーメイトを分けてあげるからそれで我慢してくれ」

「先輩……ありがとうございます!!」

「しかし、オグリが心配だなあ、でもごはんは食べているだろうから問題ないか、ルドルフは捜査願とか出してきてくれるだろうか。」

「タキオンにはここに来る前に弁当を作っていますし、自分でご飯を作れる子なので大丈夫でしょう。」

「先輩たちは担当ウマ娘がいていいですねえ」

「いや、お前は危機感をもって、冷静に考えたら担当がないトレーナーが無人島ツアーに参加するな。クビになるぞ。」

「それがいろんな子にアプローチはしたんですけどうまく行かないですよ。才能のありそうな子はもう一流トレーナーがついて居ますし。」

「炎鶴くんこの経験がいい方向に働いてくれますよ。」

「そうですね、こうなってしまうたらこれも経験だと思つて頑張るしかないですね。」

「先輩最後に担当ができたら気をつけたいことつてありますか?」

「ケガをさせないことだな、彼女たちはあくまで人間だそれに俺は何人も天才と呼ばれた奴がケガをして駄目になったのを見ている。」

「俺の兄貴は相撲がめっちゃくちゃ強かったんだ、小学生の時、練習はあまり相撲のことを知らない人に教えてもらつて全国大会に出て記録を残すくらいには才能の塊だった。」

「兄貴は遠くの名門校の人がわざわざわざわざ直接家に来てスカウトされたよ、中学の時にはN
○Kで特集が組まれたよ。当時久しぶりの日本人横綱になると言われるほど期待されてたよ。」

「相撲の大会ではバナナが差し入れとして出されるんだが誰も食わない、でも兄貴は食つて『バナナパワー!!』と言つて試合で力を出してたよ。」

「そんな兄貴が高校の時事故で大怪我をしたんだ、首の粉碎骨折だ右半身不随になったよ。誰も怪我には勝てない、そうなって相撲はできなくなってしまった。」

「皆兄貴のことを忘れてしまったよ、ウマ娘たちも怪我をさせるわけにはいけないんだ、彼女たちは皆の夢を背負っている、人々の記憶に残って誰かの夢や憧れになるのを彼女たちは願っている。」

「まあ、兄貴は三日後には左手でカップ麺を食って一月後には立ちあがって歩いて看護師の腰を抜かしたよ。最近は右手でパチンコ打ってるよ。」

「だから彼女たちの幸せと夢をかなえることを願うなら最善の幸せは怪我をさせず彼女たちが進みたい道を歩ませることだ。」

「だから先輩は担当がしたいことをさせるんですか。」

「長い話ですまなかったな、怪我の話になると暗くなるからあまり関係ない話もしたよ。」

「明日は本格的に動かないといけないから今日は早く寝よう。それとさっきの話は人と言ふなよ、気にするな君の信じるやり方で担当と歩むといい。」

次の日の朝

地獄のような目覚めだった。風が吹き荒れ、焚き火を簡単にかき消す大雨、波により砂浜の近くにはいられなくなりました。

「なんで乃河くんはこの天気で眠っていられるんだ。」

「省エネモードだからじゃないですか?」

「やはりもう人間ではないのかもしれない。」

乃河くんを背負って移動しているがやはりそれなりに重い。まあ俺より身長が高いからそんなもんだろう、むしろ細身で助かった、エンちゃんはガツシリしているから後で運んでもらおう。

「そういえば先輩台風が近づいてた筈でしたからそれが原因だと思います。」

「それでも仕方ないから食えそうなものを探そう。」

探した結果毒があるかもわからないキノコしか見つからなかった。

夜になった。

「雨と風で結局あまり探索できなかったな、波もあるし今日は本当に最悪の日だったな。」

「キノコを見ましたが、私ができる範囲でも毒キノコしかありませんでした。わからないものもありますが食べないほうがいいと思います。」

「結局今日は何もできませんでしたね。」

「そう悲観するな、正直いつてかなりのピンチだが明日更に探索して食べ物を見つけれ

ぞ。」

「それじゃあ、今日も話をするぞ、実はトレセン学園のトレーナーの若手の離職率が高いのは知っているか？」

「えっ!?!トレセン学園って成功すれば給料もかなりいいって聞いてますけどそれなのに退職者が多いんですか。」

「そういえば私達の同期も結構いたんですが今では半分以下に減ってますね。」

「それくらい成功するのが大変なんですね。」

「いや、それが違うんだ、担当ウマ娘がG1勝利していたり大成功と言われているトレーナーほど引退しているんだ。」

「えっ!?!なんでですか？」

「退職後何をするかはあまり知らないが誰もが担当の卒業や退学で退職しているんだ。」

「テレビで引退したウマ娘の『結婚したウマ娘は本当に幸せなのか』っていう特集されてたんだよ。一般男性って言ってたけどどう見ても先輩とか同期の元トレーナーなんだよ。」

「だから女性の退職率はあまり高くないんだ。」

「そういえば今度来る理事長代理はミソジドクシンオーと呼ばれてましたね。」

「ひどいアダ名だな、まあトレーナー同士で結婚するやつもいるしな、鏡くんは担当がマ

「マだし、同期の女の子と仲良くしてるしな。」

「えっ!? アイツそんなことになってるんですか。」

「それにしてもすごい驚くな、まあ、ここまでは前フリなんだがな、」

「理事長に頼まれてトレセン学園の夜の見回りをしていた時に予定ノートを拾ったんだ。名前も書いてないし中身も何も書いてないんだ。」

「白紙のノートですか?」

「もしかして何か仕掛けがあつたんですか?」

「ああ、二重の仕掛けだ、仕掛けに気づいた俺はまずブラックライトで照らしたんだが、ドイツ語で書いてあつた、全く読めないからグーグルで翻訳して読んでみると内容は幸せなカップルの予定みたいなのが書いてあつたよ。」

「十年先のことまで書いてあつたよ、そして数字が割り振られてあつて、俺が見たやつは最初のものであつた、7つはあるようだ、後半の方には子供の予定まで書いてあつたよ。」

「幸せ家族計画ノートでもあつたようだな、次の日の朝俺のトレーナー室がノックされたよ。エイシンフラッシュがノートの中身をみたか聞いてきたよ、当然、白紙のノートだろ、何か書いてあつたのか? ってとぼけたよ。」

「担当ウマ娘がトレーナーをロックオンしている可能性もある訳だな。予定では同期が三年後にはまた一人確実に減るだろう。まあ、俺とオグリにかぎってそれはないけど

な。」

「私とタキオンもないですね。」

「ルドルフさんと付き合ってるって聞いたんですが、あと好きなタイプはウララさんやライスさんだと聞いてます。」

「ハハハ、誰がそんなことを言ってるんだ、俺がそんなわけないだろう、あと誰だ俺が口リコンだと噂を流している畜生は、その話だと俺がルドルフで妥協した外道じゃないか。」

「お前あそこまで完璧な女の子はいないぞ、面白いし賢いししかも料理もうまいお嫁さんとしては最高やぞ、プレッシャーがすごいけどな。」

「やっぱり付き合ってるんですか?」

「お前それ以上トレセン学園で絶対言うなよ、付き合っていないし今はオグリの倒すべき壁だ。」

「あと俺たちトレーナーは退職金が貰えるんだが3年でも俺たちは500万貰えるがもしかしてトレセン学園は結婚相談所になっているのかもしれない。」

.....

「この話はこれ以上するとまずいと思うので今日はもう寝ましょう。」

「そうだな、それじゃあおやすみなさい。」

次の日の朝

今日も変わらず、まずは森の探索だ。乃河くんは今日は起きている、くだものがない植物を発見する。

「乃河くん、バナナだと思うが食べれると思うか?」

「先輩早く食べましょうよ。毒なんかないと思いますよ。」

「パッチテストをする時間はありませんし、毒耐性がある私が食べます。」

「毒耐性あるのか。」

「ええ、他にもマヒ耐性と石化耐性があります。」

そう言つて乃河君がバナナを食べた、苦しみだした、

「タキオンそんなにそつてもその高さのリンボーは無理ですよ。」

「正気に戻れ!」

乃河くんにビンタを食らわした。

「タキオンこれは私の愛です!」

「タキオン逃げたのですか、貴方がなぜここに自力で脱出を……」

腹パンを食らつた、全力でぶち込んだ様だ、かなり苦しい、みぞおちではないのが幸いだらう。

すかさず俺も無言で腹パンを叩き込む。

「俺はタキオンではない」

流石にダウンする。

「流石乃河くん、錯乱していてもボケを入れてくるとは」

「今のは一体何だったんですか？」

「決闘者のギャグみたいなものだ、挨拶は『おい、デュエルしろよ』だ。」

「さつきはすいませんでした。」

乃河くんが既に起き上がっている。

「どんな状態になったんだ？」

「幻覚を見たあとテンションが上がりました、幻覚耐性はありませんでした、本当にすいませんでした。」

「気にするな乃河くん、テストした俺も悪いしな。ボディーはだいじょうぶか？」

「今は大丈夫です。」

「で、味は？」

「最高でした。」

「そうか。」

そうやって話したあと木原先輩と乃河先輩がバナナを食べた。

木原先輩が突如全裸にネクタイの服装になり『バナナパワー!!』と叫んだ。

乃河先輩は『タキオン、貴方のモルモットはここですよ』といつて彷徨いだした。僕を見つけるとタキオン！と叫んで追いかけてきます。

木原先輩はただひたすらバナナを食べている。

バナナを見つめてしまい、しばらく格闘した、体力が持たない、最後の体力を使って先輩たちが近寄らない砂浜の方に逃げよう……

無人島に取り残されてから3日がたったが僕以外の二人が脱落してしまった、僕ももうすぐ脱落するだろう。

携帯の電波も相変わらず圏外のままだ。

(もう一步も動けない……)

うまくいかないからって気分転換に無人島ツアーに参加するんじゃないやなかった。せめて、帰りの連絡船の時間くらい調べておけばよかった。

後悔先に立たず。来るかもしれないなかった、ウマ娘との輝かしい日々を惜しみながら、ゆつくりと目を閉じる……。

「——?」

ふと、誰かの声が聞こえた。一体どこの誰なのか、よくわからないが——とても温かい、優しい声色だ。

「よくわかんないけど大変だったんだね。もう大丈夫だよ。はい。お水どーぞ☆」
体を起こされ、コップが口元へ運ばれる。全てを包み込む大きな体。与えられる安心感。直感的に感じる。彼女はきつと——

(女神だ……)

水を飲み干すと、今度は温かい味噌汁を差し出された。夢中になってすすむうち、朦朧としていた意識もはつきりし始め——

よく見ると、『女神』はヒシアケボノだった。

女神ヒシアケボノ「あっはは、いい飲みっぷりだね。お味噌汁作ってきてよかったです。」

「それにしても、びっくりしたな。学園のトレーナーさんが海岸に倒れてるんだもん。」

「さつき連絡船に無線で連絡したから、もう大丈夫だよ。一緒に学園まで帰ろうね☆」
ほのぼのと笑う彼女のことをつい最近見たことがあった。そう、デビュー前のウマ娘が中心となって出走する『種目別競技大会』だ。

「皆に報告があります。実はあたし、今朝——身長が180cmを超えました！」
「バーン」

（おおく……！）

「記念すべき日だもん、今日はがんばるよ〜っ！」

実況「各ウマ娘、ゲート入りが完了しました。種目別競技大会芝1200m——スタートです！」

中堅トレーナーA「ヒシアケボノ、どんどん成長していくなあ、今やトレセン学園で一番大きいんじゃないか？」

中堅トレーナーB「そうかもしれないわね。体格の活かし方もうまいし……。狙っているトレーナーも多そうだわ。」

自称中堅トレーナーK「デカすぎてデカスギアケボノだな。」

「とああ〜っ！」

「一着はヒシアケボノ！大差をつけて悠々とゴールしました！」

豪快な伸び脚で、ド派手にゴールへ飛び込む姿は印象的だった。しかし、そんな彼女がなぜ無人島に……？

「昆布拾いに来てたんだ〜。漁業組合のおじちゃんと仲良しでね、ちよつとなら持つていっていいよって言われてるの〜。」

「この昆布はねえ、ミネラルたっぷりのダシがいっぱいとれてとーつてもボーノなんだよ。」

「そうだ！お腹、すいてるもんね。せつかくだから、お料理作ろつか！」

「ここで作れるのか!？」

「うん☆ お外で使えるお料理道具持ってきてるからね♪ そういえば山菜もあつたっけ？ そうだ、海鮮鍋にしよつか。」

「お魚と昆布のダシたっぷりのほかほか海鮮鍋!……考えるだけでお腹がすいてきちゃった〜！」

「てなわけで、まずは火を起こそ〜☆」

ヒシアケボノは先輩たちより慣れた手つきで調理器具を設置して火を起こし——

「あちち！ あはは、やつぱり火起こしはちよつと難しいな。——あ、カニ発見！」

いつの間に獲ってきたのか、大きな魚をあつという間にさばいて——

「ふう〜、いい匂い〜！ シメにおうどん入れたくなっちゃうねっ！」

瞬く間に、美味しそうな海鮮鍋を作ってくれた。

「はい、どうぞ☆ きつととってもボーノだよ。」

「美味しい！」

「あはは、良かった〜♪」

夢中でかき込み、飲み下す。ふと顔を上げると、幸せそうな顔でこちらを見ているヒシアケボノと目が合った。

「ボーン？」 質問

「ボーン！」 100点の解答

「えへへ……おいしそうにご飯食べてもらおうのやっぱ嬉しいね〜！あたし、そういう人に担当してほしいって思ってるんだ〜。」

「でもこれ、スカウトしてくれた人に言うと、『よくわかんない』って言われちゃうの。」
「だから、なかなか担当トレーナーさんが決まらなくて……。」

「……あつ！ そーだ！ あなたはどうかなく？ あたしのトレーナーさんになってくれない!？」

「え!？」

「トレーナーさんになってくれたら、そうだなあ、毎日お味噌汁、作りに行くよ〜！」 R
TA新記録

お味噌汁は断るとして——豪快な走り姿は印象的だったし、彼女の不思議な雰囲気はどこか惹かれるものがある。

(今後の動向が気になる。)

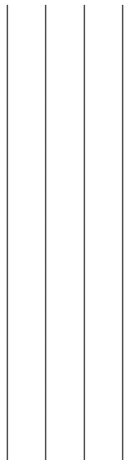
そんな思いがよぎり、首を縦に振った。

「わあ！ いいの！ やった〜♪」

「えへへ、今日ここに来てよかったなあ。これからよろしくね、トレーナーさん！」

「そうだ、今日のお夕飯は記念にトレーナーさんの好きなご飯を作るよ！ なにがいい？ なにがいい〜？」

「はしゃぐ彼女についつい好物を告げてしまい……そんなこんなでヒシアケボノとの二人三脚の日々が、急に幕を開けたのだった。



「乃河くん、コンビができると思って遠くから見守ってたけど俺達のこと完璧に忘れて帰っていったな……。」

「木原さんの言うとおり確かにすごい勢いで人生のパートナーにもなっていましたね。」

「それもそうだけど帰りどうする？」

「帰ったら思い出してくれると思いますのでもう少し二人で頑張りましょう。」

「そうだな。バナナのおかげでテンションあがって明るい気持ちになったしもうちよつと頑張ろう。」

ということとで海に魚を獲りに行つて森を探索した。

魚は3匹も取れた全部乃河くんが採つたけど

森に探索すると滝があり、滝行をするカワイイウマ娘がいた。

有名うますたグラマー……あつ！ お兄ちゃん探したんだよ！ こんなところにいるんだ！」

乃河くんが猛ダツシユで逃げ出した。

俺も追いかける。

「乃河くんどうして逃げるんだ？」

「初対面でお兄ちゃんと呼んでくる子がまともな訳ありませんよ。」

タキオンの担当なのに!? そう思ったが口には出さなかつた。

「つ！乃河くんそつちは海だぞ！」

「大丈夫です。3人でしたから言えませんでした。が僕は一人なら運んで三日間は泳げます。」

「なるほど三日も泳げば流石に陸地にもつく距離だしな。」

「地理はこちらにあるんですが追いかけてきてますので飛び込みましょう！」
「お兄ちゃん！ どうして逃げるの!?!」

乃河くんもどうしてあそこまで健気にしているのにガン無視してるんだ？

「木原さん騙されてはいけません、飛び込みますよ！」

乃河くんがキレイなフォームで飛び込む。俺もそれに続く。

流石に海まで追いかけて来なかった。

そこから先はたいへんだったがダイジェストでお送りする。

「バカな！何だこの潮の流れは！」

「そういえば昨日まで台風でしたね。」

「もしかして最悪のタイミングで出てしまったんじゃないのか。」

「もう帰れる距離でもないですし進むしかありませんね。」

「乃河くん俺が力尽きかけたら頼むぞ。」

「木原さん、大変です。足が吊りました。」

「なんでそんな冷静に緊急事態の報告ができるんだ!？」

「ヤバすぎて冷静になったのかもしれない、このままだと死にます。」

「ちくしょう! 背負っていくよ!」

「木原さんの背中大きいですね♡」

「振り落とすぞ。」

「すいません、ふざけてラブコメで男の子におんぶして貰ったときにヒロインが言いそ
うなセリフを言っつてしまいました。」

「木原さん大変です。巨大なサメがいました。」

「少しトラウマになつてるから余り言うならガチで捨てるぞ。」

「いえ、違うんです、後ろの方にホントにいます。足の吊りも治つたのでおろして確認し
てください。」

後ろを確認する、8 mほどのサメがいる

「：ガチやんけ、本家ジョーズのサイズだな。」

「ジョブですか？」

「それは前俺がやった、とりあえず迂回とかして避けながら進もう。」

「いえ、こちらを追いかけて来ます、幸いあまり速くはないですが。」

「乃河くん時計が発動すると思う？」

「タキオンがこれで競技生活辞めるとは思わないので発動しないと思います。」

「乃河くん水中戦の心得はあるかい？ 俺はなんとかする。」

「私は身体能力でいきます。」

「よし！ 追い払えたな。しかし例の薬はないのになぜ現れたんだ？」

「世界の法則かもしれない、どうやっても我々の前には2回巨大ザメが現れるというルールがあるのかもしれない。」

「わからんが、世界のせいにするな一回目はタキオンの薬のせいだからな。」

「乃河くん船が見えたぞ！でかい豪華客船だ！」

「助けてもらいましよう。手を降れば気づいてくれるはずですよ。」

「……近づくと波がかなりすごいんだがかなりまずくないか気づいてないし、」

「このままだと死んでしまいますね。」

「人の命をなんだと思ってるんだ。全力で横に避けよう。」

そんなことがあつて理事長がポケットマネーで手配していた、船に発見され回収された。見捨てられてないようだ。

オグリにこの話をするスタミナと根性が鍛えられた気がする。

さて理事長が海外出張に行つて開催される、予定のアオハル杯が理事長代理によって阻止されようとしているのでそれを止める為に説得に行かないとな。

圧力の為にルドルフも連れて行こう。

皇帝と決闘（デュエル）と野球

ランニングデュエルそれはウマ娘の世界で進化した決闘^{デュエル}。そこに命を賭ける伝説のウマ娘を人々は5H、Sと読んだ

「……呼びません」

「えっ……」

「呼びません!!」

「オヨヨ〜」

決闘^{デュエル}ターフ

このレース場でいま大会の準決勝が始まろうとしている。

ライフポイントはおたがい8000でスタートしてゼロにした方が勝利する。

「行くぞ! ルドルフ、俺のターン! 手札よりフィールド魔法ウマびよい伝説を発動する!」

「この効果により俺のウマ娘の攻守は500upする、そして発動時の効果処理としてレベル4以下のウマ娘、俺はハルウララを手札に加える。」

「そしてミホノブルボンを通常召喚、この効果により手札にキングヘイローを加える。キングの効果により手札のハルウララと特殊召喚する、ハルウララの特異召喚効果により一枚ドロウする、そして3人のウマ娘でオーバーレイ！現れよ6枠9番タイキシヤトル、守備表示で召喚だ。」

ハルウララがウツララ〜といいながらカードを持つてくる。

タイキシヤトル ランク4攻撃力2000守備力2100+5000=2600

「オーバーレイユニットを1つ取り除き相手のライフに1500ポイントのダメージを与える！ただしこの効果は1ターンに一度までだ、俺は手札を2枚伏せてターンエンドだ。」

タイキシヤトルがルドルフに銃を撃つ、ルドルフは動じない。

ルドルフ ライフポイント L P 6500

「トレーナー君、私はこのタイミニングで手札のエアグルーヴの効果を発動する、私がダメージを受けたエンドフェイズに私のカードがフィールドに存在しない場合発動できる、エアグルーヴを特殊召喚しこのターン私が受けた最も大きいダメージを相手に与える。この場合1500ポイントのダメージを受けてもらう。」

エアグルーヴ レベル8攻撃力2500守備力1000

トレーナー ライフポイント L P 6500

まずいな、それなりに良い手札のようだ。

「ドロロー 手札の永続魔法トレーナー契約書を発動、デッキからウマ娘を手札に加える、ナリタブライアンを手札に加え、そのまま効果で特殊召喚する、このカードは私のフィールドにレベル8以上のウマ娘が存在する場合、特殊召喚出来る。」

ナリタブライアン レベル9 攻撃力2800 守備力1500

「そして私の墓地にウマ娘が存在せず私のフィールドにレベル8以上のウマ娘が2体存在する、手札よりシンボリルドルフを特殊召喚する。」

シンボリルドルフ レベル10 攻撃力3000 守備力3000

「更に2枚の永続魔法トレーナー白書とトレーナーマニユアルを発動、この2枚の効果により私のウマ娘はフィールドを離れるとき代わりにデッキの下にいき、1ターンに一度破壊を無効にすることができる。」

ルドルフはどうやら最初からフルスロットルのようだな

「バトルフェイズに移行し、ナリタブライアンで攻撃する、ナリタブライアンの攻撃時私には500ポイントのライフを払わなければいけない。」

ルドルフライフ6000

「シャドウブレイク!」

タイキシャトルがオーノー!とって破壊される。

「ナリタブライアンの効果により破壊されたウマ娘の攻撃力分のダメージをトレーナー君に与える。」

トレーナー ライフ4500

「だがタイキシヤトルが破壊されたとき素材に入っていたウマ娘を特殊召喚できる。俺はウララちゃんとブルボンを守備表示で特殊召喚する。デツキからスズカを手札に加え、一枚ドロウする。」

「ナリタブライアンは相手フィールドのウマ娘全てに攻撃できる、ハルウララに攻撃する。」 ルドルフLP5500

ウララちゃんが驚いた表情を見せたあと破壊される。

「そしてトレーナー君に500ポイントのダメージを与える。」

LP4000

「そしてそのままミホノブルボンに攻撃する。」 ルドルフLP5000

ミホノブルボンがそのまま破壊される。

「トレーナー君に1500ポイントのダメージを与える。」

LP2500

「このときシンボリルドルフの効果が発動する、ウマ娘がバトルによって3体以上破壊されたとき攻撃力を3倍にし、守備2倍貫通効果を得る。そして攻撃できる場合このモ

ンスターは攻撃しなければならない。」

シンボリドルフ 攻撃力90000

「そしてエアグルーヴの攻撃力は相手とのライフポイントの差分上昇する、よって2500ポイントアップする。」

エアグルーヴ攻撃力50000

「エアグルーヴの攻撃！」

ブレイズ・オブ・プライド！」

「リバースカードオープン！ トラップ発動！ レインボーライフ！ 俺は手札のライフシャワーを墓地に送り発動し、俺がこのターン受けるダメージを回復に置き換える。」

ライフ7500

「攻撃を利用するとは流石だね、私の攻撃は強制だから更に回復させてしまうようだ、だがエアグルーヴは相手とのライフの差だけ攻撃力が上がるので更にupする。」

LP16500

エアグルーヴ 攻撃力140000

「私はカードを一枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン ドロー ルドルフこのまま決めさせてもらう。俺は手札よりリターンオブシスター炊きたて復活を発動する！ コストとして手札のサクラバクシンオーを捨てて発動する。この効果により墓地のライスシャワーを精米ブルーライスブラックドラゴンの黒竜として降臨させる！」

巨大なライスシャワーがフィールドに現れる。

『おーにーいーさーまー』

「精米の特殊能力を発動する。相手フィールドの攻守が変動している全てのモンスターの変動している数値分だけ攻撃力を上げる。そして相手フィールドのウマ娘の攻撃力は元の数値に戻る。」

「スキル発動！ クールダウン！」

シンボリドルフ攻撃力90000↓30000

エアグルーヴ攻撃力140000↓25000

ブルーライスブラックドラゴン
精米の黒竜 攻撃力17500

「更に俺のライフを15000ポイント払いスキルを発動する！ 決意の直滑走！

払ったライフ分15000ポイントupする！」

ブルーライスブラックドラゴン
精米の黒竜 攻撃力32500

「そしてライスは直接攻撃ができる。バトルだ！ 切り裂け！

ブルーローズチェイサー！」

「リバースカードオープン、トラップ発動。トレーナー解雇。この効果によりフィールドのトレーナー永続魔法を全て墓地に送り一枚につきライフを1000回復できる。今回は3枚で3000回復する。更に送った枚数分のカード3枚をドローする。」ライフ8000

「それだけでは防げないぜ!」

「そして墓地に送られた3枚の効果を発動する。私がこのターン受けるダメージは回復に変換され、このターン私のウマ娘は効果・戦闘で破壊されない、そしてこのターンのエンドフェイズに攻撃を行ったウマ娘はすべて除外される。」ライフ40500
「俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ。」

ライフが除外される

「ふふ、トレーナー君絶体絶命の状況だね、トレセン学園の未来を、チームファースト打倒を私達チーム皇帝を肯定する行程に託す気になったかい?」

なんて名前だ。

「悪いがトレセン学園は生徒の自主性を尊重する学校だが、これは内輪もめでもある、俺達教師やトレーナーが解決しないと行けないんだ。じゃないと生徒に示しが見つからないからな。」

「君はこういう時頑固だからこうして決闘で決めることにしたんだ、これ以上の会話は

無駄のようだね。」

「ドロロー そして魔法カード皇帝の烈風を発動する。この効果により相手のマジックトラップを全て破壊し私は3000ポイント回復する。そのカードを破壊して安全にトドメを刺すでしょう。」

「実はこのカードたちは防御カードじゃない。だからこのタイミングで発動させてもらう。」

「リバースカードオープン！逃げ切りfallin, Love！そしてもう一枚のカード活路への希望を発動する！」

「効果の逆順処理によって活路への希望から発動する。ライフを1000ポイント支払い『残り500』俺とルドルフのライフ差2000につきカードを一枚ドロローできる。」
「俺とルドルフのライフ差は40000よってカードを二十枚ドロローする。」

「これで防ぎきるためのカードを手札に用意して凌ぐつもりのようなだね、でも皇帝の烈風の効果により表側のカードだけを破壊した場合代わりに相手に3000ポイントのダメージが入る。そして君のデッキにチェーン処理中にダメージをゼロにするカードはない。」

「そのとおりだ。だがもう一枚が逆転を呼び寄せる！」

「俺はもう一枚のカード逃げ切りfallin, Loveの効果により手札のマルゼン

スキー、ミホノブルボン、サイレンススズカ、スマートファルコ、アイネスフウジン
のカードから究極のウマ娘グループ逃げ切りシスターズを完成させる！」

「このカードがフィールドにいる場合俺はゲームに勝利する！当然俺が受けるダメージ
は発生せずこのまま相手を変えてデュエルを継続する。怒りの業火ファルコーストフ
レイム！」

「トレーナー君勝負は最後まで分からないことをまた君に教えられたようだ。」

「カイチヨくあとはボクに任せて！キタちゃんの出番がなくなるけど三人抜きしちゃう
もんねー！」

「頑張れテイオーさん！」

「フィールドと手札をそのまま引き継いでデュエルを再開します。」

「デュエル!!」

「トレーナー！悪いけどボクのフィールドにはカイチヨから引き継いだ三体のウマ娘
がいるからこのままあっさり勝たせてもらおうよ！」

「それができたら幸せだったのになあ！それでは本日二度目の必殺技怒りの業火ファル
コーストフレイム！」

「エッ！ウワッー!?!」

「このカードがフィールドにいる間俺は勝利し続ける。ここは既に火葬場だあ！全員仲

良く平等にウエルダンにしてくれるわ！」

「ということでキタちゃん、食らってもらうぞ！ハイ！本日3度目の大技です！皆様ご唱和ください！怒りの業火アルコールコーストフレイム！」

「キャッー！」

「ダイヤちゃんごめんね決勝で戦う約束してたのに……」

少し後

乃河「いやあチーム皇帝を肯定する行程は強敵でしたね。」

「ミストさんみたいなのを言うんじゃない。」

「トレーナー、凄い勝ち方だったぞ。このままチームファーストをやっつけて食堂のおかわり禁止政策を無くそう。」

「ここまで来てもやはり食欲か。」

タキオン「我々チーム5H，sもようやく決勝でファーストと戦う権利を手に入れる。そしてなんとしても私の研究室を返してもらおう。」

「メンバーの私利私欲が強すぎる。というかよくよく考えたらタキオンなんでお前が戦わないんだよ。俺ただの人間だからウマ娘が走っているなかバイクで走りながらデュエルしてるんだぞ。」

「我々ウマ娘が走りながらデュエルすることも十分おかしいのだが。」

オグリ「デュエルは走りながらするんだが。」

「それに僕は2回戦で壁に激突して入院したんですけど何事もなく大会は続きましたね。」

「その時は補欠メンバーのタマモクロスが活躍してなんとかなつたから問題ない」

「事故が起きてもお構いなしなのがなかなか狂ってますね。」

「このトレセンアオハルランニングデュエルグランプリを俺たちが優勝すれば解決する話だ。今回はコンボが決まったからオレ一人で大丈夫だったがこれは何度も使える戦法ではないからな。対策もされるだろうし次に備えよう。」

「木……さ………てく………い………」

「木原さんおき………ださ………」

「木原さんおきてください！」

「ウツ?!何だ俺は一体何を見ていたんだ。」

鏡くん「変な夢を見たのなら、恐らく枕代わりになっているその変なものが原因だと思います。」

腕を見てみると謎の銃と円盤がついていた。

「なんだコレは?!いや知ってるんだけどなんでデュエルディスクが俺の腕に付いてるん

だ!?!」

「手紙がありますけど説明する暇もないですから走り読みしながらついてきてください。」

「いきなり忙しいな、言葉の意味も違うがなにか余程の緊急事態だろ、ついていくよ。」

走って移動中

「鏡くんこれ誕生日プレゼントだわ、ゴールドシップがぶっ飛んだ文章でおめでどうしてくれたわ。」

「そうなんですか！誕生日おめでどうございます！」

「いや、俺の誕生日無人島で遭難している間に過ぎてるんだよ、ドラえもんと同じ日だからな。」

「あと寝ている間にデュエルディスクつけないでほしい、変な夢見るし驚くし、寝違えるし。」

「先輩、でも良くできてますよ。」

「これ市販品じゃなくて金属とかを加工して作ったやつだからそれなりに重いんだよ、外し方もわからないし」

「って先輩こんなことを話している場合じゃないです！」

「木原さん、鏡さんこんばんは。」

「あつ、お久しぶりです乃河さん。」

「乃河くんこんばんは。急いでいるから用があるなら走りながら伝えてくれ。」

「木原さん誕生日おめでとうございます。これは誕生日プレゼントのロングコートです。走ったままで大丈夫ですから来てもらいます。タキオンで人に上着を着せるのは慣れてます。」

「君も忙しいし急だな。拒否権もないし。」

そう言つて恐るべき早業で一秒にも満たない時間でロングコートを着せられた。

「なぜデュエルディスクを腕につけている人間に着せるのかは聞かないけど、この見た目は……」

「木原トレナー！ここに居たんですか、急いでいるようですから私もついていきます！」

「お前もか、もうなんでもいいから用を言ってくれ。」

「木原トレナー誕生日過ぎたじゃないですか、実はミックと一緒に用意したプレゼントがあるんです。鏡トレナーやスーパークリークさんたちと一緒に水族館に行ったのをミックはとても楽しんでくれたようで、手配してくれたのは木原トレナーですからとっておきのプレゼントを用意したんですよ！」

サンダウンタワー

ハーモニカの音♪

モブっぼいウマ娘「なにこの音楽は!？」

太陽と地平線が重なり黄昏が訪れようとしているこのときに太陽を背にセルフでBGMを吹きながら腕に謎の円盤と銃をつけたロングコートの何もかも変な男が現れた。

ビターグラッセ「……」

リトルココン「……」

モブっぼいウマ娘「……」

オグリ「トレーナー？何をしているんだ？」

「今日のラツキーアクションはデュエルだ。夕日が沈むのを合図にサンダウンデュエルをするぞ。」

「そうなのか。トレーナー丁度併走が終わったところだから一緒に帰ってそれから、デュエル？をしよう。」

「ああ、オグリそうすることにしよう。それじゃあ鏡くん、オグリが世話になったな。菊花賞で万全になったクリークを楽しみにしてるよ。」

「そのまま帰らしちゃったけどどうしよう。」

「意味不明すぎて何もできなかった。」

鏡「レース場の使用禁止なんかどうでも良くなったからなかったことにしませんか？」

ソルっぽいウマ娘「はい、私達がオグリ先輩に負けたことも事実です。それに馴れ合いだけのチームと違ってたけどそれだけじゃない怪物がいることをしれた。」

カイっぽいウマ娘「次は油断せずに倒させてもらいます。」

「ありがとう木原先輩出てくるだけですべてを解決してくれて。」

帰り道

「オグリ今日は何があっただ？」

「午前授業を受けたあと、トレーナーが今日は疲れててチームキャロットと一緒にトレーニングをして。」

「うんうん。明日からは俺もいつでもお一緒にトレーニングを見るからな。」

「ライスがココンのドリリンクをこぼしてしまつてチーム対抗でレースをすることになつて私も出たんだ。」

「おー、やっぱり実践は大切だからな、偉いぞオグリ」

「私はそれで中距離と長距離で勝てたぞ。」

「元々マイルで走ってたのにそこまでのスタミナがついたんだな、凄いで。」

「その後私はキャロッツの正式なメンバーじゃないから対抗レースのルールではこつちが一回でも勝てば勝ちなんだが、」

「でも正式なメンバーじゃないから拗れたんだな。呼ばれた理由がようやく分かったよ。」

「それでクリークの調子はどうだったんだ？」

「今日は元氣そうだったぞ。」

「それならいいんだ、あとオグリ土日は今週は野球をするからバットの素振りとかをトレーニングに入れるぞ。」

「なんで野球をするんだ？」

「二日後理事長代理に揺さぶりをかけてその後トレセン学園の方針を野球で決めるのを約束させる。」

「3年も宙ぶらりんのままにしとくのだめだからな決めるならすぐのほうがいい、このままだと卒業する生徒にも悪いからな。」

「トレーナー、それならレースの方が……」

「レースは長いスパンで結果を出すからすぐに決着はつけれない。そしてチームの絆と

体力づくりにはうってつけのスポーツだ。それにこれは徹底管理と自由主義どっちが正しいかを決めてそれを学園に反映させるのがアオハル杯でもある。別に野球でもトレーナーの能力は発揮できるイヤとは言わせない。そのためにルドルフも説得している。」

「そういうものなのか？」

「そういうものさ。それにチームファーストは今すぐ決着をつけたいはずさ。」

「わかった。トレーナーを信じよう。」

二日後

「理事長代理！二日前はおたくの子達を沢山可愛がつてあげましたよ！」グヘヘ

「丁度良かったです。私も貴方達と話したいと思っていました。」

「トレーナー君とても元気なようだね。」

「ああ、久しぶりにぐつすり眠れたよ、無人島に行く前から夏休み中はずっと働いてたから丁度いい休みだったよ。」

「まあ、そんなことより二日前からおたくの子達になにか異変があつたでしょう」

「!? 何故それを!？」

「凶星のようですね、私の予想では帰ったあとにこっさり自主練を始めてたでしょう?」「ええ、そのとおりです、これまで私の言うことをしっかりと守ってくれていたのに対抗レースのあとに突然過度なトレーニングを始めるようになってしまっ……」

「それは危機感を持つているんですよ。貴方の為に最強のチームになろうとしているのに代表格の二人がオグリに負けちゃいましたからね。」

「そんな危機感をなくすいい方法がありますよ。」

「一体どうすれば彼女たちの無茶を止めれるのですか……」

「今度こそしっかりと決着をつけなければいけませんよ。」

「野球で!」

「?なぜ野球なんですか?」

「レースで決着をつけるとまたオグリが何度も走らないと納得がいかないでしょうし、レース能力は長期的に成長するし判断も難しい、わかりやすい点数での勝負にすればいいんですよ。」

ドアが開いてパッション系記者が出てきた。

乙名史記者「野球などのスポーツも長期的な視点から最終的な成績を決めるので安定した試合にはならないと思われませんがその部分はどうか考えているんですか?」

「何故あなたが……理事長に話したときに記者にも伝えておくって言っていたがあなた

「なんですね。」

「はい！理事長さんからは最強のウマ娘とチームを決める戦いをするときいて居ても立っても居られなくなりました！」

最強のウマ娘を決める戦いを野球で決めるのか……

「ですが、レースと聞いたい何の関係が？」

「彼女たちは魅せることをあまり知りません、ルドルフ、ウイニングライブもウマ娘の大切な部分だよな」

「そのとおりだトレーナー、ウイニングライブも心を込めなければ一流のウマ娘とは呼べない。」

「テレビで放送予定の冬の特番があります。そこで野球を放送するんです。エンタメ能力を鍛え上げレースも強くなりチーム活動について早いうちに学んでもらうそれが私の狙いです。」

「私自身がウイニングライブについてあまり教えることができていないことも知っていたのですね。その提案グラッセやココンたちと相談して考えさせてもらいます。」

話をしたあと理事長室を後にした。

「トレーナー君、本当に私に説明させないで良かったのかい？」

「ルドルフこれが成功すればトレセン学園の宣伝にもなる。だからこそルドルフに話し

てもらわなきゃだ。トレーナー同士の会話にしたかったんだ。」

「その、徹底管理体制と今までどおりにするか早く決着をつける部分を話し忘れていると思うのだがそこはどうするんだい？」

なんで俺それを忘れるかな

「いや、野球でトレセン学園の命運を決めるのはおかしいと思ってな。パワ○ケじやないんだから、それに乙名史さんの前でトレセン学園の命運を決める戦いをするって言うたらどこまで話を大きくされるかわからないからな」

「確かにそのとおりだ、それとトレーナー君、野球をするメンバーは決まっているのかい？」

「オグリとクリークとライスとタイキとウララちゃんとフクキタルが出てくれるのは決まっている。」

「トレーナー君、その面々で野球で勝てるのかい？」

「トレセン学園の命運は握らないけど牽制として大事な勝負だよな、ライスは責任感で出てくれるけど自身がないようだしウララちゃんは元気だけど強いわけじゃないしフクキタルは変な感じだしクリークは本調子じゃないし普通に強いのはタイキぐらいだな。」

「トレーナー君普通に人数が足りないのはどうするつもりなんだい。」

「心当たりがあるからそれを当たれば9人は超えるさ。素人にいい強力な作戦も用意してある。」

「私も参加していいかい？」

「大歓迎だ頼むぞ。」

一週間後

9人以上普通に集まったがピッチャーを用意するのに骨が折れた。ブライアンがピッチャーをしてくれて助かったが。普通に速い球を投げれるし重い球とか付いてそうだしなんとかかなりそうだ。変化球の飲み込みも早いし、何より170キロはやばい「まあ、生徒会の3人のお陰だけだな」

「今年はまだシーズン中だからどこも球場を貸してくれないが来年成功したら年末頃に収録させてもらえるらしいから面白くしないとな。」

「トレーナー何の話をしているんだ？」

「来年の話しき、でも少し早いか、オグリもまだまだ今年走るしな。」

「ああ、私はまだまだ走り足りないぞ、天皇賞秋や菊花賞、ジャパンカップも走るそして有馬記念にも出るぞ。」

ん、なんで予定の倍走るつもりになっているんだ？

「まあ、吉報は多いほうがいいからなオグリこの野球も大事な勝負だ勝ちに行くぞ。」

色々起きたのだが野球を9回まるまる説明するわけには行かないのでダイジェストでお送りしよう。

チームファーストが先攻で始まった。

その前に始球式をした。そしてそれは始球式と呼べるものではなく1打席だけの真剣勝負だった。

ピッチャーは俺木原正樹

バッターは樫本理子理事長代理

キャッチャーはシンボルドルフ

どこに需要があるのかはわからない。だが余興だとしても全力で戦わなければならぬ。何度もうかが生徒に報いる為に。あとルドルフ何度も女房役って言わないで。

フルスイングした樫本代理が担架で運ばれていった。

生徒のお手本になるような素晴らしいフルスイングだった。ボールに当たればそれ

なりに飛んだだろう。一球見逃したあとに美しいフルスイングをして空振りしたあと3球目前を向いたまま立ち尽くしていたあと、桐生院が駆け付け担架を呼んだ。チームファーストの面々が睨みつけてくる。八方睨みかな、あとこんな残念な人だと思つてなかつたよ、育成能力も高いのにメンタルと体力どちらも弱いつて誰がわかるんだ。

その後は相手チーム監督不在のまましばらく続いた。

その状態で5回裏までどちらも点数は動くことはなかつた。相手側のピッチャーリトルココンが覚醒した。様々な変化球を織り交ぜたピッチングに次々抑えられていく。6回表樫本代理が駆けつけた。相手チームこれに勢いづき4番ピターグラッセがソロホームラン、6番リトルココンがタイムリーを飛ばす。2点を取られたがその裏で取り返すことはできなかつた。

7回表ブライアンの体力に限界が近づいている、こちらの秘密兵器の一人ビワハヤヒデを出す。元々は姉妹バッテリーの予定だったがハヤヒデがキャッチャーは頭が大きいく見えるから嫌だと言うことでピッチャーの練習をしていた。ハヤヒデにはブライアンより多くの変化球を覚えてもらい松脂を使わせた。塁に出さずに次の攻撃に移る。

7回裏3番シンボルドルフ出塁、そしてついにオグリがホームランを打った。2点を取り返し同点に入る。タイキシヤトルも快音が出るがフライになる。その後塁には出るがリトルココンが意地を見せた。2点までで抑えられる。

8回表を難なく抑え、8回裏ピターグラッセがピッチャーにつきリトルココンがキャッチャーにつく技巧派のリトルココンとは違い恐ろしい175キロの豪速球で玉を飛ばせてくれない。リトルココンも技巧派で155キロ投げてたけどな。これがウマ娘の力だ。

そして9回を終え延長戦に突入する。しかしそれでも決着はつかず12回でタイプレークに突入する。一塁と二塁が出塁したまま始まる。

この2つのチームはマウンドでなにかわかりあえたようだ。ただ全力でぶつかりたいそういったものを感じる。

タイプレークをなんとか無失点で抑えこちらの攻撃に入る。この空気だがこれは全力の勝負だ。容赦なく行かせてもらおう。タイムに入る。

「ウララちゃん送りバントって知ってる？」

「バントってな〜に〜？」

「ウララちゃんが勝負を決めれる魔法のプレイだよ。」

「二度も当たってないからアタシそれする〜！」

騙して悪いがウララちゃんのお陰で前進する。

そして最後の秘密兵器サクラバクシンオーを投入する。野球のプレイを教えても3工程以上あると忘れてしまうが足を生かさないともしたないので代走を専門にして

もらう。

そしてタイキに話す。「全力で振れ」「YES!」

そして見事なフライになる。とつてもわかりやすくバクシンオーに合図を出す。すつ飛んでいく。送球は恐ろしく速いレーザービーム、送球が恐ろしく速いがバクシンオーも恐ろしく速いなんとか間に合う。

犠牲フライ成功だ。

試合終了2対3こちらのチームキャロツツの勝利だ。

「その、トレーナーあの作戦はいいのか?」

「これはいつの時代も必殺のプレーだぞ。」

「そうなのか。」

「トレーナー君その用意していた作戦って…」

「ウララちゃんも勝利に貢献できたよと大喜びしてるんだからこれで良かったんだ。タイキがバーベキューするっていつてるから手伝いに行くぞ。」

「ああ…そうだね。」

ファーストの面々と来年の2月にもう一度レースをするのが決まったみたいだ。視聴率がよかったらもう一回野球もしてもらおうけどな。

俺は睨まれた。でもオグリが成長できた。大成功だ、まずは秋の天皇賞それに勝利しないとな。

最後になるがブライアンがチームに参加してくれた理由はタイキが練習後などにバーベキューをしてくれていたからだ。今日は観戦に来ている生徒たちにも振る舞っているのですごいことになってるぞ。あとブライアンは野菜を押し付けようとするな。ちやんと食え

芦毛と狂気のローテーション

野球からしばらく経って天皇賞秋の時期になったタマモクロスと戦うためにオグリは出走する。さらに恐ろしいことに菊花賞にも出る。そしてジャパンカップ有馬記念これらも出る。ファンは大盛り上がりする人と俺に殺意をぶつけてくる人にわかれている。記者からも狂気のローテーションと言われている……

俺も辞めさせたいよ。成功するビジョンが見えない。このローテーションで一つも勝つことができればオグリのファンは減るだろう。育成失敗と馬鹿にされるかもしれない。だがオグリが走ると言っている。俺はもうオグリをこのローテーションに耐え勝てるように鍛えるしかない。予定は少し早いが今までは本人の才能と努力に任せる方針だったがトレーニングも本来は来年の4月から始めるものに変えるしかない。

今まではできる戦略を増やすのを重点的にしてきたがオグリの戦法を先行策に固定する。そしてトレーニングをショットガンタッチなどに強化する。今まで遊んでばかりいたのはトレーニングの強化のためだ、理事長への根回しや生徒会活動への協力。全てはオグリを強くさせるためだ。

こうしてオグリの本格的なパワーアップが始まった。

「トレーナー 今日は何をするんだ？」

「水泳をしてビート版でクロールしてくれ」

一日中見守った。

次の日

「トレーナー 今日は何をするんだ？」

「トレーナー！ボクも一緒にトレーニングする！」

「今日は背泳ぎをしてくれ。オグリはビート版だ。」

一日中見守ったあとセブンティーンアイスを奢った。

次の日

「トレーナー 今日はどう泳ぐんだ？」

「トレーナー！今日もボクも一緒にトレーニングするよ！」

「ウチも一緒にやらせてもらおうで！」

「今日はバタフライだ。オグリはビート版だ。」

一日中見守ったあと、今日はたこ焼きを奢った。

次の日

「トレーナー 今日泳ぐのか？」

「最近ボクたち水泳ばかりだけど何か理由があるの？」

「最近どころかずつと水泳だぞ。スタミナは本当にいるからな。」

「今日は私もお願いします。」

「ということで犬かきを頼む。」

その時、不思議なことが起こった。なんとオグリキャップがビート版を持たずに泳いでいる。

スツ「オグリさんビート版なしで泳げるようになったんですね。」

突如背後に現れ話しかけてくる鏡くん。

「いると思ったけど後ろからいきなり現れるんじゃない鏡くん。」

「それにクリークも泳げるようになっています。一体どうしたんですか。」

「後ろからの部分はガン無視か、オグリは長い間水泳していたからついに形になってビート版がいらぬ状態になったんだろう。クリークはオグリに対抗してビート版抜きで泳いでいるだけだ。」

「クリークは無茶をしているんですか、とめたほうがいいのかな。」

「いやバッチリ泳げている。もしかしたら気持ちの問題だったのかもな。それとも不調も原因だったのか、何にせよ今は大丈夫だ。」

「トレーナー！もつと見てくれ！ビート版抜きで泳ぐ私を！」

「すごいはいしいでるな。バッチリみてるからもつともつと泳いでくれ。」

「トレーナーさん！私もオグリちゃんやタマちゃんと一緒に泳げるようになりました。私のこともよく見てくださいいね。」

「クリークって赤ちゃんプレイ意外でもはしゃぐんだな。」

「僕の担当ウマ娘をなんだと思ってるんですか。」

「ブギーマン。」

「なんですかそれ。」

「子供をさらう怪人だ。」

「クリークがそんなことするわけないじゃないですか。」

「そうだな、攫ったりしないもんな。」

成人男性を甘やかそうとしたり、高い高いしたり身のお世話をすべてしようとするけど子供はさらわれないもんな。

「天皇賞と菊花賞どっちもオグリに取らせるつもりだから覚悟しておけよ。」

「そっちこそクリークの恐ろしさをわかると思いますよ。」

二週間後

天皇賞と菊花賞両方敗北した。

タマモクロスの強さを侮っていたのかもしれない。白い稲妻その強さで春の天皇賞を制したのはタマモクロスだということを、完璧な仕上がりで迎えられ相手の狙い通り

のレース展開で抑えられ敗北した。

スーパークリークはあのときついに山場を超えたのだろう。今まででは考えられない強さで完全に敗北した。

「トレーナー……私はいつたいどうすればいいんだ。」

「オグリまだ勝負はこれからだ。ジャパンカップ勝ちに行くぞ。」

……伏兵にやられた。

「トレーナー……」

「全力の勝負だったんだろう、悔しいだろ、でも、それでも前に進むしかないんだ。」

「相手のウマ娘がタマモクロスと君に言ってる、『いい勝負だった』って。」

「トレーナーの夢が……」

……なぜ俺の夢を知っているんだ。

「たづなさんが言っていたんだ。トレーナーの夢は海外のウマ娘に負けない強いウマ娘を作ることだと。」

たづなさん……二年前に言った俺の言葉を覚えていたのか。

俺はルドルフを海外のレースに送り出し惨敗させた。海外遠征を楽観視していたのが原因だ。

理事長の命令でチーム作りをしていたときだった、こう思ったんだ。

「ルドルフは強いやつだ、俺がいなくても大丈夫なはずだ、彼女の夢に俺は最後までついていけないだろうから今回は俺無しで行ってもらおう。」

ルドルフは俺に頼っていたんだ、それを無視して一人にしてしまった。そしてルドルフは海外で負けて繋靱帯炎を発症した。いろんなことが彼女を蝕んでいた。今度は二度とこんなことにならないように体を壊さないように支え続けると大切なときそばにいることを。

ルドルフは奇跡の復活を遂げた。その時俺は離れていた。それでも動き出した、雪辱を果たすためにこのまま日本ウマ娘界最高傑作が世界では相手にならないやつだと思われたまま終わりにたくない。

日本のウマ娘は強い。それを証明したかった。

「オグリ俺の夢はもう叶ったよ、今回のオグリのレースのおかげでさ。」

「トレーナー、でも…」

「いつまでも負けたレースを悔やんでいるわけにはいかないんだ。」

「俺も君のおかげで前に進めるようになったんだけどな。」

それに俺の願いを完璧に果たしてくれるウマ娘が現れるかもしれない。それに今回のオグリの順位は3位タマモクロスは2位海外ウマ娘ファンたちにも日本勢の強さが

伝わった筈だ。

オグリキヤップは勝てなかったが彼女の強さは伝わったはずだ。

「オグリ、俺が言いたいことはわかるな。」

「もちろんだ、必ず有馬記念を勝利してみせる。」

「よし！帰ってトレニーニングをするぞ！」

その前にご飯を食べに行くけどな。

前にも寄った定食屋だけどなオグリが気に入ってくれてるようで助かる。栄養バランスよく食べてるようだが量が多いので本当にバランスがいいのか不安になる。

「トレナー！このすき焼きとても美味しいぞ！」

「オグリ、カツ丼とカルパッチョと茶碗蒸しと焼き鮭を平らげたあとに言われてもそうなのかとしか言えないぞ。」

「てかそのカルパッチョ、サーモンだしその後には焼き鮭食うのはなぜなんだ。」

「トレナー……」

オグリが神妙な面持ちで言った。

「このお店の魚料理はとても美味しいんだ、もちろんすき焼きとかの肉料理も美味しいぞ。ただ魚がとても新鮮で美味しいんだ。」

「なるほど、ところで肉や魚ばっかで大丈夫か？」

「……トンカツを頼もう。キャベツはおかわり自由だからたくさん食べよう。」

お肉も増えるが考えるのはやめよう。お米もおかわり自由なので出禁にならないギリギリをついて帰った。

帰りに桐生院トレーナーがひったくり犯を捕まえているのをみかけた。トレセン学園のトレーナーは全員体力高めなのかもしれない。

芦毛と雪と記憶

12月が始まる頃

雪がシンシンと降り、木々にも降り積もり美しい情景が広がるトレセン学園、そして朝早くに練習場に積もった予想外の大雪を轟音の中除雪する理事長と我々。

グオン！グオン！グオン！

……広いおかげで騒音などがあっても外には聞こえないのだ！

「理事長！そのマシンがあれば我々は不必要なのでは！」

「否定！このマシンは雪が積もっているとパワーが足りなくなる。」

「なるほど！だから我々もスコップで雪かきするんですね！」

理事長代理がふんふん言いながら雪を退かしている。あつ倒れた。ココンとグラッセが呼びかけながら運んでいる。

桐生院「先輩、すごい雪かきうまいですね。」

「イヤミか、君のほうが圧倒的に除雪できてるぞ。」

「トレーナー見てくれ、用務員のおじいさんがすごい量の雪を運んでいるぞ。」

「凄いな、俺達より体力ある、しかしオグリごめんな、練習場がこれでまともに朝練がで

きなくてすまない。」

「昼からの練習までに使えるようにするために私も精一杯手伝うから、任せてくれ！」

「私もあれだけの雪を運べばトレーニングになるかも知れない。私は用務員さんの手伝いをしてくる！」

「ああ、この前腰をやったからしつかり手伝ってくれ。」

二百キロ以上のバーベルを持ち上げるオグリにあれがトレーニングになるかはわからんがよいことなので送り出そう。

目が滑りっぱなしですまないがそういうことだ。

ちなみにこの雪はどうかなるのかという運んだあと生徒たちが雪合戦をする。彼女たちも中学生と言うことだ。

クリスマス頃にもう一度大雪が降るとニュースで見たがその時はオグリはファン主催のクリスマスパーティーに出るからその日以外に降ればいいけどな。ホワイトクリスマスにも限度がある。俺は出席するつもりはない、たまにはファンと水入らずになつてもらおう。

いつもは芝を管理してくれる人がいるが大雪で遅れるそうなので我々で除雪するしかないのだ。

「トレーナー君、除雪活動への協力感謝する。」

「気にするな、生徒たちの指導が俺たちの仕事だからなそのために準備しているだけだ。」

そうは言っても雪かきは大変だ、12月は有馬記念を始め大きなレースが多いからコースで練習をする生徒が増える。一刻も早く雪をどかさないと行けないのだ。さつきから雪かき大変と言いつけているがそれだけ大変と言うことだ。

生徒会の仕事を適度にサボるブライアンもレース場で走るために手伝ってくれている。というかトレセン学園の生徒会が激務すぎるんだ。日頃の仕事に雪かきまで手伝うってそらブライアンもサボるよ。

様々なことを適当に考えながら雪かきを続けた。

途中オグリが雪を運ぶのを手伝ってくれたり、桐生院が凄まじい動きで転けそうになつていた同期を助けたり色々あつたがつつがなく終了した。

そうしたあと生徒たちを朝の授業まで見送つたあとそれぞれの仕事に戻る。俺は偵察で得た資料の閲覧と対策づくりそしてオグリにあつたトレーニングの考案と色々する。練習中の栄養補給用のスポーツドリンクとかを作る。チームトレーナーだとサブトレーナーがこういつたことをするとところもあるので少しだけ楽ができるようになる。

なお乃河くんは鏡くんのチームキャロツツのサブトレーナーだがドリンクなどを用

意するのを禁止されている。何故ならタキオンのトレーナーだからだ。

まあタキオンは一応許可を取ってからのませにくるけどな

俺も理事長にチームトレーナーをしてほしいって頼まれてるけどオグリへの指導が終わるまで待つてもらっている。その後はどうするかは考えていない。まあ普通にチームを作ると思うが。

そういつたことを考えながら仕事をしているとエアグルーヴがやってきた。

「授業中に来るとはどうしたんだエアグルーヴ？」

「今は休憩時間だ。貴様に頼みたい仕事がある。」

エアグルーヴは俺にクリスマススの日に一人暮らしのウマ娘にプレゼントを届けることをしてほしいそうだ。

「寮のウマ娘にも届けるのもしょうか」と提案したが今年は鏡トレーナーと桐生院トレーナーが届けてくれるそうだ。

プレゼント選びも手伝うのでこの時期に話が回ってきたというわけだ。

あと5年前までは俺の師匠のトレーナーがプレゼントを配ってた。立派な髭を蓄えたお爺さんだから純粋な生徒はサンタを信じてくれた。

中学生になっても信じてるのは流石にピュアすぎる。

三年前に俺は乃河くと寮のウマ娘にプレゼントを部屋に届けた。途中起きていた

ウマ娘に『サンタさんだあー』と追いかけられたが二手に分かれて撒いた。

なおバレないようにしなければいけない、本来トレーナーはウマ娘寮に入ってはいけないからだ。

あと純粋な子供の夢を壊さないように決して正体がバレてはいけない。でも高校卒業までサンタを信じさせるのは不可能だと思う。

俺は今年は一人暮らしの生徒にプレゼントを届けるからそこいらへんはかんがえなくもいいな。

マルゼンスキーやミスターシービーはそこいらへん大丈夫だろう。

ちなみに専属トレーナーはプレゼントではない。毎年こつそりやつてるアンケートで欲しいプレゼントの欄に専属トレーナーをかく生徒もいるが人手不足なのとそうぞういいパートナーが見つかるはずもないので無理だ。理事長が昔いろんな生徒に対応できるように生徒に合わせたトレーナーを作りたいと言っていた気がするがトレーナーを作るとするのはよくわからないし首を突っ込むと怖いことになりそうなので忘れることにしよう。

ということでアンケートの結果を見てみよう……

マルゼンスキーはなんとかなるがシービーのほうがわからない、まさかアンケートに答えていないとは基本的にほとんどのウマ娘がアンケートに答えるがここに来てタ

ブーを破るとは……いや違うなジnkクスを破壊したんだ。

『ジnkクスは破壊してこそです！』セエーガー

最近聞いていないSEG○の音と謎の声を聞いた気がするが気のせいだろう。

……………これだ！

電話を取り出し同期の名前を選ぶ。

「之河くん少し懐かしいものを探して買ってきてほしいがいかな」

「ええ、エアグルーヴさんにサンタさんの手伝いをしてほしいと頼まれていたのもちろん手伝いますよ。」

「いややっぱり新しい方にくれちっちゃくなつたやつのほうがソフトを色々揃えなくていいからな。」

「わかりました、時代が求めた例の16ビットのもんですね。」

「察しがいいね、流石は同期一の天才だ。」

「ハハハ、もう同期半分もいないんですね。」

「あと新型が開発中だがそつちは興味が出たら来年のプレゼントに書いてくれるだろうし、好きなものを調べるのに丁度いいからな。」

「来年のことも考えているんですね。それでは僕はタキオンの弁当を作るので失礼します。」

サンタの仕事も入ってしまったがそれよりオグリの有馬記念が重要だ。

……この時期になると考えることが増えるな。

今日もオグリのトレーニングを見よう。

練習用レース場

「トレーナー今日はなんの練習をするんだ？」

「今日はヤエノムテキを連れてきた。併走をするぞ」

雪かきを手伝ってくれたときに併走を頼んでおいた。来年以降ぶつかる相手かもしれないのでちようどいい相手だ。

「よろしくお願いします」

ヤエノムテキが左手を差し出した。

オグリが両手で握り返した。

ヤエノムテキは困惑している。

「私も今日はよろしく頼むぞ」

そう言つてオグリはヤエノムテキから外側に立った。

……オグリ天然なところあるんだな。

菊花賞以来の顔合わせで左手を差し出し（利き手と逆の握手はマイナスの意味があると言われている）まさかの宣戦布告とはなかなかやると思ったがオグリの天然が勝つ

た。併走で外側に立つのは速い方のウマ娘が基本だ。

土壇場で皐月賞に現れたオグリに敗北しダービーはチヨノオー共々オグリに再び敗北し菊花賞で共にクリークに敗北したが強敵であるのは変わりない。皐月賞の時の鬼気迫る走りはとても恐ろしかった。オグリが居なければ彼女が勝っていただろう。チヨノオーもそうだ。

三時間後

「走つていれば体は暖かいが止まるととても寒いな。」

「……今からでも勝負服のへその部分暖かくしようぜ」

「今日の併走はここまでですか？」

「今日はありがとうな。雪も降ってきたし今回はここまでだ、一時間後には止むらしい。」

「ということでも飯でも奢ろう。いい練習相手になってくれた礼だ。」

「トレーナー私も一緒に行つていいか」

「もちろんだ」

「あまり人から施しを受けるばかりではいけないのですが…」

「???」 「見つけたよ。貴方カレンのお兄ちゃんと一緒にいた人でしょ。」

突如背後に恐ろしい気配を感じオグリの方に逃げてしまった。

「アツ、貴方はカレンチャン！」

なぜ喜んでるんだ。

「トレーナー彼女は何者だ？」

「……わからん、俺の知り合いにこんなかわいい妹がいるやつなんて居ないはずだ。」

……いや待てよ、俺の後輩に母親が再婚して美少女の妹ができたとはしゃいでいたアホがいたなその妹か？

「君はまさか円堂の妹……」

「なにその名前、あんまりカワイくない気がする。」

「私のフアンの人もいるみたいですし、これからあそこのカフェでゆったりしながら少し『おはなし』しませんか」

話しくらいなら聞いてあげたほうがいいんじゃないか…

一時間後

「カワイイカレンチャン!!」

「トレーナー一体どうしたんだ」

「カレンってば少し加減を間違えちゃったみたいこんなんじゃ全然可愛くないからもつと修行しなくちゃ」

ウオーカレンチャンカワイイ!

「カレンチャン貴方のお兄ちゃんは今チームキャロッツのサブトレーナーをしています。」

「私とそのチームの所まで案内いたしましょう！」

「トレーナー感情の変化がすぎすぎないか」

「フフ、ありがとう早くお兄ちゃんの所に案内してね」

チームキャロッツの練習場

「モルモットくん今日は寒すぎるから今から屋内トレーニングにしよう。」

「タキオンでは気分転換に将棋をしましょう。あなたは賢いですが鍛えておいて損はないでしょうしね。」

「見つけたよ！お兄ちゃん！」

「貴方は無人島に現れた謎のウマ娘！」

「モルモットくんカワイイ妹がいたんだねえ。私に紹介してほしかったよ。」

「謎のウマ娘じゃないよ！お兄ちゃん昔カレンと約束したことを忘れたの!？」

「……………ハ!?」突如思い出される記憶

「貴方のことを思い出しました。私はとんでもないことを言っていたんですね。そして貴方は夢に進んで私の前にもう一度現れました。どうか今は私のチームに入ってください。」

「喜んで入るよ！」

f i n

「……改めて冷静になると何が起こってるか何もわからないなニュー○イプの会話か」
「トレーナーは正気を失うのは早いけど戻るのも早いな」

オグリのファン感謝イベントが近いがこんな調子でいいんだろうか。